

# MediaNet

## NO.6

1998

慶應義塾大学メディアネット



### <特集> ユーザーサービスの展望：そのありかたを求めて

- 座談会 メディアセンターを利用して  
メディアセンターとの出会いとこれからのこと
- メディアセンターの賢い利用法(?)
- メディアセンターとの関わり方
- 世紀末の‘由々しき’課題
- 歴史を旅できる図書館
- 図書館にカフェと散歩道

Keio  
University  
MediaNet



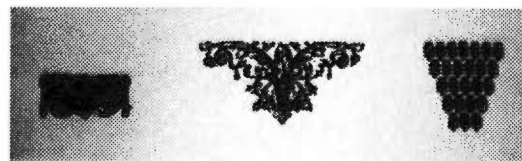
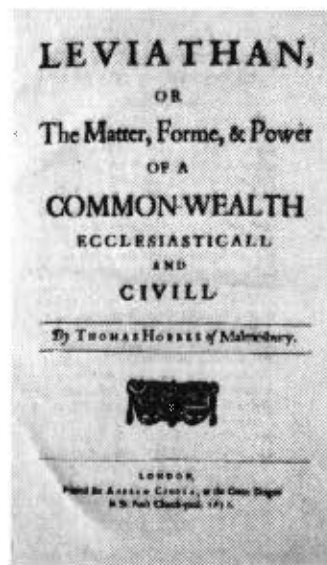
ホブズ「リヴァイアサン」 ロンドン 1651

Thomas Hobbes. *Leviathan; or the matter, forme, and power of a common-wealth ecclesiansticall and civill.* London: Printed for Andrew Crooke, 1651

"FRONTISPIECE", 口絵とはタイトル・ページの前にある絵で、口絵が掲載されるようになったのは16世紀の半ばまで遡る。その当時から、口絵には寓意画的、即ち風刺的な意味を持たせていた。Oxford English Dictionaryによると、"frontispiece"と言う言葉は口絵の意味として1682年に使われており、語源的にはラテン語で「前・見る」との合成語である。口絵のある図書は多い。ここで取り上げるトーマス・ホブズの「リヴァイアサン」には、ホブズが意図した構想をもとに、生涯1500余の銅版画を描き、パリで有名だったアブラム・ボス(1602-1676)によって描かれた口絵がついている(写真左)。

イギリスの政治哲学者であるホブズ(1588-1679)は、クロムエルの革命を逃れた1540年から51年までのパリ在住の間に、この「リヴァイアサン」を書き上げた。リヴァイアサンとは、『旧約聖書』の「ヨブ記」に出てくる鱗に覆われて大きな口を持つ怪獣で、神を除いて地上で最強のものとしてされている。ホブズはそのリヴァイアサンを人間が生命の安全を守るために契約してできた国家にあてはめている。人間は自然状態では「万人の万人に対する闘争状態」で、それを防ぐために契約を結び、共通の権力の政治社会を設立するという考えがホブズの思想的背景にある。

1651年刊の初版は3種類ある。その区別はタイトル・ページ(写真右上)の中央や下にそれぞれ異なるオーナメント、印刷者装飾でできる。第1版第1刷(本塾図書館



第1刷

第2刷

第3刷

所蔵120X/896)は「ヘッド」と呼ばれ、第2刷(1102/281)は「ベア」、そして実際には1680年に出版されたと言われる通称第3刷(ニューベリー図書館所蔵本)には「25 オーナメント」、或いは「5行オーナメント」と呼ばれるものがついている(写真右下)。

3種の初版には、銅版画における濃度の違いはあるものの、すべて同じ口絵がついている。口絵の上半分、小高い丘の裾野には教会や礼拝堂があり、その中央には人間の顔をして王冠を被い、契約で結ばれた人間の絵が細かく描かれた上半身をしたリヴァイアサンが、右手の剣、左手の司教杖を振りかざしている。口絵の一番上を見ると、「ヨブ記」の一節がある。"Non est protestas Super Terram quae Comparetur ei Iob. 41.24", つまり「地上にそれ(リヴァイアサン)に匹敵するものはない」とある。

下半分には左右それぞれ社会を象徴する絵が描かれている。左側の剣の下には、お城、それに対応して司教杖側には小さな教会、同様に花飾りの小冠とミトラ(司教帽)、大砲と稲妻、大砲・小銃・ドラム・ステッキなどの戦利品とジレンマを表現している三つ又槍・牛の角、戦場とイエズス会の討論と続き、左右で世俗的権力と教会権力を対比的に描いている。

この「リヴァイアサン」を手軽に読むには岩波文庫にその翻訳がある。しかし、翻訳ではこの口絵を掲載していない。この口絵は、政治思想史を学ぶものにとってホブズの思想を理解するうえで重要な役割を果たす一方、寓意的な意味を持つ口絵として書誌学的にも見逃せないものの一つである。なお、初版第3刷はシカゴのニューベリー図書館所蔵本を調査した。

(三田メディアセンター課長代理) 市古健次

---

 <巻頭言>

ソフト・インフラへの道	永田 守男	7
10か月をふりかえる	田中 淳一	8
メディアネット雑感	菱田 公一	9
デジタルキャンパス化とメディアセンター	千代倉 弘明	10

## &lt;特集&gt; ユーザーサービスの展望

座談会「メディアセンターを利用して」		11
メディアセンターとの出会いとこれからのこと	宮木 幸一	22
メディアセンターの賢い利用法(?)	柏倉 美和子	23
メディアセンターとの関わり方	原 進	24
世紀末の‘由々しき’課題	玉置 紀夫	26
歴史を旅できる図書館	ハンス・ヨアヒム・クナウプ	28
図書館にカフェと散歩道	今井 宏明	29

データベースの管理と運用	佐藤 友里恵	32
オープンエリア開設までと現状の報告	入江 伸, 千村 文彦	37
パーソナル・コンピュータ利用の登録制について	大橋 真	41
視覚障害者の学習支援について	平尾 行蔵	43
北里記念医学図書館60年のあゆみ	佐藤 和貴	46
理工学メディアセンターの洋雑誌コレクション	館 田鶴子, 三谷 三恵子	51
SFCから見た地区間リソースの依存関係について	島田 貴史	57
SFC教員著作展示コーナーを設置して	杉山 良子	59
中世の印刷文化と東国社会	西岡 芳文	61
医学メディアセンターのホームページ	角家 永, 岡野 純子, 市古 みどり	65
全塾図書廻及入力事業報告	佐藤 友里恵	70

## &lt;海外レポート&gt;

Garden State の白い雲	金子 康樹	72
-------------------	-------	----

---

 <ティールーム>

二十一世紀の科学の夢	米沢 富美子	31
少しだけ疎遠になった恋人へ	池田 真朗	45
マッカーシーと慶應義塾	田村 俊作	60

## &lt;スタッフルーム&gt;

私の妹	岡野 純子	36
猫のいる暮らし	竹内 美貴	56
我が家のゴン太君	風祭 のぞみ	69
イヌから彩色写本の世界へ	市古 健次	76

## &lt;資料&gt;

メディアネット・メディアセンターに関する書誌		77
スタッフによる論文発表・研究発表		77
年次統計資料		79

---

---

ホップス『リヴァイアサン』	市古健次	2
メディアネットニュース		75
三田メディアセンターニュース		21
日吉メディアセンターニュース		27
医学メディアセンターニュース		25,68
小展示ニュース		35,40,44
三田図書館・情報学会月例研究会		50
展示会予告		64
メディアネット・メディアセンターURL一覧		87
編集後記		88

---

## 巻頭言

## ソフト・インフラへの道

ながた もりお  
永田 守男(メディアネット副所長  
ネットワーク・テクノロジー・センター(仮称)開設準備室長  
理工学部管理工学科教授)

日吉メディアセンターの所長(図書館長)職から、塾内五つのメディアセンターのコンピュータやネットワークをまとめるメディアネットの副所長となって1年ほど経ちました。ネットワーク・テクノロジー・センター(仮称)を開設させる準備室の室長も兼ねています。

私は、理工学部の管理工学科でソフトウェアの分野の研究と教育を担当しています。メディアセンターでの日々の業務については、専任職員を中心にした組織がきちんと動いていますので、私が特別な心配をする必要はありません。私のメディアネットでの主たる任務は、藤井所長やその他の方々と話し合いながら中長期的な視野で政策立案を行うこと、それに、利用者である教員や学生の考えに沿った運営が行われるためにはどうすればよいかを考えることだと思っています。

その立場からは、私が就くまで二つの役職がしばらく空席であったために、ネットワーク・テクノロジー・センター(略称NTC)に「開設準備室」という文字がついたままであることが一番の気がかりでした。この組織を正式な形にすることが、まず私がやるべき最初の仕事だと思いました。若干の紆余曲折はありましたが、塾内のさまざまな方々のご努力下、この部分の荷をおろすことができそうな状況になってきています。

この仕事が終われば、本来の私の仕事である塾全体のデジタル・メディアの拡充について、何をしたらよいかを深く考えられるようになるはずです。ここでは、その中間報告として、そうしたことを考えるときの私の基本的なスタンスをお話ししましょう。

私は、専門がソフトウェアなので、こうしたときには、まず、慶應義塾の研究と教育の本質がどんなところにあるのかを調べます。次に、その中でデジタル・メディアが効果的に使えそうなところがないかを考えます。そのうえで、そこに必要なハードウェアを探します。

このような目で塾のネットワークとコンピュータ

のインフラを見直してみますと、ハードウェアとして充実すべきことが残っていることも確かですが、それ以上に広義のソフト・インフラの拡充が大切だと思います。

たとえば、各キャンパスのパソコンの台数を増やしてネットワークで結ぶことは、まだ途上ではありますが、かなり進みました。こうしたことは、いわばハード・インフラです。このようなインフラをどう活用していくのかという発想(ハード・インフラからのアプローチ)も、もちろん重要です。

しかし、慶應義塾の各キャンパスで教職員と学生がどのように考えて活動しているのかを探りながら、より良い研究と教育を追求し、そこで生かすことのできるデジタル・メディアがどんなものなのかを考える、いわばソフトウェア・アプローチが大切な時機になってきたように思います。「人間」の側から技術を見る視点です。

この問題に対する明確な答をまだ私も持ちあわせていませんが、21世紀を目前にして、過去の知恵を生かしながらも、あらゆる面でパラダイム・シフトを迫られている私たちの状況を深く考えることで見えてくるものがあるのではないかと考えています。たとえば、必然的に進む国際化と情報化のなかで、かえって重みを増している「私たちらしさ」や「地域」。世界中の大学の研究や教育で一時的に失いかけた「現実」とか「現場」への回帰など。

一見すると遠回りのようですが、これらの問題に対する慶應義塾の取り組みを支えるソフト・インフラの一つにメディア・ネットがなればと思います。もちろん、それはメディア・ネットだけの役割ではありませんが、少なくともエンジンの一つだと考えています。そのようになるために、利用者の皆様のご鞭撻とご協力を切にお願いいたします。

巻頭言

# 10か月をふりかえる



たなか じゅんいち  
田中 淳一

(日吉メディアセンター所長 経済学部教授)

ずぶの素人が日吉メディアセンター所長に任命されてから間もなく10か月になる。はじめて会議に出たときには耳慣れない図書館学の専門用語に戸惑ったものだが、そんなささやかな「カルチャーショック」よりも、学生や研究者へのサービスを充実させたいというスタッフの熱意から受けた感銘のほうがよほど強かった。とはいえメディアセンターは、図書館系であれ計算室系であれプロの集団である。そこに一人だけ素人が紛れこんだという構図は10か月が経っても変わらないし、これからも変わりそうにない。

定例の打合せや会議でも、私はむしろ事情に疎い一教員、一利用者の立場から発言することが多い。おのずとそういう成り行きになってしまうのだが、最近ではこれでよいのだと思うことにしている。素人利用者の視点がプロの合理的思考の虚について、かえって参考になることも(たまには)あるのではなかろうか、と勝手に考えている。たとえばCD-ROM版の新聞を検索に使うと、その便利さ有り難さを痛感するが、その反面キーワードを明確に決められない場合には自由なリーフィングをできないのが困る。CD-ROMでそんなことをやるのは狂気の沙汰だが、もし昔ながらの新聞紙の山といくらかの熟練があれば数年分の新聞くらは意外なほどの短時間で調べられるものである。生の「物」がただそこに存在することが最大のサービスである場合もあり、電子化されることで失われる情報もあることを私は知ってもらいたかったのである。

この例は私個人のささやかな経験にすぎないが、キャンパスにはありとあらゆる分野の研究者がいて、私には想像もつかないほどの多様な資料利用法があるにちがいない。平成8年の「日吉メディアセンター中・長期ビジョン」には研究者向けサービスの拡充がうたわれており、またスタッフの士気が盛んなのは頼もしい限りではあるが、

折角の熱意が空回りに終わらないためには、多様な資料利用法をきめ細かく把握することが大切だろうと思う。

ところで、この10か月をふりかえてみると、遅ればせながら日吉キャンパスでも教室へのパソコン設置が進み、教員へのパソコン配布も実現することになった。学生への情報リテラシー教育も、カリキュラムとの調整という難しい問題を抱えてはいるものの、まずは年ごとに軌道に乗ってきたといえる。また、キャンパスの情報整備が今後も続けられることは確実であろう。

一方、将来の研究支援体制についてはまだ未知数の部分が多い。現在、新研究室棟建設計画と並行して「日吉研究センター(仮称)設立準備懇談会」が発足し、キャンパスと研究者の特性を生かした研究組織を設計している。この設計図がどのようなものになるにせよ、そこでメディアセンターが重要な役割を果たすことを期待されていることは間違いない。しかし研究支援にせよ教材開発支援にせよ、メディアセンターがどのような支援を提供できるか、また教員がどのような支援を期待するか、お互いにいま一つ鮮明なイメージをもてずにいるというのが現状であろう。これも実践によって効果的な協力関係をつくってゆくほかはないのだろうが、その意味でも研究センター設立の機運はメディアセンタースタッフの熱意を実現するための絶好の機会になるだろうと思う。

## 巻頭言

## メディアネット雑感

ひしだ こういち  
菱田 公一

(理工学メディアセンター副所長 理工学部システムデザイン工学科教授)

1997年10月に理工学メディアセンター副所長を命ぜられ就任した。同時に理工学部計算センター所長も兼任する命を受けた。従って、理工学部の計算機環境の整備と図書館業務の両方を担当することになり、大変重大な仕事を引き受けてしまったことになる。元来、図書館に関しては利用者として学生時代より大変お世話になっているが、運営に関しては知らないことも多く、就任から早10ヶ月が経過したが、知識の不足を痛感している。また、計算機関連の環境については、機械工学科内のLANを立ち上げるなどの仕事をお手伝いさせていただいた経験はあるものの、メディア全体に関しては十分に把握しきれていないのが現状である。このような状況下、私が抱えているメディアネットについての雑感を記し、新任の挨拶とさせていただく。

私の専門は「熱流体工学、流体計測」で、機械工学の一分野である。熱流体の理論的な解析のために大型計算機を使うことは学生時代から行ってきたが、流体計測にパソコンを組み入れるようになってから、計算機システムに係わるが多くなってきた。パソコンに実験データをオンラインで取り込み、データを解析する場合にはネットワークの構築が不可欠になる。10年ほど前に機械工学科にLANを敷設し、電子メール等の環境を整備した事がある。現在では当たり前前の環境だが、理工学部計算センターの職員の助けを借りて、何とか運用することができた。その際わかったのは、ネットワークを運用するために、目に見えないところ(ユーザーがなかなか気がついてくれないところ)で、多くの人が努力をしているということである。これは単にソフトウェアの設定をすればよいのではなく、日々それぞれに対応しなければならない大変な仕事である。その当時から大学院生によるTA (Teaching Assistant) 諸君が献身的に仕事をしてくれたが、使用する人がその本当の大変さを理解してほしいものだといつも感じていた。これは現在の慶應義塾大学情報スーパーハイウェイの運営に関しても同様である。ネットワークが切断されると、ユーザーから直ぐさまお叱りを受ける。早く何とかしろと言われる。早く復旧したいのは管理している本人達自身なのである。もう少しネットワーク管理者の実状を知ってもらいたいと思うことが多々あるこのごろである。ネットワーク管理者

は表には現れない縁の下の力持ち的な存在である。慶應義塾における現在の体制は、その要求に対して決して十分ではない。現在、ネットワークテクノロジーセンターの設立が進行中であり、塾全体での利用者の様々な要求を満足し、より便利に利用できる環境を整備しつつあるが、その組織、人員構成に関しても今後関係者の多大な協力が必要不可欠であると考えている。

一方、図書館業務については、就任以来、外国雑誌の購入について、この円安による所蔵タイトルの一部カットを行わなくてはならなくなった。理工学部の図書委員の先生方と協議し、アンケート調査の結果から削減できるものを検討しているが、円高でしかも図書予算が増加していた時代(バブル経済時代)にはタイトル数も増加したが、これからの予算は減ることはあっても増えることはあり得ないだろう。現在の情報通信環境が整備されている状況下で、近未来の図書のあり方について十分な議論が必要な時期であると感じている。外貨での購入方法のあり方、塾外を含めた図書館同士の連携など、課題は数多い。

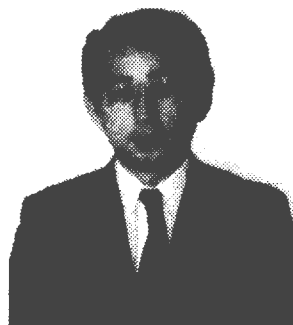
2000年4月に、理工学部には新棟(大学院棟)が落成する。この地下一階にメディアセンターが置かれ、約300台のパソコン、ワークステーションを設置するスペースが計画されている。理工学部では独自に計算機環境を整備し、学部・大学院教育に供してきたが、その拡充が待望されてきた。新棟ではそれらの問題を解決できると期待も大きく、本来のメディアネットの有るべき姿が実現されるものと考えている。すなわち、図書館等の知的著作物とネットワーク環境が融合し、メディアとしてのサービスが利用者に提供されることになろう。学生が使うソフトも知的著作物であり、これらを統括してサービスを行うことが必要になると思う。

21世紀を間近に迎え、メディアに関する所感(思い入れ)を述べ、新任の挨拶にさせていただいた。これらのことを少しでも実現できればと思い、今後努力していく所存である。関係各位には絶大なるご理解とご協力を承るようよろしく願う次第である。

巻頭言

# デジタルキャンパス化と メディアセンター

ちよくらひろあき  
千代倉 弘明



(湘南藤沢メディアセンター副所長 環境情報学部教授)

湘南藤沢キャンパス、メディアセンターの副所長を昨年度よりしております。私の最大の関心事は大学のデジタルキャンパス化です。大学はコンピューター、Internetの進歩により大きく変わろうとしています。この変化は単にスピードアップするとか便利になるとかではなく、大学が本来期待されている教育の質を高めるということではないかと思えます。近代の大学は社会、技術の変化にともない、変革を続けてきました。教育の機能、効率は上がっていますが、ある面では失ってきているものも多くあると思えます。デジタルキャンパスはこの失ってきたものをとりかえす可能性を持っていると考えます。デジタルキャンパス化を行う上でメディアセンターは中心的な役割を担うことができると思えます。

大学教育の現場では「多様性」が求められています。学生ひとりひとりの理解のスピード、興味の範囲、基礎知識の量は大きく異なっています。さらには、この個人の特性と潜在的な才能は関連が深く、無視できません。個人個人にあった教育こそが個人の才能を花咲かせ、その才能は社会の財産になります。それに対し、現在の教育はどうでしょう。一つの教室に多くの学生を集め、教師が60分、90分、同一の情報を与え続ける。これはとても多様性を尊重した教育とはいえません。多様性の教育は将来の我々の課題です。

もう一つ、大学教育にとって重要なのは「有機性」です。教育の中には多くの科目があります。これらの科目の関連付けは学生の理解度を高めたり、興味を引き出すうえで重要です。ところが、現実にはこの関連付けはほとんどされていないのではないのでしょうか。大学では基礎は最初の2年間で教育され、後半の2年で応用である専門教育が行われます。しかし、基礎を学んでいてもそれがどう役立つかわからなければ学生は興味をひきません。また、専門の学生がもっと基礎の勉強をしておけばよかったと後悔するのはよく聞く話です。私事ではありますが、私の「コンピュータグラフィックス」の授業をきいた学生がよくこんなことを言います。「CGを勉強し

て、数学がなぜ必要かよくわかった。」と。今後、科目間の関連をどう学生に伝えるかは非常に重要だと考えます。

このような二つの期待、「多様性」と「有機性」に応えるための新しい教育環境を構築しなければいけません。一番目にやるべきことは教室の改造です。従来の教室は古典的な講義を行うよう作られています。教師は今後、話をするだけではなくになります。講義はビデオ映像、CG映像、音声などのマルチメディアを使った高い表現力のものとなっていくでしょう。このことをサポートするためにも教室のAV化を進めなければいけません。そしてこれらのマルチメディア情報はInternetを介して教室以外の学生に対しても発信されます。また、学生との双方向コミュニケーションができるように、学生用の情報コンセントも必要になります。教室は「デジタルスタジオ」に変わっていくと思われれます。

講義の内容はInternet上に教育ソフトウェアとして公開されるべきでしょう。この教育ソフトウェアは講義の内容を支援し、また、講義を聞かなくても必要なことは学べるように作られるべきです。重要なことは科目間のリンクでしょう。たとえば、CGを勉強しているとき、頻繁に様々な数学があらわれます。このようなとき、今まではわからなくなってしまえば、勉強を中座するしかありません。しかし、ソフトウェアを利用すると数学のページにとび、数学の学習をし、再びCGに戻る。このとき、CGも数学も理解度が高まっている。また、逆の利用もあると考えられます。このような新しい教育ソフトウェアこそがデジタルキャンパス、未来の教育環境において必要です。

新しい大学はこのような教育環境の実験を積極的に行っていくべきです。教育の質を高めるためにはどうしたらいいか。デジタルテクノロジーは大いに役立つと考えられます。メディアセンターの役割は今後、とても大きなものになっていくでしょう。



## 座談会

### メディアセンターを利用して

メディアセンターは情報環境を資源として、義塾の教育研究を支援する役割を担っている。教員とともに利用の中核をなす学生は、メディアセンターをどのように捉えているのだろうか。本年6月30日、三田メディアセンターに三田キャンパス、日吉キャンパス、湘南藤沢キャンパス(SFC)から5名の学生を招いて座談会を開催し、図書館機能に関わる部分を中心に、日頃利用して思うことを語ってもらった。職員からも5名が参加し、学生からの意見や質問への応答、センターの現況についての補足説明を行った。

#### <出席者>

大学院経済学研究科 博士1年	長谷川 浩子
大学院文学研究科西洋史専攻 修士2年	滝川 麻子
法学部法律学科 4年	田端 ひとみ
総合政策学部 4年	甲賀 大吾
理工学部システムデザイン工学科 2年	加藤 敦
三田メディアセンター係主任	藤井 康子
メディアネット本部	細川 達己
日吉メディアセンター係主任	木下 和彦
湘南藤沢メディアセンター係主任	松本 和子
理工学メディアセンター課長代理	酒井 明夫 (司会)

#### 図書館を知る

酒井 皆さんには朝早くからお集まりいただきありがとうございます。この会の司会を務めます編集長の酒井です。『MediaNet』6号では「利用者の声を聞く」という主旨の特集を組むことになりました。本日はメディアセンターを利用して思うことを遠慮なくお話してください。さて、さっそく本題に入りたいと思いますが、4月になると各センターでは新しく来た利用者のために説明会やツアーと称していろいろな催しをやっています。地区によって特色がありますが、大まかに分ければ図書館の使い方、文献の探し方、OPAC<sup>2)</sup>やデータベース検索端末の使い方、になりかと思えます。そのような企画が果たして利用者にどれだけの効果を及ぼしているのかというのは非常に興味のあるところです。もちろんアンケート調査等で反応は得られるのですが、今日は実際思っていることを話してほしいと思います。では

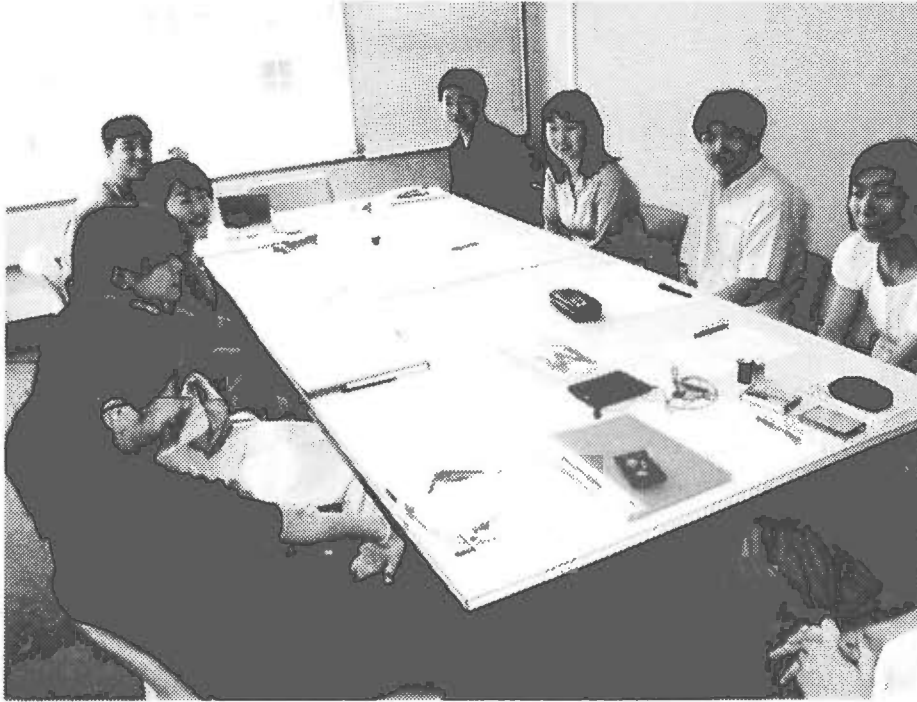
まず三田からいきましょうか?長谷川さんは博士ということで利用の仕方に精通していると思うのですが。

長谷川 経済学研究科博士1年の長谷川です。今年4月から三田でCD-ROMのアシスタントをやっています。古い時代の日本の経済が専攻で、明治とか大正時代の本を良く使います。なので利用については新館より、旧館に行く方が多いです。

酒井 ツアーとか何か参加した経験はありますか?

長谷川 修士2年になった時に申し込みました。普通のツアーではなくて自分の専門分野の文献を調べるツアーです。CD-ROMの“Econlit”<sup>3)</sup>ですか、それでカバーされない部分はどこを探すとか、古い経済学の雑誌の取り寄せとか、ピンポイント式に全部教えてもらったのでとてもありがたかったですね。

酒井 それはいわゆる三田の「ステップアップツ



6月30日、三田メディアセンターセミナー室にて

「ツアー」というものですか?

**藤井** 三田メディアセンターの藤井です。それは今年から名称を変更して「文献探索ツアー」と言っています。日吉から三田に来る時に専門課程に分かれますので、ゼミごとに主題別に行っています。今年からゼミに入っていない学生のためにも、自由参加型の「文献探索ツアー」として、週に1回の割合で行いました。

**長谷川** CD-ROMのアシスタントをしていると、OPACの使い方を教えてほしいと言われます。OPACだけの講習会があればいいのと思うのですが。

**藤井** 三田では確かにOPACだけの講習会はないんです。検討はしましたが、学生には文献探索の流れを教える中でOPACを説明した方がよいということになり、自由参加型のツアーを今年から始めたのです。でもそのような意見があるとすれば、また検討したいと思います。

**酒井** 同じく三田にいる滝川さんは、かつてそういう図書館主催のツアーに参加されたことはありますか?

**滝川** 文学研究科西洋史専攻の滝川と申します。学部4年の時に、所属するゼミで“FirstSearch”<sup>4)</sup>講習会と、史学なので“Historical Abstracts”<sup>5)</sup>のCD-ROMを中心に使い方を教わりました。

**酒井** 効果ありましたか?

**滝川** はい。眼から鱗が落ちるような感動を覚えま

した。それまでツアーの存在自体を知りませんでしたが、本当に役に立ちました。私のゼミでは先生が毎年、学部生と院生のために4月の初めにゼミの一時間を使ってやるんです。先生自らからやってくれるからいいんですけども、ゼミによっては知らないで過ごしてしまう学生もいっぱいいると思います。

**酒井** 田端さんも三田ですが、何か参加されたことはありますか?

**田端** 法学部法律学科4年の田端と申します。私はないんですけども…。

これはゼミにもよると思うのですが、ものすごく調べなくてはならないゼミとそうでないゼミとがあると思うんです。そうでないゼミにいる人たちが、卒論を書くために図書館に行こうとなった時、やっぱり大変だと思うんです。ふだん、法律学科は問題を解くことが多いので、適当に書架から本を探してくると解決がつくんですが、卒論となるとそうもいかない。そういう時にOPACくらい使えないときびしいなと感じます。さっき滝川さんのお話にありましたように、ゼミの最初の授業で、半強制的に使い方を教えたほうが良いような気がします。先生の中でもご自分で資料を探す方と院生に頼まれる方がいらっしゃいますから。先生が全員、OPACの使い方を知っていらっしゃるとは断言できないように思います。

**酒井** 三田ではゼミ単位に何かお知らせはしているんですか?

**藤井** ゼミ単位ごとにはしていないんです。「メディアセンターニュース」やポスター、ちらし、ホームページ等で広報しています。先生の中でもこのようなツアーをご存知の先生と、そうでない先生がいらっしゃるとは思うのですが。

**田端** セミナール委員会とかで広報すれば代表が出て来ますから、じゃあ自分たちのところでも申し込もうかという感じになるかもしれないですね。

**藤井** そうですね。カウンターにも先生ではなくゼミの代表の方が申し込みに来る例もありますのでそ

ここに働きかけるのはいいですね。

## OPAC 談義

酒井 さて、日吉の加藤君、日吉メディアセンターでは昨年度、初めて理工学部の必修科目「理工学概論」とのタイアップが実現して「情報リテラシー講義」というのを実施したわけですが、それを受けたんですよね。その辺の感想をお願いします。

加藤 システムデザイン工学科2年の加藤です。受ける前に、春学期の実験で“ウェブレット変換”というわけのわからないものを探してこいと言われて、すぐにOPACを使わなくてはいけない状態でした。「リテラシー講義」は6月の終わり頃だったので、その時点でOPACの基本的なことは知ってましたからあまり講義を聞いていませんでした(笑)。「リテラシー講義」は秋学期のクラスもあって、最後は12月とか1月とかになります、それ以前に実験をこなすためにOPACを使うと思いますのでもっと早めの方がいいと思います。

木下 日吉メディアセンターの木下です。少し補足すると理工学概論というのは理工学部の学部生全員が対象で、外部からさまざまな研究者を呼んできて講演をしてもらい、理工学に興味を持ってもらおうという授業なんです。その中にメディアセンターの使い方を入れてもらおうと申し入れをしたところオーケーがとれた。学生数が多いので60~90人のグループになってもらい、合計で16回行いました。春学期はOPACを中心にやったのですが、アンケートでは、まさに加藤君が言ったように「OPACをこんなに説明されてもしょうがない」という意見があったので、秋学期は内容を変えて、OPACはわかっていることを前提に、文献の探し方やレポートの書き方という組み立てにしました。こちらも試行錯誤でやっているのが今年度も内容は変わってきているんです。

酒井 それでは次に湘南藤沢のほうに移りたいと思うのですが、甲賀君はメディアセンターで最初に使い方のようなものを習いましたか?

甲賀 総合政策学部4年の甲賀大吾と申します。メディアセンターとの関係は少しありまして、SFCでAVコンサルタントという団体があり、昨年度その代表をしていました。講習はやってたようですが自分は参加しませんでした。“FirstSearch”の講習会は去年くらいからアナウンスを積極的にやっているな、という感じを受けています。ただ、学生が使い勝手をわかっていないというのが個人的な印象なんですけど。あと、ちょっとお尋ねしたいのですが、OPAC

を使えない学生というのはいらっしゃいますか?(笑)

木下 結構いますよ。その辺はギャップが非常にあって、「リテラシー講義」でもOPACなんてもうわかっているという学生、逆に受けてよかったという学生がいて、そうするとどこをターゲットにするかというのが問題になる....。

加藤君は日吉でOPAC相談員をやってくれてるけど、結構聞かれるよね。

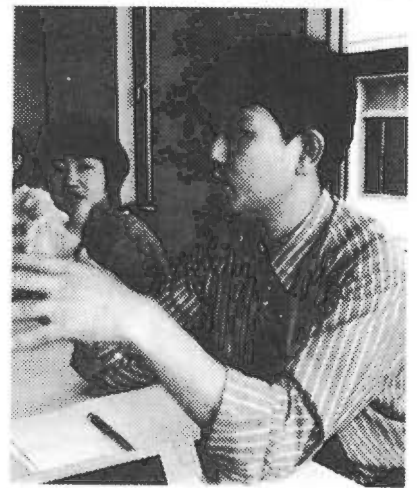
加藤 時期によりますね。4月と5月、あとやっぱりテスト前やレポートの多い時期だと初心者が多いです。目録の利用法のパンフレットを見ながら、OPACと奮闘している人をよくその時期に見かけます。

滝川 私はたまに他の大学にも資料を閲覧しに行ったりするんですけど、慶應のOPACの使い方はわかっているんですが、私のように機械音痴な人だと機種が変わるだけで使えなくなっちゃうんですね。そういう人は結構いると思います。

細川 メディアネット本部で全塾ネットワークを担当している細川です。OPACのインターフェースが変わるんですよ。今後はもっとみんなに馴染みやすいようになるでしょう。Webになるんです。

松本 湘南藤沢メディアセンターの松本です。キャンパス創設からずっと関わってきましたが、以前は三田にもいました。藤沢では創設からカード目録はなくて、OPACです。情報処理でコンピュータは全員必修ですが、UNIXのマシンとパソコンのキーボードの違い、これはやっぱり大きいんですよ。操作性というのはマシンが変わると藤沢の学生であっても変換のしかたが違うとか、いろいろ苦情は聞きます。でも、藤沢の学生のいいところはグループワークがあるせいか、自分で試行錯誤しながら、ノウハウをみんなと共有しようと教えあっています。

長谷川 三田の場合は、年齢層がいろいろですよ。世代的にコンピュータの得意な世代もあれば不得意



「リテラシー講義」でもOPACなんてもうわかっているという学生、逆に受けてよかったという学生がいて、そうするとどこをターゲットにするかというのが問題になる」(木下)

な世代もある。私は、大学がある特定の年齢層だけに使いやすくあるべきとは思っていません。コンピュータが苦手であっても文献が探せるような図書館というのも大切だと思います。限られた人だけがOPACを使えるのではなく、ある程度自力で検索できるような状態が整っているのが理想かなと思います。

松本 藤沢もOPACのガイダンスをやるんですけど、全然参加者いないんですよ。“FirstSearch”や“DIALOG”<sup>6)</sup>は来るんですけど、OPACはいないんです。

酒井 それは、どうして?

松本 藤沢は授業をタイトに入れていますので、わざわざOPACのために時間を空けては来ないのかな。レファレンスカウンターの前に端末があるので、そこで迷ってくればいいんですけど。今年初めて、総合政策学部の一年生の必修の授業に、1コマもらってOPACの使い方をいれてもらいました。やはり半強制にしない限り、あるいは必要に迫られないとOPACを使わない。その時に困ってヘルプが必要。確かにインターフェースが使いやすいものになって、世界共通にひけるようになるといいですよ。

甲賀 藤沢の学生はそういう意味では非常に必要に迫られていて、レポートがちょくちょく出るので本が必要になるんですけど、蔵書数がかなり少ない。図書館じゃないので、SFCのメディアセンターは(笑)。

松本 そここまで言う? つらいものがあるなあ。

甲賀 しっかりしたレポートを書くときは三田に行くような覚悟で本を探さなくてはいけないので、どうしてもOPACが必要なんですね。だから講習をやるまでもなく誰でも使うし、キーボードの違いとか

でとまどうこともありますが慣れれば問題ない。

木下 日吉では本が適当に揃っていて、学生がレポートに使うような本は割りとあるんです。だからもちろんOPACをみんな使ってい

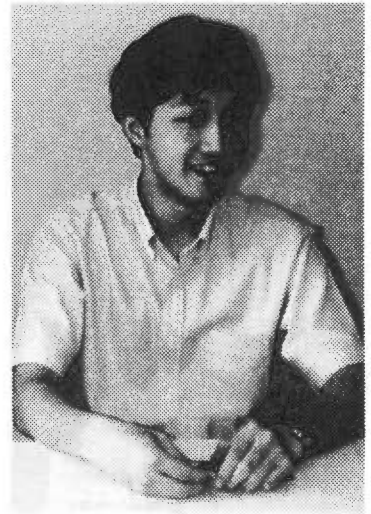
るし、そのように図書館でも指導しています。その一方で、OPACで探せなくても棚に行行って適当なものを使ってるというようなこともある(笑)。こちらとしては、1, 2年生でわかっていたら、3, 4年生で他のキャンパスに行ってもOPACは共通なわけだから、あとあと効いてくるのでとにかく習得してほしい、というスタンスですね。

長谷川 日吉の場合は、みんなぎりぎりまでやらないけれど(笑)。逆に三田に来るともっと時間をかけて勉強したりとか、グループでレジュメを書いたりする。そうすると三田と日吉では規模が違うのでOPACでひっかかるのかな。日吉ではこと足りても三田に来てやっぱりOPACが必要ってことになる。藤井 図書館のツアーをやっているけど、だいたい三田は3年生対象なんですね。文学部は2年生対象ですけど。「OPACは使えますか?」と聞いて、「使えます。」と答える学生も実は細かい操作まではやったことがない、というケースが非常に多いんですね。そういう学生はやはり三田のほうでもフォローしなければと感じます。

田端 たぶん三田に移ってから毎週ちゃんと図書館に行行って調べなくてはならないという状況になるんじゃないですか。日吉で覚えている人はいいのですが、でも三田に行ったらもっと知らない、という気がしますね。

酒井 整理すると、まずは利用者に早い時期にOPACの使い方を習得してもらうこと、利用者が必要に迫られた時にこちらがサポートできる体制を整えていること、もう一つはOPACのインターフェースが使い勝手のいいものであること、になりますが細川さん何か。

細川 次期OPACの要求仕様はわかっているのですが、実際の画面は見えていません。少なくとも今よりは使いやすくなると期待していますが。あと場所を



「藤沢の学生はそういう意味では非常に必要に迫られていて、レポートがちょくちょく出るので本が必要になるんですけど、蔵書数がかなり少ない」(甲賀)



「コンピュータが苦手であっても文献が探せるような図書館というのも大切だと思います」(長谷川)

選ばなくなりますよね。図書館に来なくても、計算室から、研究室から、自分の端末のある人は自分の机からひけるようになるのでその点ではずいぶんよくなるでしょう。

長谷川 今でもインターネットで慶應のOPACにつながりますよね。

細川 Webのように一般的なものではありませんが、一応は。

長谷川 私はやったことがないんですが、他の大学の講師をしてる先輩が自分の家からやっています。慶應にあるのか他の図書館に行かなくてはいけないのかというのを、外部からアクセスして調べられるので時間的にも体力的にも助かるとほめていました。

滝川 私はよくやりますよ。本当に便利さを痛感しています。学校に5千円払えばアカウントがもらえますので、家でもOPACができますし、私は主に“FirstSearch”がやりたいくて入ったのですが、家でも使いたい時にすぐ利用できて本当に便利です。

## CD-ROM も使おう

酒井 さて、ここまではセンターが主に年度の始めにやっている利用説明会やツアーについて意見を伺ってきたのですが、逆にこんなふうなガイダンスをしてくれたらよかったのにとというのがありましたらどうぞ。

加藤 日吉でOPACのほかにCD-ROMのアシスタントをやっていますが誰も使わないです。もっと知ってほしいという気がするんですよ。この間、授業で“へその緒”について調べるといって課題がありました。図書館に行っても調べ方がわからないと言う人もいました。新聞記事のCD-ROMを使えばすぐわかるのになあ、と思ってました。CD-ROMで何が探せるのかをもっと教えたほうがいいと思います。

藤井 日吉は何台CD-ROM 端末があるんですか？

木下 パソコンとしては9台あります。データベースもそれなりに揃えているんですよ。使う学生は使うんです。リピーターが多いっていうか(笑)。その一方で知らない学生も多い。「情報リテラシー講義」で、こういうものも調べられるよと教えてはいるのですが。そもそも話をしている、1年生だとデータベースって何?ってこともありますし。僕らは仕事でデータベースを知っていますが、そういう言葉一つとってもわかりにくいというのはあると思います。

酒井 日吉で使われるCD-ROMというのは、何が一番多いのですか？

木下 新聞記事が断然多いです。

酒井 「雑誌記事索引」はどうですか？

木下 使われますけど、新聞に比べると落ちますね。レポートなどで調べようとしているものには最近のトピックが多いし、求めているものが論文よりも事実のことが多いんですよ。相談受けても、新聞引いて何か出てきちゃうとそれで満足して帰ってしまうし、トピックがなかなか雑誌記事では見つからないということもあるし。

酒井 藤沢ではCD-ROMはどうですか？

松本 使われています。ただ、藤沢にいてCD-ROM じゃだめだと思うのは、メディアセンターまで足を運ばなくてはいけない点です。今はネットワーク上で使えるデータベースに力を入れています。例えば、“FirstSearch”もそうですが、“DIALOG”、“日経ニュース・テレコン”<sup>7)</sup>、朝日の新聞記事、“日経NEEDS”<sup>8)</sup>の統計データとか。藤沢でも授業との連携で新聞の利用はすごく多いです。レポートはカレントトピックが多いし、その他データ分析という授業があって、自分でデータを収集して解析をする。データをどこから取るかという、数値情報はまだネットワーク上に載せられないものも多いのでCD-ROMに利用が集中します。かなり学部の特徴が出てると思いますね。

甲賀 自分が1, 2年生の頃は、新聞をCD-ROMで検索して、それをプリントアウトしてもものすごい束になって、それをまた見て打ち込むというのが非常に煩わしいなという感じでした。それならその文章をそのままUNIXの中で開いて必要な部分だけをカットアンドペーストしたいなとずっと思っていました。

松本 ちょっと注意しなくてはならないのは、著作権。最近、藤沢でもうるさくなりましたが、今後、利用者教育で力を入れなくてはならないのが著作権という気がします。デジタルだから編集



「藤沢はどちらかというとワーキングコレクションに徹底していて、みんなが欲しがるものはネットワークに載せて利用してもらいたいという感じですね」(松本)



「レファレンスにあるCD-ROMは二次資料として検索用に使い、次に一次資料である原文にあたる人が圧倒的に多いです」(藤井)

ネットワークに載せて利用してもらいたいという感じですね。

藤井 三田ではCD-ROMはとても使われています。ここには資料が山ほどありますので、みんな図書館には必ず来るんです。レファレンスにあるCD-ROMは二次資料として検索用に使い、次に一次資料である原文にあたる人が圧倒的に多いです。現時点では、まだそこら辺が藤沢とは違うんだなあと思います。

長谷川 一番使われているのは、「雑誌記事索引」です。アシスタントをしていると本文は出ないんですかってよく聞かれます。「Econlit」のようにAbstractsまで出るものもありますが、それでも「雑誌記事索引」の利用が多いのは、3,4階の雑誌フロアに行けばその雑誌があって本文が見られるというのが頭にあるからだだと思います。あと多いのは法律関係のCD-ROMですね。

田端 過去の判例を調べる時はCD-ROMは便利ですよ。

長谷川 経済学部では教授の研究室からネットワークで「国民経済雑誌」のデータ、「OED」(Oxford English Dictionary)などにアクセスできますが、私の指導教授はそれ以外に「国民経済計算年報」のCD-ROMも使っています。自分のエクセルにダウンロードしてグラフを作ったり解析したりしていますが、三田でもそういう使われ方が多くなるのかなと思います。

も楽だし、複製も簡単だし、でも守るべきものは守らなくてはならない。ところで、さっき甲賀君が図書館じゃないって言ったのはすごくショックなんですけど、三田の書架を見ると、やっぱり図書館のイメージがわく?

甲賀 三田は、図書館ですよ(笑)。

松本 藤沢はどちらかというところ、ワーキングコレクションに徹底していて、みんなが欲しがるものは

## サービスの展開

酒井 ではまたテーマを移しまして、図書館もいろいろとサービスを展開しているのですが、代表的なものにレファレンスというのがあります。また、すでに話の出ましたデータベース検索サービスや、自分のところにはない資料をよそから取り寄せるInter Library Loan, 通称ILL, などもやっています。利用者から要望があった時に、図書館にはいろいろとお手伝いをする手だてがあるわけですが、それらについて皆さんにまた意見を伺いたいと思います。加藤君は、初めて日吉の図書館に来てこういうサービスもしているんだとか感じたことありますか?

加藤 OPACで探した資料が日吉になくて、矢上の理工学部にあつてそれを取りに行ったことが一番最初ですね。

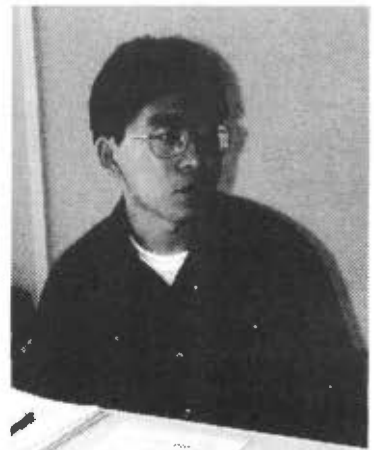
酒井 それについて、どういう探し方をしたらいいのか聞きました?

加藤 それ以前に誰かにOPACの使い方を聞いたんだと思います。それで、日吉になくてもOPACでどこにあるかがわかって矢上に行ったんです。

酒井 それぞれの図書館にそれぞれの目録しかななくて、という時代からみると、今はOPACで他地区の所蔵までわかりますから大きな違いですよ。甲賀君はどうですか?最初から藤沢ですけど、初めてキャンパスに来て、図書館、いやメディアセンター(笑)っていいなと思ったことはありましたか?

甲賀 サービスですか? 残念ながら... (笑)。ワークステーションがたくさんあってオツツごいなというのが第一印象で、その次に、本ないなあ(笑)という感じでした。図書館と呼ぶ人は誰もいないです。メディアとしか呼びませんね。図書館というのは三田とか日吉をさすので、そこら辺の違いにちょっと困ったかな。ただ、どんどん改善されているのが目に見えるので、僕としては好感が持てます。

松本 ありがとうございます(笑)。前は図書館のILLが学部生にできなかったんです。三田



「OPACで探した資料が日吉になくて、矢上の理工学部にあつてそれを取りに行ったことが一番最初ですね」(加藤)

の資料が借りたくても三田に行ってくださいとしか言えなかった。ここ一年くらいでできるようになり、コピーも10円になって。最近はILLを使う人が非常に増えています。でも最初は悲惨でしたね。

滝川 私、実は学部は藤沢だったんです。学士入学して三田に来たんですが、藤沢は本当に本がありませんでした(笑)。

酒井 どちらの学部だったんですか?

滝川 総合政策です。すごく実感するんですが、みずからモチベーションを持って勉強すれば、例えばOPACの使い方とか、“FirstSearch”の使い方とか、取り寄せの仕方とかを必要になってちゃんと覚えるんですよ。それもありますし、最初にも言いましたが、説明会などの存在を知らなかったんですよ。広報にすごく力を入れていただくとか、「資料検索法」という授業がありましたよね。そういうのを全学生のカリキュラムに入れてもいいんじゃないでしょうか?

長谷川 女子高の時に図書館・情報学科の先生が、本の探し方という特別講座をやってくれたので受けました。その時初めて書誌が何かを知りましたし、書誌の書誌というのを知って、本の世界ってこうなのかと思った。そういった意味で大学のカリキュラムの中に図書館の使い方、文献の探し方があって然るべきだと思います。

藤井 一般教養の中には、「研究情報処理」という授業があって、図書館・情報学科の先生と三田メディアセンターの職員とが協力してやっています。センター側は、三田の概要とサービス紹介、図書・雑誌論文・新聞記事の探し方、“FirstSearch”の使い方、レファレンスブックの使い方などを担当しています。

滝川 もうひとつ、私がいた時に気になったのは、本がないせいとかうるさかったです。1階はあれでいいと思うのですが、2階以上は本がある場所で、勉強できる場所なんです。でも誰も注意しない。あれはちょっと問題ではないかと。

長谷川 私もILLができなかったころ藤沢に初めて行きました。入り方からわからなくて(笑)。請求記号調べて歩いていたら書架なくなっちゃった。ほんとに、ILLがないと藤沢の人、たいへんだろうと思います。

滝川 藤沢の人が三田に行くのは大変だったと思います。私は家が近かったからたいして苦ではなかったんですが。レポートを書けとか、卒論を書けとかいうことになるややはりそれなりの本は読まないよ。

私は結構三田に通いましたけど、そうじゃない場合も藤沢の近くの大きめの図書館に行ったりとか、そこで済ますとか。

酒井 藤沢のメディアセンターが藤沢市民図書館と連携しているのは、そういう理由もあるんですか?

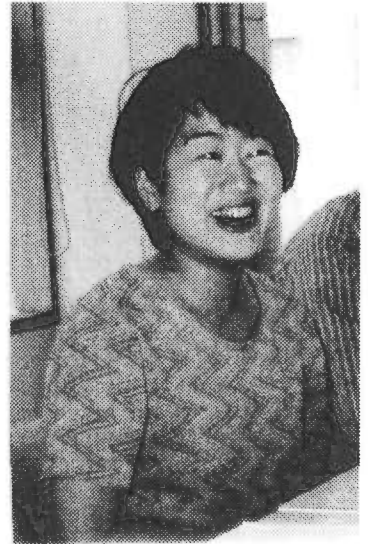
松本 キャンパスを作る時に地域との交流を深め

るといことで、その一つに市民図書館との協力があるんです。今、市民図書館が22万冊で、うちが18万冊です。湘南の名士の文庫が寄贈されていたりするので、日本語の教養書レベルのものはうちより持っていたりする。そういう意味ではセンターとしての方向性を出して、ILLに頼っていくしかない。そこで問題なのは、アカデミアの世界を藤沢の学生は知らない。

甲賀 それほんとにあります。大学のイメージってありますよね。三田に来るとアカデミックな雰囲気か漂っているというか、それは本の多さに比例していると思います。藤沢の学生は本がないせいか、グループワークが多いというせいか、団結してイベント的に何かをやっていくというのがあって、楽しいことは楽しいんですが、アカデミックな感じはしない。

松本 キャンパスも隔離されてるしね。先ほどうるさいという意見がありましたけど、こちらから静かにしろ、という文化ではないんですよ。皆がグループワークでやっているし、私たちが管理して静かにさせるという性質の場所ではない気がする。一応、3階北側を静かにする場所、「静かエリア」って呼んでるんですけど(笑)。そこは重点的に注意をしましょうということ今年からやってるんですが。

長谷川 別の問題として、前は地下4、5階は手続きしないと入れなかったんですが、今はオープンなのでテストやレポート前になると学部生がコピーを取りに来て空かないんです。こっちは重たい製本雑誌を持ったまま、上の階でコピー機を探すので大変。



「私は結構三田に通いましたけど、そうじゃない場合も藤沢の近くの大きめの図書館に行ったりとか、そこで済ますとか」(滝川)

三田も開放されたのはいいんですけど、使いにくいなと思うこともあるんですよ。大学院生には教職員専用のコピー機も貸してもらえると助かります。一時的なものなので、その時期研究者が我慢すればいいんですが、たまたま発表がその時期に当たってしまった場合もありますから。

藤井 以前は、地下4、5階のコピー機は教職員専用しかなかったんです。学部生を含め、利用者がどこでも10円でコピーしてもらえるようにコピー機を設置したと思うのですが、かえって先生や院生に使いづらい状況を作る時もあるんですよ。課題ですね。

酒井 他にこういうサービスがあったらいいのにか、あるいは今やっているサービスでももっとこうしたらいいのにか思うものありますか？

長谷川 私は古い資料を使うのですが、わざわざレファレンスに聞かないと存在すらわからない蔵書があったんです。それが最近整理されたのか、探せるようになった。昨年、修士論文を書く時にその中でどうしても読みたい本があって、聞いてみたら学生には貸せませんという返事だったんです。教職員なら貸せるということだったので、知り合いの方に頼んで見せてもらいました。今は知りませんが、せっかく慶應の図書館にあって、研究のためなら学生でも使えればすごく楽だったと思います。

藤井 そうでしたか。でも、そういう要望とか意見は大事なことなので、言ってください。こちらが気がつかないこともあると思うし。ただし、貴重な資料でお貸しできないものはありますので、それはご理解いただきたいと思います。

酒井 他に何かありますか？

甲賀 ILLで取り寄せた本は藤沢で返せますが、他地区で自分が直接借りた本の返却は、そこへまた持っていかなきゃだめなんですよ。

松本 藤沢に行って借りた本は、藤沢に返しに行かなくてはいけませんよ。「どこでも返却」はできません。

甲賀 「どこでも返却」をしてほしいです。三田で借りた本、日吉で借りた本をそれぞれ返しに行く場合、非常にロスがある。間違っって持っていったりして、「あっこれ三田のですね。」とか言われて。何とかお願いしたいです。

松本 今それは、システムの機能的な制約があるんです。次期システムでは実現するかもしれない。藤沢にいとそう思うよね。

甲賀 OPACとかが完全にUNIXと一緒にになったら、

リクエストとか出せるんですか？つまりILLでこれ借りてくださいとかもメールでできるんですかね。そうしたら足を運ばなくて済むので、そこら辺もなるべく早めにやっていただきたいなと思います。AVコンサルタントはスタジオとか完全にメールで予約受け付けしてます。

藤井 三田でも、ILLをメールで受け付ける話はあがるんですけど、いろんな利用者がいますので現状では難しいところですよ。申し込みには不備や書きもれもたくさんあります。そばでやりとりすればすぐ解決するものも、メールだとまた相手に差し戻してというやりとりが生じる。むしろオンライン上にきちんとした書式を作って、不備がある場合は受け付けないというのであれば可能な話だと思います。

長谷川 CD-ROMのアシスタントをしていると感じるんですが、朝日の新聞記事や“FirstSearch”、“NACSIS-WebCAT”<sup>9)</sup>につながるインターネット端末が少ないですよ。予約できないんですかってよく聞かれるんですが、増えませんか？

藤井 利用者用端末は10月以降ですが増える予定です。目録ホールにあるカード目録が冊子体目録になるので、ボックスが撤去され、その場所に端末が入ります。そこで展開されていきますので、もうしばらくの辛抱です。

長谷川 3階はインターネット端末の利用者が特に多いのでぜひ増やして欲しいですね。特に新聞記事は全文が出ますので。

藤井 一人の利用時間が長いんですよ。

長谷川 「雑誌記事索引」は、回転が速いんですが。

滝川 私は専攻上、ILLで海外から文献を取り寄せることが多いんです。その際に自分でできるところまで探すのですが、あとはレファレンスの方をお願いしているんです。“First Search”を知ってからは、自分の探しているものはほとんど見つかるし、レファレンスの方をお願いすればそれはそれで必



「みんな三田に来てから勉強し始めるので、そこで概説書が少ないとなくなっちゃうんです」(田端)



ず探してくれる(笑)ので、学費を納めているのであれば、ほんとに利用しないもったいないと痛感しています。ILLは海外の面においても非常に重要です。ですから、サービスについては、私は満足しています。

**酒井** ありがとうございます。加藤君何かありますか？

**加藤** いやあ、日吉では誰もそういうの使おうとしないから(笑)。“DNA”<sup>10)</sup>はあるんですけど。この間、新聞CD-ROMが混んでいて、“DNA”が空いていたので、「計算室のアカウントありますか?」って聞いたら、「何ですかそれ?」と聞かれてしまったので返す言葉もなく。そういうのをどこら辺で知っていくのかな?

**松本** 熟生全員アカウントをとるといのは?

**細川** 近いうちにそうなります。

**加藤** 日吉は限られた人しかレファレンスを使わないし、教職員がほとんどです。

**木下** あそこにいるとわかるよね、先生が入れ替わり立ち替わり質問をしにいらっしゃる。

## 蔵書の話

**酒井** 田端さんは何か?

**田端** 相互貸借の話が出たんですが、まだ学部生なので院生の方ほどどうしてもこれがいるというのはないですよ。三田にすれば必ず本が揃うという感じがあるんですが、でも1冊づつしかないの、ちょっと間違えるといつになってもその本がないという状況もある。できればよく使われる本は何冊かづつ三田において欲しいなと思います。

**藤井** 書庫の問題もあり、なるべく重複しないように購入することも考えなくてはいけません。

**田端** 友達は三田に本がないと言って日吉に借りに行くこともあって。

**藤井** 概説書ですね。

**田端** そうです。学部生はあまり専門書を使わないし、判例もまだ使わないし。みんな三田に来てから勉強し始めるので、そこで概説書が少ないとなくなっちゃうんです。日吉は誰も使っていないから行くっていうことになるんですね。

**藤井** 概説書をもっと増やしてほしいと。専門書ばかりに集中しすぎてるんですかね?それぞれの過程に応じた蔵書構成になってはいるんですが。

**田端** 法律学科は特に偏りがあります。資格試験のためだから、別に専門書なんて読まなくてもいいと

いう人がほとんどで、専門書を使うのはやっぱり院生や先生方が多いので、バランスですよ。概説書ばかりおいても資格試験の人のためだけになってしまうのでバランス悪いですし。

**酒井** 加藤君、日吉にある理工関係の文献はどうですか?

**加藤** ちょっと専門的なものであれば理工学部に行ったほうがいいです。10分くらいですからILLじゃなくて取りに行きます。日吉の段階ではむしろ実験に使える本があれば十分です。

**長谷川** 除籍本ってOPACに出ますが、不安なんですけど。自分の使っている本が突然使われないから除籍されてしまうことはないですか?

**藤井** 一度受け入れた本が使われないから除籍しているのではなく、毎年行われる蔵書点検などで、3年たっても行方不明のものなどが除籍されます。

**長谷川** 多分、東洋のなかでも慶應は抜きんでた情報量を持つと思うんですが、みんなそういう意識がない。必要に迫られたりすると、ああすごくいい図書館だなと思います。情報がわかればみんな使ってくれると思うんです。

## 私の要望

**酒井** そろそろ時間も迫ってきましたのでまとめたいと思います。今まで利用者教育や、サービス、あるいは蔵書について伺ってきましたが、最後にその他に要望なりご意見があれば。

**田端** 三田の地下にいると友達が空気が悪いと言うんです。あとは、たまに寒いときありますよね。それと椅子が壊れていて座ったら恥をかくかもしれないという時があります(笑)。

**藤井** 空調の問題ですね。椅子のような場合は危ないので、すぐに近くのカウンターに言ってください。

**長谷川** ここの3階、4階の資料配置が変わるそうですが、利用者の側からすればいい面も増えると思います。ただ、3階はうるさいですよ。キャレルは少ないんですが、4階は研究するのにすごくいい環境なんで、学部生が来てうるさくなるのが心配です。静かさを保ちつつというのはできないですかね。



「近いうちにそう(熟生全員アカウントに)なります」(細川)

藤井 夏休み明けには、3階が和雑誌、4階が洋雑誌になります。今までは主題ごとで、4階が経商法、3階は文。学部生も洋雑誌や統計を使おうと思いますが、多少4階の利用人数が減るのではないかと思います。様子を見ようと思いますが、やはり不安になる研究者の方が多いうで(笑)、しばらくは4階カウンターでの学部生のチェックを従来通り続けます。逆に3階では先生方のために、今までの事務スペースにキャレルを新たに確保します。

甲賀 3つ要望がありまして、一つはSFCの学生は三田メディアセンターをあまりわかっていない。広報をもっとしてほしいなということと、あとSFCのメディアセンターへなんですけど、ひとつひとつの机に全部LANを通してほしい。椅子一つにLAN一つとか。ラップトップからログインできる環境にしてほしい。特にグループ学習室はただのミーティングルームなのでこれはちょっとと思います。

細川 WaveLAN<sup>TM</sup>は使えないんですか?

甲賀 WaveLANはあまり。でも貸し出しができるようになったので下の学年ではだいぶ使っていると思います。僕たちはまだ機種的な問題があって、ラップトップの需要が低いままだったんです。もう一つ、自分が今やっているAVコンサルタントに関連することです。SFCには映像関連の機材がどんどん入ってきてますが、センターの職員で詳しい方の数が限られているんです。コンサルタントという発想はいいと思うんですが、学生も追いつけないようなペースになってきてますので、センターにも機材に詳しい方が増えるともっと有効利用できるかなと。せっかくいい機材が入っているんですから。その辺りの体制をもっと整えていただきたいと思います。

滝川 延滞金払ったり、取り寄せの料金払ったりする時、いつも10円がないとか、細かいお金がないですよ。メインカウンターにしてもレファレンスカウンターにしても。あれは意図的に用意していないんですか?(笑) 延滞するほうが悪いんですけど、お金のやりとりはあると思うので、用意していただくのが便利かなと思います。

藤井 お金を各カウンターにたくさん置けないんですよ。レファレンスは、利用者と一緒に資料を探したりして一瞬カウンターにいない時もあるので危険なんです。朝早いと、おつりがない時多いですね。両替機がそばにあればいいのですが。

## スタッフから

酒井 あとはスタッフのほうから何かあれば。これ

は聞いておきたいとか、自分の仕事上のことでも構いません。

藤井 先ほどの甲賀さんの要望に三田メディアセンターの広報というのがありますが、ホームページは新しい情報をアップデートしているのでもそこから情報を得ることができると思います。ぜひ、見ていただきたいと思います。

酒井 三田の書架がバーチャルで見れるといいですね(笑)。

木下 日吉でも利用案内やホームページを作ってますが、データベースの利用など、必要になった時は何となくカウンターに来て知る、使ってみて納得する、ということが多いと思うんです。手紙で送っても読まないと思うし。「情報リテラシー講義」を理工学部だけでなく商学部も始めて、法学部のほうも法律学科は昔から「法学情報処理」というのがあるし、政治学科のほうも少しやらせてもらって、文学部は検討しているところです。一応、強制的に触れるチャンスを作ろうとはしているんですけど、1年生だとOPACとかは気をつけて聞いていてもそれ以外は……。ちょっといい広報の仕方とか、さっきのゼミナール委員会のような提案があったらぜひ教えてください。

松本 そのサービスを知らせるというのが一番、難しいと思う。うちのホームページ、わざわざ見ないんでしょ?(笑) そういうのがあるって思いつかないのかもしれない。一生懸命作ってはいるけど。

酒井 お話は尽きませんが、そろそろ時間となりました。皆さん、長時間にわたり、貴重なご意見をいろいろとありがとうございました。今後のサービスに反映させたいと思います。



「長時間にわたり、貴重なご意見をいろいろとありがとうございました。今後のサービスに反映させたいと思います」(酒井)

## 注

1) 本誌の前身である「KULIC」5号(1972年)に法

- 学部のゼミ・グループを招いての座談会が掲載されている。
- 2) 利用者用のオンライン目録。Online Public Access Catalog の略。
  - 3) American Economic Association による経済学分野のデータベース。雑誌, 会議録, 図書, 博士論文等の索引・抄録を収録。
  - 4) 米国の OCLC が提供しているデータベース検索サービス。全分野にわたる60以上のデータベースにアクセスできる。
  - 5) ABC-CLIO社の歴史学分野のデータベース。雑誌, 図書, 学位論文の抄録を収録。
  - 6) 米国のDIALOG Information Services 社が提供するオンライン情報検索システム。400以上のデータベースが検索できる。
  - 7) 日本経済新聞社が提供する新聞記事などのオンラインデータベース。
  - 8) 日本経済新聞社の総合経済データベース。
  - 9) 学術情報センターが提供する大学図書館を中心としたWWW版総合目録データベース。
  - 10) 朝日新聞社が提供する朝日新聞本紙全文記事データベース。Digital News Archives の略。
  - 11) 無線LANカード。

### 三田メディアセンターニュース

#### 資料配置の変更について

図書館(新館)の資料配置を下記のように変更しました。

- ・3階を日本語雑誌, 4階を外国語雑誌のフロアに変更。
- ・3階の大学紀要(慶應の紀要は除く)を2階に, 2階の大型本は地下5階に移動。
- ・統計・年鑑類が主題で探せるようにNDC分類を付与。

但しOPACの配置場所の変更はまだされていません。そのため実際の配架場所とデータとが異なり, ご不便をおかけしますが, ご理解とご協力をお願い致します。ご不明な点は, スタッフにお尋ね下さい。

#### AV編集室のオープン

図書館(新館)1階に, AV編集室をオープンしました。AV編集室は, ビデオをはじめとする映像, 画像の編集を行うための施設です。AV編集室には,

- 素材作成のための撮影支援
  - ・デジタルビデオ, デジタルカメラの貸出し
- 撮影した結果の加工支援
  - ・デジタルビデオデッキを使ったカット編集

- ・パソコンを使ったノンリニア編集
- ・映像圧縮のためのMPEGエンコード
- ・S-VHS映像編集のためのアナログリニア編集結果の発表支援

- ・Video on Demand システム

などさまざまな設備があります。それぞれの機器の利用方法については専門のコンサルタントにご相談下さい。なお, AV編集室を利用するためには, 三田メディアセンター主催の講習会を受講して頂くことが必要です。

講習会の受講を希望される方は, AV編集室, または三田メディアセンターデータベースメディア担当(db-media@mita.lib.keio.ac.jp)までお問い合わせ下さい。

#### AV編集室開室時間(通常開館時)

- ・月曜日～金曜日: 10:00am ~ 19:30pm
- ・土曜日: 10:00am ~ 17:00pm

#### 目録ボックスの撤去と冊子体目録の作成

新館1階のカード目録をコピーして冊子体目録を作成しました。そのため, 目録ボックスを撤去しました。OPACでヒットしない古い資料は念のため冊子体目録もひいて下さい。跡地にはパソコンを設置しました(オープンエリア)。

# メディアセンターとの出会いとこれからのこと

医学メディアセンターを利用して

みやま こういち  
宮木 幸一

(医学部5年)

医学部における学生生活において、医学メディアセンターほど日常よく利用する施設はない。

レポート作成のための専門書の閲覧のほか、様々な学術誌が購読されているのでいつも面白い記事があれば読ませてもらっている。

考えれば考えるほど本当にお世話になっていると思う。

そういう意味で今回「MediaNet」の原稿を依頼されたことを非常に光栄に思う。

本稿では、前半に私個人の医学メディアセンターとの関わりについてエピソードを紹介し、後半にこれから医学メディアセンターをより良くするためにお願いしたいことを書こうと思う。

私が医学メディアセンターを初めて利用したのは、信濃町キャンパスにおいて解剖学実習が始まる2年生の秋のことであった。

当時の私は近代医学を飛躍的に進歩させた分子生物学に非常に興味を持っていて、大学のカリキュラムとは別に本塾生理学教室の岡本先生(現在は理研の主任研究員)のもとで個人的に勉強させていただいた。

その際に、DNAの二重螺旋構造を発見したことで有名なワトソン博士が書いた「Recombinant DNA shortcourse」という教科書を読むことを勧められた私は早速、医学メディアセンターに行き、端末を使って文献検索を試みた。

このとき端末操作に不慣れな私を助けてくれたのがI女史で、そのときのことは非常に印象的だった。

というのも、そのときまで私は図書館のスタッフの方というのは図書の管理のプロではあっても個別の医学書に関してはほとんどご存知ないと思っていた。ところが、I女史は日常英語ではほとんど使わないはずの「Recombinant」というスペルをすらすらと端末にタイプして検索して下さっただけではなく、「この本なら第2版がたしか日本語で出ていたと思います」と教えて下さったのだ。

その後わかったことだが、医学メディアセンターの専属スタッフの方は皆、図書に関する知識が豊富で優秀な方が多い。

このことは夕方以降カウンターがアルバイト学生

ばかりになると、サービスの質が大きく低下(失礼)してしまうことからよくわかる。

図書館利用に関して非常に頼りになる専属スタッフの方々が医学メディアセンターにいらっしゃることは、慶應医学部にとって非常に大きな財産であると思う。

最後に個人的なお願いを少し書こう。

医学論文を検索するとき、以前は慶應のMEDLINEをオンライン利用していたが、ユーザーインターフェースがあまり良くないため、最近ではもっぱらPubMed(<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/PubMed/>)を使うことが多くなった。

慶應が自前のデータベースを持つことは、多少お金がかかっても意味のあることとは思うが、検索時のユーザーインターフェースが良くないとユーザが減ってしまい、コストに対する効果が減ってしまうと思う。

それから、非常に多くの医師・研究者が読んでいる雑誌(The LancetやThe New England Journal of Medicine, Nature, Scienceなど)は貸し出し中のことが多く、読みたいときにすぐ読めないということがしばしばある。

予算の問題もあり、簡単なことではないと思うが、「慶應医学」のようにこれらの雑誌に関しては2部購読にして1部は貸し出しを禁じ、常に閲覧可能な状態にしてもらえるとうれしく思う。

読みたい文献がすぐ読める環境というのは医師・研究者にとっていろいろな意味で利益をもたらすだけでなく、イライラしなくて済むので精神衛生上も良い。

ネットワーク化の波が押し寄せて、図書館の運営においても大きな変革が迫られる大変な時期であると思うが、これからも医学・医療従事者にとって頼りになる医学メディアセンターであり続けてほしいと思う。

## メディアセンターの賢い利用法(?)

かしわくら みわこ  
 柏倉美和子

(医学部5年)

医学メディアセンターは、昔ながらのたたずまいを残す北里記念医学図書館の中にある。入り口からして重厚だ。閲覧用の新聞がおいてあるロビーの床も、二階に通ずる階段も木できており、何十年もの湿気と乾燥と暑暖寒冷を重ねて黒光りしている。漆喰の天井はゴシック様式のデコでふちどられている。何故かピンクだ。それが当時の流行を物語っている。そして置いてある古いベンチに腰掛け、隣から漏れてくるトイレの悪臭に鼻を曲げながら、スポーツ新聞を熟読する。格別の味わいである。古い建築物は、合理化されていない分だけ空間が凝っている。しかしそれがかえって人を落ち着かせるのだろう。ここの図書館を愛用しているという人は結構多いと聞く。しかし、この建物の醍醐味はロビーにとどまらない。ぱっと見ではその奥深さはわからないだろうが、ここはまるで忍者屋敷のように複雑な構造をしているのだ。ここが大学の図書館で良かったと思う。もしも小学校の図書館であったならば、おおかたそれは図書館の機能としてよりもかくれんぼのスペースとしての機能を果たしていたに違いない。心理テストで、〈公衆トイレの場所の選び方〉というのがある。入り口に近いほうを選ぶか、奥の方を選ぶかでその人の性格がわかるそうだ。ここの閲覧席も、選び方でその人の性格や気分が如実に反映されるようになってきている。さすが医学部らしく、体に優しい構造なのだ(?)。

まず、いたってノーマルな気分の時。ゲートを通り過ぎたら右に曲がって欲しい。そこには5台のコンピュータ端末と、50ほどの閲覧席がある。MEDLINEや『医学中央雑誌』などの検索システムも充実しており、ドクターや医学生が医学の発展の為に日々努力しようというのなら、この環境は申し分ないだろう。やる気のない時は一番奥の窓際の席にでも座って、ぼおっと外を眺めるのも良い。人々の来し方行く末を客観的に眺めていると、知らぬうちに考え込んでしまう。ここを密かに「哲学の席」と呼んでいる。窓際族もいいものだ。

次に、試験前の詰め込みなどの時、人と会話をするのが面倒くさい、と言う方。ゲートを通り過ぎた後、左に曲がって欲しい。書庫がある。その隅に、まるで後でとってつけたような閲覧席が設けられている。ここは暗い。また密閉された感じである。北里記念

医学図書館の古さを存分に発揮したこの空間では、夏はあまり冷房が効かないので扇風機で暑さをしのぐしかない。昔のまじめな学生が、本に囲まれて勉強しているかのような錯覚に陥る。より孤独を好むなら、頭を打ちそうな狭い階段を上って欲しい。この書庫、なんと4階まである。上に行くほど、席の数も減ってくる。最上階にはたった3席しかない...が、窓から差し込む西日に目を細めながら病弱薄幸の文学青年を気取ってみては如何だろうか。〈deserted〉な空間で、より孤独を楽しみながら勉強をはかどらせて欲しい。

しかし、やる気のあるときばかりに図書館を利用するわけではない。眠くて仕方がないのだが、勉強せざるを得ないとか、たまには自分の部屋のように仮眠を取りながらやりたい時、そういう場合は、カウンターの目の前にあるドアを開けて欲しい。地下に通ずる階段がある。地下には書庫とともに、40程の閲覧席がある。ここは司書の日もとどかず、人の出入りも少ないので、結構好き勝手ができる。缶ジュースを持ち込み(本当はいけない)おおよそやる気の無い姿勢で机に向かう。そして効きすぎる冷房の風に髪をなびかせてうたた寝をする。最高である。うたた寝では物足りなくなったら椅子を三個連ねて仮眠を取るのも良い。地下にあるので静寂さは保証つきである。その有効利用法を知ってか知らぬか、すやすやと船を漕いでいる医学生やドクターをしばしば見かける。窓のむこうは地上に続いている。いざとなったらここから出入り可能だ。別にそんな必要性は無いのだが、もし自分が小学生だったらここを〈秘密の抜け穴〉とでも呼んで冒険ごっこでもするのだろうか、と試験中に夢にふけることも少なくない。

このように、図書館は、ただ知識吸収、情報収集のためだけに存在するのではなく、図書館という空間を利用して、個々人がいろんな感性を働かせる場としても役立っている。それが、勉強嫌いの私のようなものにも図書館に足を運ばせている理由である。もし、この北里図書館が味気ないビルディングになってしまったらとても悲しい。いつまでも、このまま重々しく古めかしく存在しつづけてもらいたいものである。

# メディアセンターとの関わり方

理工学メディアセンターの利用者として

はら すずむ  
原 進

(理工学部訪問研究員)

## 図書館なのか、それとも情報センターなのか

この8年間、理工学メディアセンターはほぼ毎日利用しており、矢上での研究活動を中心とした生活における重要な支えとなっている。センターの現状の詳細などについては他の原稿に譲ることとし、ここでは一利用者として普段思うところについて、平易に触れてみようと思う。

御存知のように、理工学メディアセンターは平成4年度まで理工学情報センター(松下記念理工学図書館)という名称であったが、一般利用者(学生および教職員)からは単に「図書館」と呼ばれることが多かった。センター内では、雑誌/図書資料の閲覧や複写、貸出など紙媒体の利用が主流であった。「情報センター」というよりも、まさに「図書館」と呼ぶ方が私達利用者にはすんなりと受け入れやすかった。

理工学部の4年生になった頃、文献の検索方法について習う必要があった。そこで年度始めに図書館の利用説明会に参加した。そこでは具体的な文献の検索方法に関する1時間程度のレクチャーを受けた。その当時、文献検索のための最強機器としてはJICST(旧科学技術情報センター)のオンライン検索があった。しかしながら、オンライン検索は大変経費がかかるためお薦めできないとの注意もあり、利用することはなかった。おそらく、他の利用者もほぼ同じ状況であっただろう。すなわち、7, 8年前で文献検索という場合、いわゆる電子媒体による検索は一般に不可能であり、まず、目的の文献がこの図書館に所蔵されているのかどうかを確かめ、次に分厚い抄録誌と数時間にらめっこし、それに疲れると、あてもなく過去の公刊論文集や会議論文集をめくるのが典型的なパターンであっただろう。ほとんどの利用者にとって、つい最近までは何を調べるにも何らかの紙媒体と長い時間付き合うのが当然とされていた。

## 今はメディアセンター

ところが、この数年間はキーボードとマウスの操作のみを行って研究室に戻る機会も多くなった。メ

ディアセンターの入口から1階書架に続くメインストリートにはOPAC用のパソコンが何台も並んでいる。その奥には、従来冊子であった文献速報がCD-ROM端末になっていて非常に検索しやすい。さらに左斜め前に進むと、INSPEC, SCI, MathSciなどのデータベースを操る端末がある。これでも不満ならば、カウンターに相談してFirst Searchなどの各種メディアを利用することができる。これらの電子媒体はわずかなキーワードあるいは著者名の打ち込みのみで瞬時に目的の文献にアクセスできる。以前のように抄録誌の非常に細かい字をひたすら追いかけるような苦勞からは解放された。さらに、一部のサービスに関してはインターネットによるアクセスを利用することで、センターまで足を運ぶ必要さえなくなりつつある。これらの設備は、必要適切な量の情報を、すばやく、確実に入手することが望まれる学習者や研究者にとっては非常にありがたい存在である。また、設備の設置などにおける多くの作業をメディアセンターの職員が通常の業務と並行して実施してきたことは、我々利用者が大いに感謝すべきところであろう。英語民が想像するmediaという単語と我々が感じる「メディア」という語のニュアンスにどれ程の違いがあるのかはわからない。しかしながら、「ニューメディア」や「マルチメディア」などの語を好んで用いる我々からする「メディア」のイメージは計算機/情報処理技術の積極的な導入による高度情報化の結果から生まれた媒体を連想するのが普通であり、その意味では図書館も「メディアセンター」に相応しいレベルに到達したといえる。

## 「メディア」の落とし穴

ところが、図書館がメディアセンターとなった後、著者の所属する研究室の学生に異変が起きた。年に十回近くは耳にする次のフレーズである。「OPACを見てもないから、あきらめました。」今の利用者には、OPACにキーワードを打ち込み、結果が出ないと書架まで進むことなく研究室に戻るのが当たり前になっている者もいる。もしもそのキーワードに若干の違いがあっても、ないしは思い込みで勘違いしたキーワードを打ち込んでも、コン

コンピューターは検索結果0件としか表示しない。

このような傾向はある分野の仕事での初期段階の者にとっては非常に不幸なことであろう。以前の冊子体の抄録誌には、細かい字ではあるが似たようなキーワードとそれにまつわる膨大な文献が目飛び込んできた。そして自分の考えていたキーワード自身が不正確であることを知ったり、思わぬ発見をしたり、今一つ曖昧だった検索目的が絞られたりした。また、抄録誌に疲れて直接、論文集を見ることになっても、パラパラとめくって探すことによる新しい発見が多かった。以前はこうして文献の探し方、読み方を覚えたのだと思う。「ASME (米国機械学会)の〇〇の一番新しいやつに載っていたよ。」と先輩に教えてもらい、Aの書架を探しても見つからず、聞き直したら「Transactions of the ASMEだからTだよ。」と笑われ、Tの書架に行ったら、Transactions of the ASME, Journal of ... が何種類もある。また研究室に戻ると「DSMC」と言われ、「Transactions of the ASME, Journal of Dynamic Systems, Measurement, and Control」だとわかったら今度は新しいやつと言われても今月号がない。カウンターで聞いて、それが年4回発行であることを知る。今となっては恥ずかしいことだが、こうしてこの雑誌はどういう名前でも何を扱い、何月頃最新号が届くのかを1誌ずつ憶えていった。これらの知識はディスプレイから得るよりも、書架の前まで進んで得る方が真の知識として定着しやすいはずである。

## 「メディア」は移行ではなく拡張として

現在のコンピューターを中心とした情報収集に優れた点が多いのと同じ分、旧来の紙媒体を中心とし

た情報収集にも優れた点がある。メディアセンターの名前が定着した今の時期に、この点を改めて確かめる必要がある。そして、文献検索を例にあげれば、検索の目的、領域などに応じて検索方法を使い分ける必要がある。端末の結果のみで戻ることでは得られない、書架まで進んで手で触れなければたり着けない発見も多いであろう。

今、利用者に求められていることは前述の「メディア」が持つ語感、すなわち計算機主体の情報化への移行というイメージに捕らわれるのではなく、従来の媒体や情報の流れ方も確保され、計算機支援によって情報収集機能がさらに拡張された総合媒体センターとしてメディアセンターを認識することであろう。その認識に基づいたバランスの取れた利用こそが、大学での学習・研究活動の初期段階の者に大変重要であることを繰り返したい。

## おわりに

読者が学生であれば、メディアセンターの利用方法をどのようにして習ったであろうか?多忙な教員から教わる者は少ないはずであり、メディアセンター職員から教わるのも年度始めの説明会が中心であろう。著者を含め、多くの者は先輩や友人との前述のようなやり取りを通して利用法を習っている。それ以外の方法で利用法に関する議論ができることは少なく、本稿を執筆する機会を得たことに感謝している。本稿の内容は著者の経験に基づいており、一部偏った点もあるかもしれない。それでも、今後メディアセンターで開催する利用説明会や配付物などの各種企画に、少しでも良い影響を与えることができれば幸いである。

### 医学メディアセンターニュース

- 職員の書いたテキスト紹介
- 「医学図書館のレファレンスサービス
- ー日本医学図書館協会継続教育コーステキスト」
- 著者 市占みどり (医学メディアセンター)
- 発行 日本医学図書館協会
- 定価 1,800円
- 日本医学図書館協会では、医学資料・情報を扱うための知識を共有し、加盟館員の能力を向上す

ることによって、利用者によりよいサービスを提供することを目的とした継続教育コースを実施していますが、このたび第3回(1996年)からスタートした「医学図書館のレファレンスサービス」というコースのテキストが発行されました。主な内容は、医学図書館のカウンター担当者が精通すべき基本的な資料の紹介や、オンライン書誌データベースの利用法となっています。

ぜひご一読ください。

## 世紀末の‘由々しき’課題

たまきのりお  
玉置 紀夫

(商学部教授)

### 早稲田大学中央図書館にくる

一斉休暇で三田の慶應義塾図書館(以下 KL と略)が閉館となる期間、私は昨年(97年度)から早稲田大学中央図書館(以下 WL と略)に国内留学することになっている。WL は 91 年 4 月の開館で、まだ新築同様だ。延床面積は 34,162 m<sup>2</sup>で、KL(19,875 m<sup>2</sup>、含旧図書館・研究室書庫)の 1.7 倍以上だ。もっとも蔵書は KL が約 206 万で WL(185 万)を 1 割以上上回っている。

一斉休暇直前の一週間、KL が超多忙であったのに比べると、いま WL はまことに静かである。何か KL と違うようだ。利用基礎人口を KL では三田キャンパス在籍学生数約 11,000 人、WL では理工・人間科学の両学部を除く学生数約 34,000 人として、この数値で KL 入館者数(97 年度:831,320 人)と WL 入館者数(96 年度:1,267,103 人)を除くと、KL 75.6 回、WL 37.3 回となる。WL の学生利用度数は KL の半分である。静けさの原因はここにあろう。由々しきことだ、とはいえわが KL にも問題はあ

### 図書館用 'Terminal Care' が必要である

KL10 数年の最大の変化は、コンピューター導入によるオンライン化である。この夏、図書館のシンボル、目録カード・ボックスが KL から姿を消した。その跡には多目的端末が配置された。このオンライン化の過程で、目立たぬながらある変化が、それもここ数年特に顕著に進んでいるのではないかという危惧が生じた。より高齢の利用者の減少である。この感触は調査によって裏づけられねばならないが、そのような傾向があるとすれば、一因が加齢とハイテク化の格差にあるにちがいない。この種の格差は、これからいつでも発生しうるものと考えなければならない。ハイテク化に追いつけぬ高齢者が図書館から離れてしまうことがあっては、これも由々しき事態だ。

### Double Agent をやめることにしよう

私たち教員は誰でも KL の選書に係わる委員会の

メンバーとなった経験がある。私の所属する学部でみる限り、この委員会の役割はこの 20 年間ぐらいの間に、相当に低下したとあってよい。大学教員としての能動的選書の役割は終息の方向に向いつつあるのかもしれない。私たち教員にはもう一つの「受動的選書」という機能のあることも認めなくてはならない。書店に勧誘されて推薦文を書くことである。私もこれをこれまで度々してきたことを告白し、その反省のうえでこの「受動的選書」はやめるべきだと思う。いわゆる「本屋のマーケティング」に乗せられて、由々しきことに多くの教員が緊急度の高くない、何と大量の書籍を KL に取寄せせしめ、所蔵スペースを埋めてしまったらどうか。選書に係わる教員の Double Agent の役割はこれをやめることにしよう。

選書権者はそれでは誰か。もとよりそれは KL である。「21 世紀の課題」などといわず直ちに選書基準と方法を確立して、これ(あるいは既に十全のものがあればそれ)を教員・学生をはじめすべての利用者に公開したほうがよい。当然のことながら和書・洋書・古書・定期刊行物・マルチメディアのそれぞれに異なる基準方法が立てられるよう。また Double Agent をやめた教員は、専門に応じてアドバイザーやモニターの役割を勤めることになる。

### Non-Refereed Journal を冷遇しよう

狭い研究室の限られた書架スペースの有効利用は、研究室を研究の場とする(というのも妙であるが)教員にとって悩みの種である。その際にもっとも有効な措置は、定期刊行物を研究室に置かぬことである。定期刊行物はそれこそ眼にも止まらぬ早さで積もる。だからまず KL に所蔵されているものから処分する。KL にあっても手もとで参考文献風にするものは従来捨てることが惜しまれた。しかしこれも First Search によって、たとえば通称 Econ Lit すらもハードは不要となってしまった。

同様の措置は KL もこれをとる必要がある。KL3F の一等地を占めている大学紀要その他や、4F のジャーナルの取り扱いには緊急な配慮をはらって、



長期を展望した措置に取りかからなければならない。さもなくば書庫スペースが急速に減少する由々しき事態は止まることがなからう。例えば、我大学各学部の紀要は、塾生にも各学会員にも配布されるのだから、もう少し控えめな処へ置くのも一考ものだ。審査基準などないにも等しい大学紀要などがあるとすれば、それは収書するにも値しない。緊急には、徐々に移動先を考えることぐらいが関の山であろう。したがって、他機関と緊密な連携のうで、紀要の目次・索引のオンライン化を図り、Inter-Library Fax Service Systemを構築することを、長期的に展望しなければならないであろう。

## Why がとくに必要だ

‘5WIH’がジャーナリストの取材・記事執筆の基本とされるが、レファレンス・カウンターに立つライブラリアンにとっても同様であろう。どこのだれが、いかなる問題について訊ねてきて、その回答をいつまでに知りたいのか、をしっかりと記録することなど、どのライブラリアンでも心得ている。しかし5つのW最後のもの、Whyを銘記することは、ライブラリアンにとって決定的に重要かもしれない。

たとえば、金融史と言うマイナーの領域を研究している私が(そういうものであることをライブラリアンが知っていたとして)、国文学のような広大で、

一見かけはなれた領域のことを訊ねてレファレンス・カウンターに来たとする。このときに、もしライブラリアンがWhyを念頭においていたとする。ライブラリアンは、金融史と国文学が何処でどのように関連しているのかを知ることになるであろう。ライブラリアンがこのWhyを身につければ、一見、無関係に見える専門が互いに背中合わせに関連している様子や、多種の専門研究者の相関関係がOJTで把握できるのである。OJTで体得したものをライブラリアンは決して忘れない。

## KL + WL > 2

KLとWLはdoor-to-doorで40分の近さである。私などにとってのWLの魅力は、その貴重書庫である。慶應義塾にすらない、蘭学の最後の世代と英学の初期の世代に属する福沢諭吉のはじめたものが、この書庫には山ほどある。WLを利用しない手はない。WLの場合と異なってKLの由々しき問題は書庫スペースである。KLの1.7倍の空間を持ち、さらに地下第4層がまったく未使用のWLとの提携をさらに進めることは、この問題突破の一助となるかもしれない。早稲田の杜から三田の丘を遠望しつつ、WLとの提携をさらに深めることの必要を、私は痛感せずにはいられなかった。KLとWLの連携強化はプラスαを生むであろう。

## 日吉メディアセンターニュース

### 日吉の新情報処理環境について

#### J12 番教室がパソコン室としてオープンしました

設置されているパソコンの台数とスペックは次のとおりです。

#### (1) デスクトップ型(17台 内1台は教卓機)

IBM PC300PL Model 6862-42J (WindowsNT)

CPU Pentium II 333MHz

17 インチカラー CRT モニター

メモリー 64MB ハードディスク 6.4GB

#### (2) ノート型(85 台)

IBM ThinPad 600 Model 2645-51J(WindowsNT)

CPU Pentium II 266MHz

13.3 インチ XGA(1024×768)

TFT カラー液晶モニター

メモリー 64MB ハードディスク 4GB

#### (3) ネットワークプリンタ(3 台)

RICOH PC Laser SP-10PS

その他、授業や各種イベントにも対応できるようにAV機器やプロジェクタ等が設置されています。

利用時間 9:00 ~ 20:00(土は 15:30)

J13, J411 ~ J417 番教室に情報コンセントが設置されました

各教室をOAフロアーに改装し、情報コンセント以外に、AV機器、プロジェクタ等が設置されました。

#### 情報コンセントの口数

J13 番教室 228口 (学生用224口, 教卓用4口)

J411 ~ J417 番教室 78口 (学生用76口, 教卓用2口)

ただ、現時点では工事が終わった段階で、これからユーザ確認や不正利用防止のためのシステム作りを行いますので、学生用の情報コンセントが使えるようになるまでには時間がかかります。

## 歴史を旅できる図書館

ハンス・ヨアヒム・クナウプ Knaup Hans-Joachim

(経済学部 助教授)

慶應義塾大学に勤めて2年半ほどですが、この間に長年暖めていた日独比較文化に関するテーマを集中的に研究する機会に恵まれました。これは研究に没頭できる時間的余裕ができたことありますが、なによりも身近に利用できる図書館が資料面で私の研究にさらなる可能性を開いてくれたことによるところが大きいのです。慶應義塾大学の三田・日吉の図書館ばかりでなく、早稲田大学との協定によって同大学の図書館を専任教員並みに利用できることも大いに助かっていましたし、レファレンスカウンターの適切で迅速な検索能力も大変ありがたいものであります。

今年の春に「藤山治一」のシーボルト論」という論文を発表しましたが、藤山は早稲田大学のドイツ語教育の創設者でもあり、藤山に関するオリジナルの興味深い資料を同大学の図書館の協力で短期間に収集することができました。藤山は当時の軍事関係の通訳として才能を発揮し優れた仕事を残していますが、特に藤山作成のドイツ語教科書は明治期におけるドイツ語教育の実態を知るうえで不可欠の資料です。藤山の語学の才能は森鷗外も評価していたようで、二人は日本最初の本格的ドイツ語雑誌“Von West nach Ost”(東漸新誌)の共同編集者となっています。この雑誌は日本におけるドイツ語普及を目指した水準の高い雑誌でありました。

さて私は今、ヘルマン・マローンの『日本と中国—旅のスケッチ』(1863年)という著作の分析を行っていますが、同著は東京大学中央図書館の鷗外文庫の他に三田の図書館に所蔵されています。三田に所蔵されている経緯を調べていきますと、プロイセン東アジア遠征隊に関する研究の日本における第一人者であった元慶應大学教授今宮新氏の研究及び資料収集の業績に行きあたりました。塾の優れた研究史の一端に触れられたことは大きな感激でした。

マローンや、現在平行して分析を進めているヘルマン・カイザーリングに関する調査などで伝統

ある慶應大学の図書館を散策していますが、改めて記憶装置としての図書館の重要性ということ最近考えるようになっていきます。私はなによりも書物から立ちこめてくる歴史の匂いを味わうことができ、感覚のなかで歴史を追体験できる図書館が好きです。三田の旧図書館の迷路のような書物の回廊を散策していると、時折、空間と時間の感覚が通常のものから異次元の世界に入っていくように思える瞬間があります。最近、電子図書館構想が展開され、より便利で利用しやすい図書館の可能性が追求されており、私も検索マニアなのでこうした状況は歓迎すべきものと思っています。しかし、歴史的な資料を実際に手に取って、時間を越えて書物に込められている知的精神を肌を通して実感として感じる喜びは、伝統ある図書館でしか味わえない得難い体験であります。

最後に一つ要望なのですが、先日“*Illustrierte Zeitung*”(三田所蔵)に掲載されたプロイセン東アジア遠征隊関係の記事やスケッチのコピーをマイクロフィルムで注文したのですが、慶應はマイクロフィルムについては外注とのことで少し驚きました。ヨーロッパの重要な図書館や古文書館では、マイクロフィルム化は割安でしかも迅速に行われるのが通例です。歴史的資料についてはコピーのあり方が研究にとって重要ですので、この点ご一考頂ければありがたいと思います。

## 図書館にカフェと散歩道

いまい ひろあき  
今井 宏明

(理工学部応用化学科専任講師)

図書館とは、図書を中心とする膨大な情報を保存し、それを一般に広く公開するところである。したがって、その理想的機能として求められるのは、可能な限り多くの情報を適切に保管しつつ年間を通して24時間一般に公開し、簡単な操作によって検索や十分な情報の入手ができるように配慮されていることであろう。また、「読む」という作業に集中するために静粛を原則として、さらに整然としている必要がある。メディアセンターでは限られた空間と予算の中でこのような理想的な図書館作りを目指して日々努力をされていると思う。情報の電子化やネットワークの構築などが推進され、いつの日か無駄のないスマートで洗練された情報提供機関が出現することになろう。しかし、本当にそれで充分なのだろうか?ここで私は、知的な趣のあるカフェ、そして思索に耽る散歩道の機能を図書館に要望したい。

大学が高等教育機関であるとすれば、図書館は教育のネタになる情報を用意しておく知の倉庫かも知れない。膨大な情報の正確な保管と適切な提供こそがその使命である。図書やその他の情報が整然と羅列されていればそれで良い。一方、大学は新たな「知」を創造するところでもあるはずだ。その主役となるのは教員や学生だが、その時、図書館は「知」を育むゆりかごのようなものであって欲しい。新しい「知」を生み出す場所に求められるものは何だろうか?当然、豊富な情報と最新鋭の研究設備が重要であり、実際、それらは現在の図書館と研究棟に(ある程度)備わっている。それに加えて、知的な雑談がおこなわれる自由な交流の場と静かに思索に耽ることができる散歩道が必要であると私は思っている。これらが新しい「知」の熟成のためにとっても大事であるように感じるからだ。

欧米の名だたる研究機関を訪問したとき、それらの場所と日本の多くの大学の環境との相違点として2つのことに気がつく。1つは、欧米の大学や研究所の建物には随所に雑談のためのゆったり

としたスペースが設けられており、ふと廊下で出会った研究者たちが自由に雑談を始めることができる点である。その雑談の輪は時として3人、4人と広がり大きなディスカッションへと発展していく。このような時お互いが刺激しあい、新たなアイデアが生まれる可能性は高い。学生が加われば未成熟だった知的好奇心を大いに刺激されるかもしれない。もう1つは、これらの研究機関が緑豊かな自然か、あるいは味わい深い街並みに囲まれ、研究者や学生が散歩をする場所に事欠かないと言うことである。アイデアに行き詰まった時、仕事に疲れた時、目的を持たずにゆっくりと歩くことはとてもよい気分転換となり、次のステップへの活力となる。新鮮なアイデアは連続的な力仕事からは決して生まれてこないから、気分転換の質が研究の質に直結すると考えることもできる。また、散歩をしていれば問題解決への鍵がふと道に落ちていたり、木の枝にぶら下がっていたりすることもある。大学町には、「哲学の道」と名づけられている思索に適した小径があったりするが、そこを静かな心持ちで歩いていると実際にいろいろな思いが頭の中を駆け巡る。散歩のための環境は知的作業のために実に大切だ。

さて、日本の、特に都会に位置する大学では空間的な制約が大変厳しくなっている。どこもスペースが足りなくて汲々としているのが現状である。重要度が高いものが優先的に押し込まれていった結果、自然と無駄が省かれ雑談するためのスペースなどは真っ先に失われる。ましてや静かに散歩をすることができる豊かな空間など望めるはずもない。器具類が所狭しと置かれた研究棟の廊下ではすれ違うのがやっとなり知的な雑談どころではない。食堂は空腹を満たすためのところ以外のなにものでもない。学生で溢れかえったキャンパスや毎日が忙しい街中には散歩という概念が存在しないかのようだ。わずかに残されたくつろぎのための空間は授業に疲れた学生やサークルの溜まり場と化し、そこには知的創造の雰囲気は感じ

られない。

さあ、ここで提案である。所詮、日本の大学の空間には限りがあり、知的雑談のスペースを随所に配置することや哲学の森を確保することは望めない。そこで、図書館に可能な限りのスペースを都合しあって趣のあるカフェ的機能を作ったらどうであろう。図書館とは多くの人が知的な作業のために出入りするところだ。図書やその他の知的情報を求めて集まってくるから、皆の頭は知的に活性状態である。そのような人が何人か集えば知的な雑談ができる。そのための知的カフェである。低俗なおしゃべりは抑える威厳が必要だが、議論は自由にできなければならない。また、人の出入りは多い方がよい。だから、カフェは人の集まる真ん中になくしてはならない。その点でも図書館は適している。人が行きにくい建物の端にそのような場を設けても意味がない。

知的に活性状態にある人が集い、雑談ができる趣のあるカフェが図書館があれば、そこは散歩道にもなりうると思う。大学の図書館に目的もなく散歩に行く人はかなり珍しいが、散歩のついでにカフェに立ち寄る人は多い。そんな時は本屋に立ち寄り本の背表紙をなんとはなしに追ってみたり

立ち読みすることもあろう。そこには散歩としての楽しみがある。知的な趣のあるカフェが図書館にあればそんな楽しみができるのではないだろうか? 図書館では正確さを求めるために情報の表示が味気ないので散歩道とはなり得ないかも知れないが工夫のしようはある。

米国の本屋にはカフェが併設されていることが多い。人々は散歩のついでに本屋に立ち寄り本を読み、コーヒーを飲みつつ雑談を交わす。正確な情報を提供する図書館のもう一つの側面として、そんなふらっと散歩で立ち寄れる趣のあるカフェとしての機能を期待したい。図書館も空間的にひっ迫しており、多くの雑誌や本が限られたスペースにひしめいている現状は承知している。しかし、トータルな空間の制約が厳しい日本の大学において、人が集まってくる図書館の役割は実に重要だ。ほかでは無理でも、ここにこそ豊かな空間を作るべきではないのか。図書館は情報の倉庫ではなく、レベルの高い「知」のゆりかごにならねばならぬ。現代の情報の主役のインターネットのためのカフェもあるのだ。図書館の真ん中が散歩で立ち寄れるカフェであっていけないはずがない。



(イラスト: 中村亜日香)

ティールーム

## 二十一世紀の科学の夢

よねざわ ふみこ  
米沢 富美子

(理工学部物理学教授)

アメリカの週刊誌「タイム」では、今年の初めに特集号を出して、いろいろな分野での来世紀の予測を行った。二十一世紀に目覚ましい進展が予想される分野は、生命科学と情報の関係した分野である。

実際、われわれが目撃してきた二十一世紀も科学・技術の世紀といわれてきて、さまざまな面で目覚ましい進歩を遂げてきたが、それらの技術の応用面を支えてきた最も基本的なものはコンピューターであった。そしてこのコンピューターは、二十一世紀にもますます大きな働きをしようとしている。上述の生命科学においても情報関係の分野においても、コンピューターは不可欠である。例えば、ヒトの遺伝子をすべて解き明かそうとするヒトゲノム計画は、コンピューターがなければそもそも考えられもしなかった。

「タイム」の予測では、まず、2000年までに遺伝子治療と免疫治療を組み合わせた治療法が確立するといわれているが、これはすでに具体化している。日本でもごく最近に、がんの治療に遺伝子技術を用いる最初の試みがなされ、引き続いて何件かの同様の治療が計画されているという。

また、2025年には人工肺、人工腎臓、人工肺臓の完成に続き、人工足や完全に機能する人工眼球が作られると「タイム」で予測されている。サイボーグさながらの世界である。ちなみに「サイボーグ」というのは、「サイバネティック・オーガニズム (臓器)」の略である。

このなかでも、足や眼球は、おそらくコンピューターを効率的に組み込んだ人工のものが作られるのであろうが、他の臓器に関しては、ロボットのように人工的に作ったものより、クローン臓器を利用したものが早い時期に実現されるのではなかろうか。

臓器移植は、臓器に先天性な欠陥があったり、がんなどで機能しなくなった場合の、唯一の有効な手段であると考えられているが、臓器の提供の数が少

ないことと、拒絶反応が深刻なことが、二大難関である。クローン技術はこれらの難題を同時に解決してくれる。臓器移植が必要な人のDNAを例えばブタの臓器に組込んでおき、適当な時期に取り出して移植すれば、DNAが同じであるから拒絶反応も起こらないことになる。もちろん、人さまの臓器を当てにするという気詰まりな問題も霧消する。

2005年には、インターネットとつながったコンタクトレンズができ、目を閉じていても、電子メールを読んだり、WWWをサーフできるようになるというのが、「タイム」の別の予測である。ある講演会でこの予測について話をしたら、会場からワッと笑いが起こった。情報革命の先にはまったく「何でもあり」と誰もが考えている節があるが、この予測はさすがに、現在のわれわれの想像力を越えたものだという証拠かもしれない。

交通事故や脳出血の後遺症として、半身不随や全身不随に近い状態の人が、ただ一つ自分でコントロールできる目のまばたきで意思を伝えているという話がある。具体的には、五十音文字やアルファベットが書かれたパネルを用意し、その上の文字を補助の人がひとつずつ指差していき、希望の文字のところでもばたきをして文字を選択し、補助の人に書き取ってもらうという忍耐の要る作業である。ひとつの言葉を選ぶのにも数分はかかるだろう。こういう人たちにとっては、上述のコンタクトレンズは救世主になる。

2025年には、脳に直接つながったコンピューターができ、命令の人力が不要になるという。こういう命令を出したいと考えるだけで、コンピューターにそれが伝わるわけである。子供たちに、「お父さんやお母さんが若かった頃は、キーボードというもので入力したものだよ」などと話す時代がくるのだろうか。なんとも愉快なことである。

サイエンスフィクションのような二十一世紀をじっくりと楽しみたいと考えている。

# データベースの管理と運用

さとう ゆりえ  
佐藤 友里恵

(三田メディアセンター)

## 1. はじめに

これまで冊子体の形をとるものが中心であった出版物において、近年、電子媒体の比重が増大しつつある。これら電子媒体の内容としては、冊子体から電子媒体へと媒体変換しているものと、新たな資料が最初から電子媒体で出版されているものがある。それらの形態は、割合からみればCD-ROMが主流となっているが、海外、特にアメリカにおいては、データベースの提供はCD-ROMからインターネットを通じた形へと移り変わってきている。

本稿では、このような社会的状況を踏まえた上で、抄録・索引誌など二次資料を中心とした、文献データベースの管理・運用を行う際に考慮すべき点や問題点について考察してみたい。

## 2. 慶應義塾大学における運用の現状

まず、慶應義塾大学(以下、慶應)各地区メディアセンター内でのデータベース運用の動きについて、以下に簡単に紹介してみよう。

### 2.1. 三田メディアセンター

CD-ROMを中心にして、現在およそ150タイトルに及ぶ各種電子媒体のサービス提供を行っている。CD-ROMの一部は、館内ネットワーク・システムで運用しており、これにより、主要CD-ROMの利用は大幅に増加したと言える。徐々に電子媒体によるサービス体制も整えられつつあり、この秋にはCD-ROMネットワークの新たな展開も計画されている。

### 2.2. 日吉メディアセンター

オンライン系のデータベースが数タイトルの他、CD-ROMが40～50タイトルほどあり、新聞記事(朝日・毎日・読売・日経)や「雑誌記事索引」などが良く使われている。CD-ROMの運用については、CD-ROMアシスタントを雇い、使い方の説明や質問等には答えられるような人材を確保している。CD-ROMのネットワーク化も計画されている。

### 2.3. 理工学メディアセンター

他センターに先駆けてUNIXとNetWareを使ったCD-ROMネットワークを導入した。前者はtelnet接続により全キャンパスから利用できる。中でも“MEDLINE”は医学部からの利用が多い。後者は館内の専用端末によって、またはキャンパス内からtelnet接続で利用できる。“INSPEC”が最も使われているが、最近では“SCI”の検索数も伸びている。

館内ではCD-ROM版の「科学技術文献速報」も頻繁に使われているが、利用方法は専用のパソコンによる。

これらのサービスもWeb版のデータベースの導入や、購入予算の問題から大きな見直しを計る時期となっている。

### 2.4. 医学メディアセンター

データベース利用はかなり多く、中でも“MEDLINE”が突出している。現在“MEDLINE”の利用形態は3通りあるが、NLMが提供している“Free MEDLINE”(インターネット接続)の利用が増加傾向にある。

CD-ROMについては現在すべてスタンドアロン運用であるが、「医学中央雑誌」については、図書館外からの利用も計画中である。

### 2.5. 湘南藤沢メディアセンター

開設当初より、電子媒体による情報提供を推進してきた。但し、初期のデータベースに関しては、PC単体でのCD-ROM利用、専用回線を用いたホスト依存型などが圧倒的に多かったため、キャンパスネットワークを介して利用できるデータベースは少なかったと言える。しかし、ここ数年でデータベースのオンライン化が進み、キャンパスネットワーク上で利用可能なデータベースへ移行したものが増加した。また、CD-ROMネットワークを導入したことも、最近の変化としてあげることができる。

さらに、データベースガイドを出版し、利用者のデータベース利用の案内を行っている。

### 3. 三田メディアセンターの事例紹介

ここでは、具体的な管理・運用の話として、三田メディアセンター(以下、三田)での事例を紹介しよう。

#### 3.1. 三田で導入・提供しているデータベースの種類

三田では先に述べたように、約150タイトルのデータベースをレファレンス・ツールとして利用者に提供している。その利用形態としては、

- ・外部商用データベースへのアクセスによる利用
- ・CD-ROM, ディスケット, 磁気テープ等による内部での利用
- ・商用データベースをローカルサーバに搭載しての利用
- ・慶應制作のデータベースをローカルサーバに搭載しての利用

がある。それぞれについては以下に述べる通りである。

##### 3.1.1. 外部商用データベースへのアクセス

外部のデータベースにアクセスするもので、ダイヤルアップ方式が多いが、“First Search”などのインターネット経由のデータベースも徐々に増えている。オンラインでの利用は、そのほとんどについて代行検索が行われ、課金制度をとっている。

##### 3.1.2. CD-ROM, ディスケット, 磁気テープ

100タイトルを超すCD-ROMを各サービスフロアで提供している。そのほとんどはスタンドアロンで端末固定、またはフロア固定となっている。その一方、ネットワーク上での提供も行い、ここには現在20タイトルが搭載されている。

利用頻度の高いもの、ネットワーク対応が可能なものをネットワークに搭載した結果、ディスクの占有、利用者のフロアの移動、スタッフの出納の負担は軽減された。しかし、スタンドアロン利用のデータベースとネットワーク利用のものとを同じ端末に共有させたところ、ネットワークの利用度が高く、時間帯によってはそれだけで端末が埋まってしまうこともあり、スタンドアロンのものが使えないという事態が生じた。このように端末の占有という問題は依然残ることになり、さらにメモリ不足という深刻な状況が生じてしまったために、スタンドアロン

で利用するものは、各フロアで端末を固定して運用することになった。

また、ディスクは、そのほとんどがOECDのデータベースであり、利用場所も1箇所に限られている。但し、同データベースのCD-ROM版等が出れば、そちらに切り換えていくことを考えている。

一方、磁気テープは、図書館内では利用環境を提供できないために、計算室での利用となっており、現物の管理・運用も計算室側に一任している。しかし、日経NEEDSの一部については、近々磁気テープからFAMEデータベース等への切り替えを検討しており、そうなれば図書館内でのサービスが可能となる。

##### 3.1.3. ローカルサーバ搭載データベース

商用データベースをローカルサーバに搭載し、キャンパスネットワーク上で提供しているデータベースである。WWWの仕組みを利用し、三田のホームページからリンクさせており、利用者が自由にアクセスできるようになっている。

現在、“Web of Science”と“Digital News Archives”が搭載されているが、どちらも全塾としてのサイト契約をしたもので、5センターでの利用が可能である。

##### 3.1.4. 慶應オリジナルデータベース

慶應で独自に制作したデータベースであり、前述のローカルサーバ搭載データベースとシステム的には同じ仕組みである。OPAC、三田の「旧分類和漢書・洋書データベース」「中国語・韓国語・アラビア語図書データベース」などの目録情報データベース、「慶應義塾写真データベース」がある。いずれも慶應または三田で所有している資料からデータをおこし、その検索の仕組みもオリジナルでつくりあげたものである。

### 3.2. 運用

次に、上記データベースを運用していくにあたり、テクニカル側として、データベースメディア担当が現在サポートしていることを述べてみよう。

#### 3.2.1. 機器の選定, 購入, 設定

利用環境を整える第一歩として、機器の選定等がある。テクニカル面からサポートするという意味では重要なことである。

### 3.2.2. ソフトウェアのインストール、バージョンアップ

新規ソフトウェアのインストールと、バージョンアップした時のインストールを行っている。この他、継続もののデータ更新があると、その差し替え、並びにその連絡を行うが、この作業は頻繁に発生するものであり、尚かつ各サービスフロアが分かれているため、多少煩わしい感は否めない。

### 3.2.3. トラブル・シューティング

ソフト面、ハード面でのトラブルすべてにおいて対応をしている。CD-ROMに関するトラブルが際立っており、メモリ不足から生じるものと、対応OSの相違によって生じるものが多い。トラブルの連絡を受けると、まず状況を把握するために現象を詳細に聞くか、現場に赴いて確認を行う。その上で対応をとることになるが(実際は経験から対応策を絞り出すことが多い)、そこで原因が判明しないものや対応不可能な部分は、業者に依頼することになる。

### 3.2.4. ワークシート

個々のタイトルに対して総体的な把握をするために、装備が終わった段階(配架処理前)でワークシートを起こしている。内容・動作環境・契約状況などについての項目を記入するが、調査しきれない部分もあり、また、ワークシートを起こすようになってから受入れしたもののみを対象としているために、まだ不備が多い。

### 3.3. 契約

今年1月より、三田で契約しているデータベースのライセンスを管理することになり、まず、個々の契約状況を把握する意味で、これまで各サービスフロアで個別に契約されてきたものの契約書(一部写し)を集約した。しかし必ずしも契約書が存在するわけではなく、すべてについて把握するにはまだ時間がかかると思われる。

また、これと同時に、各フロア別にサービスしているオンライン検索データベースの一部を除き、全データベースについて、窓口を一本化してライセンス契約を行うようになった。物流での窓口(受人窓口)と契約の窓口とが異なると、稀に契約者宛にCD-ROM等の現物が送付されるなど多少面倒な点もあるが、契約時にその点について明記しておけば幾分回避することができる。

## 4. 今後の課題

データベースを効果的に提供するということは、エンドユーザーにとっては、より速く、より簡単に、そして管理する側にとっては、より安く欲しいデータを入手できることである。ここでは現在の状況をもとに、今後のサービス展開の上で問題となることや、考慮すべきことについて述べてみよう。

### 4.1. より速く

データベースを利用する際に、「速さ」は重要な要素と考えられ、これを左右する要因としていくつかあげられる。例えば、インターネット上のデータベースを利用する場合の「速さ」には、ネットワークの状況(帯域、トラフィック)が影響を与える要因となり、また、CD-ROMなどの製品に関して言えば、コンピュータ自体の性能も、その要因として考えられる。これらの多くは、学内および学外ネットワーク環境の改善や、コンピュータ技術の発展など、図書館外の要素としてとらえることができる。しかし、その改善を受動的に待つだけではなく、効率的な利用のためにはどのような機器、ネットワークが必要とされるのかを検討していくことも、データベースの管理・運用のためには重要な課題となるだろう。

### 4.2. より簡単に

エンドユーザーにとって、データベースが直感的で操作しやすいということは非常に重要であり、そのユーザーインターフェースの問題は軽視することができない。操作方法が複雑であれば、うまく検索できなったり、利用率が低下するなどの悪影響につながりかねない。データベースへのアクセスの入り口として、Webブラウザからのアプリケーションの起動、またはブラウザから直接検索できるデータベースの開発・構築が望まれる。さらには、Z39.50のような、情報検索のためのプロトコル統一化が図られることにより、複数のデータベースを同一環境で検索することも可能になる。こうした新たな標準化技術の動向を探っていくこともサービス計画策定にある程度必要なことであろう。

### 4.3. より安く

データベースは大学の研究・教育活動になくてはならないものとなってきており、それがどのような利用形態によるものであれ、データベースの提供は必須となってきている。その反面、予算には当然ながら限りがあり、その枠の中でいかに必要なデータベースを利用者に提供していくかということが今後



ますます問題となってくる。

データベース購入に関しては、冊子体を購入する予算を電子媒体購入費用に振り替えるといった施策がとられる場合が多いが、これは長期的にみれば図書予算を逼迫していくことにつながりかねない。また、従来のオンライン代行検索のような形式とは異なり、インターネットを通じて学内のどこからでもアクセス可能なデータベース利用については、利用者への直接的な課金は非現実的とも言える。データベース利用を大学での基本活動の一つとしてとらえ、このための予算の裏付けをいかに確保していくかということが、大きな課題になるだろう。

また、この費用を考えるうえで、購入形式が大きな問題の一つとなる。そのデータベースを買い取るのか、それとも利用権のみを獲得するのか、といった違いは支出予算を決定付ける要因となるだろう。また、同時アクセス数やソフトウェアのインストール台数などの制限がある場合には、利用状況を正確に把握した上で客観的に判断し、適正なアクセス数や台数を算出することが必要となる。

さらに、データベースの取捨選択の問題もある。利用状況だけでなく、他の媒体や、関連製品の有無を調査し、よりよいデータベースを時系列を維持しながら採用していくことが、より高い費用対効果を生み出すことにつながる。そのためには個々のデータベースに対する評価基準を明確にしていく必要があるといえる。

#### 4.4. 広報

いかに良いデータベースを導入しても、利用者に使われなければ、宝の持ち腐れになってしまう。データベースの存在を利用者に知らせ、その収録内

容、特徴、また、利用の仕方などを紹介することは、データベースの活用のために、最も重要なことである。ホームページ上での紹介はもとより、各種説明会の積極的な開催や、利用指導体制をいかに形作っていくかということもデータベースの運用上重要なことと考えられる。

#### 4.5. 人材

そして、このようなデータベースの管理・運用を実際に行っていく人材をどう確保していくかということも極めて重要な問題である。データベースの管理・運用のためには、コンピュータやネットワークなどに関する体系的な知識・技術や、データベースの内容すなわちコンテンツに関する知識、また、利用者要求を分析できる知識・技術など、様々な要素が必要とされる。これらの知識をすべて兼ね備えた人材を確保することは困難であるし、また育成することも不可能に近い。したがって、様々な要員構成からなるチームを作り上げていく必要があると言える。

#### 5. 終わりに

データベースは、今後ますます重要性が増してくると考えられる。一方、情報処理技術も日々変化し続けている。効果的なデータベース運用のために、何をすべきかということ、常に考えていかなければならないであろう。

#### 参考文献:

SFC データベースガイド編集委員会編. SFC データベースガイド. 1998 年版. 藤沢, 慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター, 1998, 308p.

#### 小展示ニュース

##### <日吉メディアセンター>

平成9年度

第5回 10月1日～31日 源氏物語の世界 (展示)

第6回 11月4日～12月24日 イタリア フィレンツェ・ルネサンス (展示)

(秋の企画)

映画「ニュー・シネマ・パラダイス」(29名)

「明日を夢見て」(9名)

「イル・ポストイーノ」(32名)

第7回 1月7日～3月31日 D.H. ロレンスとトマス・ハーディ (展示)

平成10年度

第1回 4月1日～30日 福澤諭吉を味わう (新入生

オリエンテーション)

情報リテラシーのすすめ

貴重書展示

第2回 5月1日～6月30日 「不思議の国のアリス」の世界 (展示)

第3回 7月2日～31日 「三田評論」100年記念 展示 広報課, 福沢センター

創刊1000号 三田メディアセンター資料

6月の三田の展示に引き続き日吉で展示

第4回 8月1日～9月30日 作家の手稿・「複製近代文学の手稿100選」(前期・後期で入れ替え展示)

スタッフルーム

## 私の妹

おかの じゅんこ  
岡野 純子

(医学メディアセンター)

私には4歳の妹がいる。名前をモモコという。両親から何でも許され、甘やかされ放題の彼女は自分勝手にわがままだ。自分のベットがあるにも関わらず、毎日両親の布団にもぐり込み、川の字になって寝ているほどの甘えん坊であるかと思えば、目の前で彼女を呼んでも、聞こえているのに知らんふりといった気まぐれな所もある。彼女は、ちょっと訝しげに私の様子を窺っているが、そんな彼女のことを私はいつも少し距離をおいて見ているのだ。

父のことは一目置いているらしく、言いつけを良く聞く。ただ父相手にはふざけたりすることができないので、父と一緒にいる時は、彼女にとってちょっとした忍耐力が必要となるようだ。しかし、父は一見厳しいようで甘い所があり、ねだられると密かにおやつをあげたりするので、それを知っている彼女は、父が食べ物を口にするとすぐさま飛んで行き、甘えた素振りですぐ膝の上に乗る。そして、彼女と二人きりになった父は態度が豹変し、急に赤ちゃん言葉を使いだす。最近は彼女に言葉を教えるのに夢中で、「モモちゃん！こんにちはって言ってごらん」と何十回も言い続けている姿をよく目にする。

母のことは一番甘えられる相手だと思っているらしく、口答えやわがままを言いたい放題だ。母が長電話などをして、少しでも彼女に構わなかったりすると、初めは母の背中を手でたたき、そのうちテーブルに上がってわめきだし、部屋にあるゴミ箱を全部引っくりかえしたりしてダダをこねる。でも、何か困ったことや怖いことがあると母にぴったりと寄り添い、小兎のようにおとなしくなる。母は彼女の

ことを溺愛しているので、何をしても決して怒らない。外出の時も彼女を必ず連れて行くので、彼女の存在は近所でも有名だ。

私のことはただの遊び相手、もしくはたまに家にいる目障りなものとしか見ていないらしく、私が帰ってくれば喜ぶし、遊んで欲しい時はじゃれついてくるものの、私達の間には、ライバル心？対抗心？のような微妙な感情が存在している。

しかし、先日、何年振りかの大風邪を引きベットで寝たきりの私の元に、彼女はそっとやって来た。飽きっぽくて長時間同じ場所にいたことのない彼女が、ずっと私の側に座っていたのだ。言葉は何もなかったけれど、「大丈夫。私が付いているから。」と聞こえてくるような気がして、私は安心して眠りについた。朝にはちゃっかり私の布団の中で一緒に眠っていたけれど...

彼女と私は家族なんだと気づかせてくれた出来事だった。すると、彼女

のことが幼い頃の自分のように思えてきた。私はあんなにわがままではないと思うが、彼女を慈しんでいる両親が十数年前には私相手に似たようなことをしていたのかなと思えてきた。だからいつも私は、彼女と両親の関係を見る度に、居心地が悪く、恥ずかしい思いがしたのかもしれない。私がこうして彼女のことを書いているこの瞬間も、彼女は我関せずをきめこみ、カーテンの隙間からそよぐ風に吹かれながら仰向けで居眠りをしている。目覚めれば、彼女のあの不可思議な言葉でなにか言いだすかもしれない。そうしたら答えてやろう。「モモコ。私達は姉妹なんだよ。ただ少し違うのは、私が人間であなたが犬だということだけ。」



# オープンエリア開設までと現状の報告

いりえ しん  
入江 伸

(三田メディアセンター 係主任)

ちむら ふみひこ  
千村 文彦

(三田メディアセンター)

## 1. はじめに

三田メディアセンターでは、図書館(新館)1階において、本年度から、コンピュータを利用した新しいサービスを展開している。5月6日AVコーナー、6月AV編集室のサービス開始を皮切りに、8月には目録ボックスを撤去し、9月22日からオープンエリアのサービスを開始している。

また、これらのサービスを充実していくため、11月からは、CD-ROMデータベースサーバのリプレースにもなう再整備や、WebOPACのサービスにもなう、端末リプレースが予定されている。これまで目録ボックスが置かれていた図書館の中心的エリアに、コンピュータを利用した新しいサービスが展開されるということは、今日の図書館を象徴する出来事かもしれない。

ここでは、目録ボックス跡地周辺に設置された新しいサービスの概要と一番最初にサービスを開始したAV編集室の現状、および今後の課題を報告する。

## 2. 新しいサービスの概要

これらのコンピュータを利用した新しいサービス

を提供している場所は、次の3つのエリアから構成される(図1参照)。

### (1)オープンエリア (写真1)

Windows NTを搭載したパソコンを30台設置し、インターネット、電子メールやデータベース検索、データ加工、資料作成を行うことができる。また、このエリアでのCD-ROMデータベースの検索も11月後半を目指して準備している。

利用できる主なソフトウェア

- ・ Microsoft Internet Explorer
- ・ Netscape Navigator
- ・ Microsoft Office97
- ・ Microsoft FrontPage 98
- ・ TSP
- ・ Adobe Acrobat
- ・ Becky!
- ・ AL-Mail

### (2)AV編集室

デジタルカメラ、ビデオの貸出や、デジタルビデオのカット編集・MPEGへのエンコードを行うこと

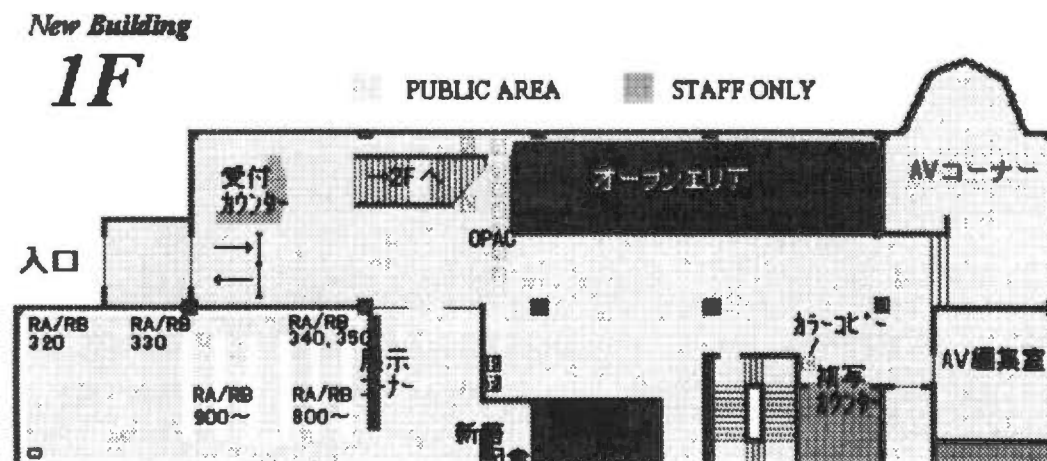


図1 オープンエリア、AVコーナー、AV編集室平面図  
(三田メディアセンターホームページレイアウト図を一部修正)

ができる。また、VODシステムも用意され、作品の発表も可能となっている。

### (3)AV コーナー

DV, S-VHS, Hi8, MD, カセットテープ, レコードの視聴が行える(写真4)。

## 3. 計画立案での課題

### 3.1 伝統と雰囲気にあわせる

伝統的な図書館の雰囲気を壊さないように、その中心エリアに数十台のパソコンを設置する。これは、思っていた以上に難しい課題であった。

はじめは、OAデスクを並べ、40台以上のパソコンを設置するという計画であったが、万人の納得する案ができないため、専門家の意見を取り入れることになり、デザインを含め、業者のコンペを行うこととなった。

コンペにあたっては、できるだけ多くのパソコンを設置したいという意見もあったため、以下のそれぞれのパターンについて提案を依頼した。

- (a). パソコンをできるだけつめる案
- (b). ゆったりとした雰囲気の案
- (c). これら(a), (b) の中間案

コンペの結果、比較的ゆったりした案が選定され、オープンエリアに設置するパソコンは30台と決定された。

初期の計画では、AV編集エリアはオープンエリアに連続して、AVコーナーに展開することとなっていた。しかし、AV編集を行う場合、共同作業が多く、騒音が心配されるため、AV編集エリアを当時ビデオ・レコード関係の機器が設置されていた部屋に展開することとした。

### 3.2 共通基盤としてのコンピュータ環境

利用者にできるだけ同一の利用環境を提供するために、オープンエリアのネットワークは、計算室のネットワークグループに参加することとした。また、利用方法や基本的な操作方法もパソコン教室と同様とした。しかし、図書館では計算室に登録していない利用者でも検索等のサービスは行えるよう設定することになった。

設置するパソコンは、共通の利用環境、ユーザ認証の問題、セキュリティ対策、利用可能ソフトを考慮し、Windows NTとした。インストールするソフトも計算室で設定するものを元に検討し、利用者の要望や費用等も考慮して、若干の変更を行うこととした。



写真1 オープンエリア

### 3.3 プリンター問題

プリンター問題はたわいない問題にみえながら、いろいろな側面で常に論議される問題であった。課題は以下の2つに整理される。

- (1) ネットワークプリンターは使いにくいので、パソコン1台ずつにプリンターをつけたい。
- (2) 印刷に伴う消耗品や紙はだれが用意するか。個人で紙を用意する場合は、自分で紙をセットするためにネットワークプリンターは利用できない。

これについてはまだ明確な結論が出ていないが、オープンエリアでは以下のような方向付けをした。

- (1) 今後、パソコン数が増えていく中で、パソコン1台にプリンター1台という構成を維持することには無駄が多い。
- (2) 作業結果を、プリント出力だけではなく、フロッピーやファイルサーバへの蓄積等を可能にすることで、プリント出力に頼る割合を減らしていく。
- (3) 多くの問題は予想されるが、ネットワークプリンターを設置し、図書館で紙を用意し、利用者から使用相当分の費用を負担してもらう。

という方向で運用を進めることとした。

この問題の解決には、利用費用の見直しや個人ごとに印刷量から課金するような管理システムが必須になってくると考えている。今後の運用の状況をみながら検討を続けていきたい。

## 4. AV編集室の現状

6月から新しいサービスを展開しているAV編集室の現状を紹介する。

### 4.1 AV編集室機器とソフト

デジタルカメラ、ビデオを利用した素材・教材作

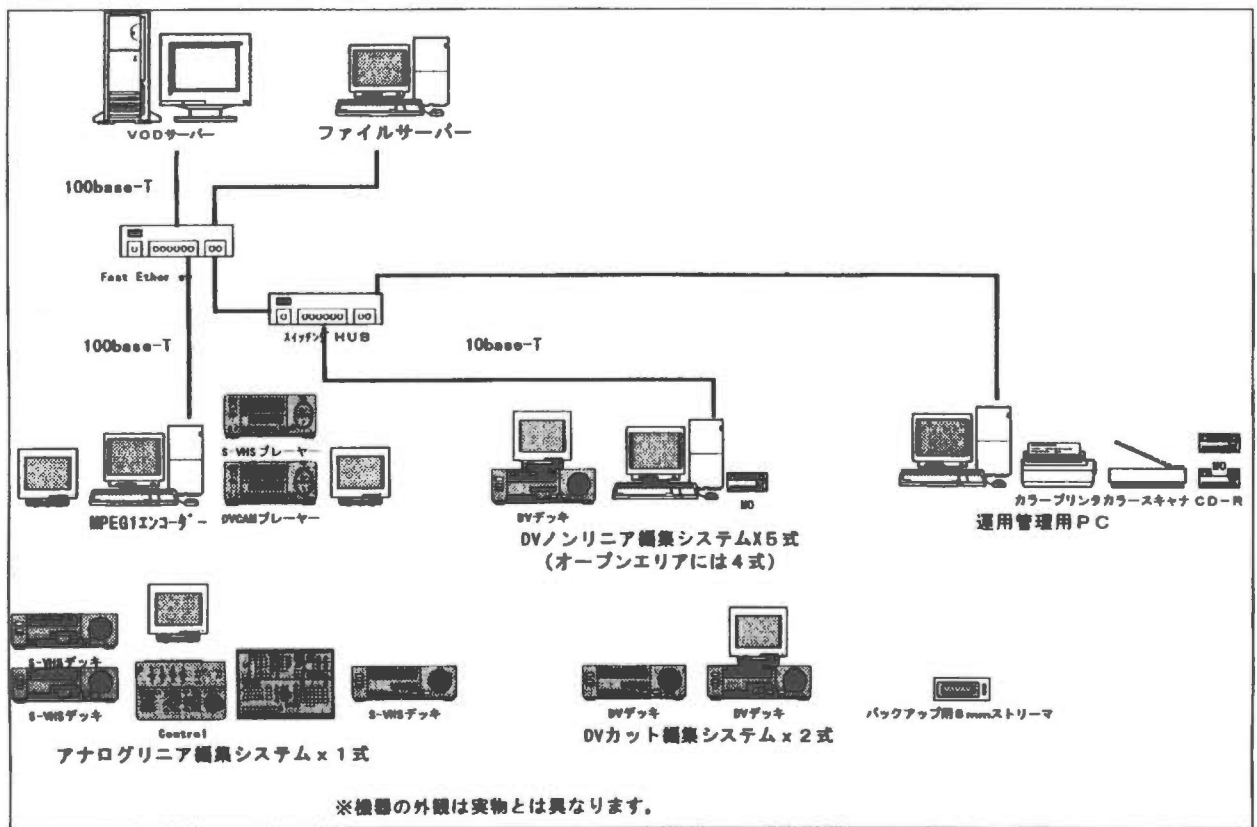


図2 AV編集室機器構成図

成のためのエリアとしてAV編集室は準備された。計画段階では、設置するパソコンにはSONYのVAIOをモデルとして検討していた。

しかし、VAIOはWindows95しかサポートしていなかったため、共用パソコンとしてのセキュリティ等で不安があった。そこでNT搭載機に、画像編集ソフト等必要なソフトウェアをインストールすることとした。

しかし、設置作業の中で、Windows NTでは編集ソフトウェアの動作が不安定なことや、いくつかバグが発見されたため、Windows 95にもどしてのサービスの開始となった。

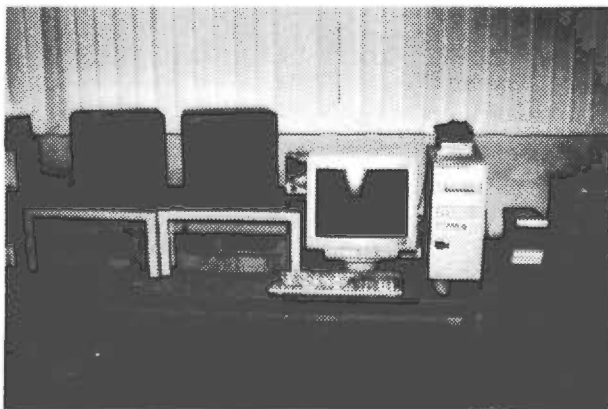


写真2 AV編集室DVノンリニア編集システム

今後、画像編集ソフトウェアのバージョンアップを待ってWindowsNTに移行する予定である。

以下に、利用できる編集機器を紹介する（図2参照）。

#### (1) DV (Digital Video) カット編集 (2セット)

DVデッキ2台とモニター1台で構成され、素材となるDVから必要なカットを取りだし、編集することができる。

#### (2) DV ノンリニア編集 (4セット)

DVデッキ1台とモニター1台、編集用パソコンで構成されている。4分程度のカットをパソコンに取りこみ、効果をかけ、DVテープに書き出すことができる（写真2）。

#### (3) MPEG エンコーダ (2セット) と VOD

ビデオをMPEGデータにエンコードできる。エンコードしたものは、VODに搭載し公開することも可能である。

#### (4) アナログリニア編集システム (1セット)

S-VHSの簡単な編集が行える（写真3）。

#### (5) ネットワーク

AV編集室には、部屋の中に閉じて、100Mのネットワークが設定されている。将来は、外部からVOD

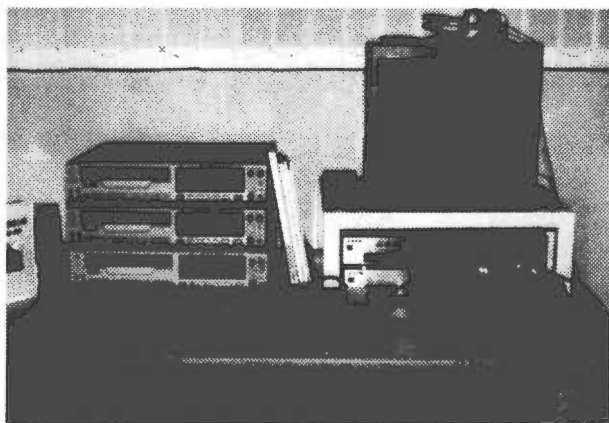


写真3 AV編集室アナログリニア編集システム

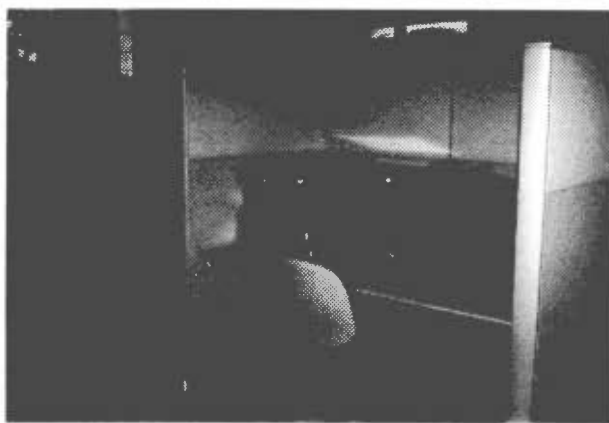


写真4 AVコーナー

を利用できるような整備が必要だと考えている。

#### 4.2 利用状況

AV編集室を利用するためには講習を受講して、受講証を受ける必要がある。室内には学生コンサルタントが常駐して、講習や利用指導を行っている。

まだ手探りの状態のため、十分な広報・宣伝ができていないにもかかわらず、利用者は着実に増え続けている。貸出カメラやビデオは常に予約が必要となっている。

ここ数ヶ月のサービス経験をもとに、このようなサービスの潜在的な需要はきわめて大きいと思っている。

#### 5. 今後の課題

今後予定されているサービスには、CD-ROMデータベースサーバのリプレースに伴うサービスエリアの拡大、および、CD-ROMでの出版物の閲覧サービスがある。それぞれの機能とパソコンエリアの設定との整合性を取ることが簡単にはできないため、ネットワークを含めたシステム構成やセキュリティについての一部の変更を含めた検討が必要になる。

#### 参考文献

- 1)三田メディアセンター .AV編集室・AVコーナ説明会説明項目 (1998/6/24)
- 2)三田メディアセンター .AVコーナ・AV編集室の利用について (1998/6/22)

#### 小展示ニュース

##### <医学メディアセンター>

- 1. 常設展示  
(於 医学メディアセンター展示ケース)
- 1.1. 日本医学史に登場する古医書  
第3部 大陸医方受容の時代 第2章 中国医学の変遷 (その2)  
平成9年7月1日～8月31日
- 1.2. 日本医学史に登場する古医書  
第3部 大陸医方受容の時代 第3章 中国医学の変遷 (その3)  
平成9年9月1日～10月31日
- 1.3. 日本医学史に登場する古医書  
第3部 大陸医方受容の時代  
第4章 本邦における大陸医方 (室町, 安土桃山時代)  
平成10年2月4日～4月30日
- 1.4. 日本医学史に登場する古医書  
第3部 大陸医方受容の時代

- 第5章 本邦における大陸医方(実証的医学の黎明)  
平成10年5月6日～6月30日
- 2. 特別展示
- 2.1. 新年祝賀会展示 (於 新棟11階ロビー)  
・50年前の医学部  
・復刊「慶應医学」  
・木造本館  
・卒業記念写真帖  
(1,15,31,37,51,61,71,73 回生の写真帖)
- 2.2. 医学メディアセンター新年展示(於 医学メディアセンター展示ケース)  
・開設当時の北里記念医学図書館
- 2.3. 第67回北里記念式展示 (北里講堂ロビー)  
・北里柴三郎とその世界 (北里柴三郎記念室寄贈資料)  
・北里柴三郎墓前祭(医学部創立50周年に開催された墓前祭記録写真)

# パーソナル・コンピュータ利用の登録制について

おおし まこと  
大橋 真

(日吉メディアセンター 兼 メディアネット本部)

Internetに接続されているUNIX Workstationはもちろんだが、共用で利用するパーソナルコンピュータ(以下PC)にもユーザ認証を行うべきである。たとえそれがInternetに接続されていなくても当然だと考えていた。

しかし義塾ではPCについてはこれを行ってはいなかった。“大学”はその性質上、比較的容易に関係者以外の出入りが可能である事を忘れてはならない。

現状(1998年8月)で、PCの利用者登録(ユーザ認証)を行っているのは三田・日吉地区のみである。ここでは主にその2地区に限った話としていただく事をご了承頂きたい。

## 導入経緯

1997年4月、三田・日吉地区の両計算室はOSとしてMicrosoft Windows 95を導入した(一部Windows 3.1が残っていたが)。その問題は数ヶ月も経たないうちに表面化した。その当時要望があり導入していたWebブラウザ(Internet Explorer, Netscape Navigator)を利用した幼稚な悪戯や嫌がらせが、義塾外部のWebサーバに対して行われたのである。もちろん、被害を与えてしまったWebサーバの管理者やコンテンツを公開している方から苦情を頂いた。ここで問題となったのは利用者の特定ができない事であった(利用されたPCや利用時間の特定は可能であった)。これを受け、三田計算室では1997年4月に導入したばかりのWindows 95を同年9月にはWindows NT Workstation 4.0(以下NT)へと切り替え、ユーザ登録を義務付けた。しかし、Windows 95で構築していた環境をNTに移行し、ユーザ認証のみ行わせるだけではユーザにとっては何のメリットもない。そこでメンテナンスシステム(後述)のために運用していたNTサーバをファイルサーバへ転用し、個人データの保存を可能とした。日吉計算室では1998年4月よりNT環境に移行し、ユーザ登録を義務付ける事となった。

ここでユーザの皆様には、ユーザ認証を行う事はネットワーク社会においての“個人”を確立するものだと捕らえて頂きたい。決して悪事を働いたユーザを特定するのが目的ではないのである。

## ユーザ教育

Windows 95からNTへ移行したが、利用に関して戸惑うユーザは比較的少なかった。Look & Feelが同じであったためであろう。最近ではユーザ個人がPCを購入する事が珍しくなくなり、自宅でもWindows 95あるいはWindows 98を利用しているユーザが多い。しかし、NTを自宅で利用しているユーザは多くはない。さらにネットワーク上に構築されたNT環境となれば皆無であろう。

“デスクトップ”等のプロファイル領域にデータを保存しているユーザをよく見かける。計算室では各個人環境を保存可能とするため、移動プロファイルの利用が基本となっている。この領域に保存されているデータはログオン時とログオフ時にサーバ・クライアント間のネットワークを行き来している。よってこの領域に保存されているデータは、ネットワークのトラブルによって消失する可能性がある。FAT領域に保存されているデータを特定のアプリケーションで開いた場合、そのデータが破壊される恐れがある事もNTの重大な不都合なのだが、この事を知っているユーザは皆無と言っていいだろう。その証拠にフロッピーディスクからファイルを直接アプリケーションで開いているユーザを見かける。アプリケーションによっては、開こうとしているファイルと同じディレクトリに一時利用ファイルを作成するため、フロッピーディスクから直接ファイルを開く事自体が問題なのだが。これはWindows 95やWindows 98でも同じである。

また、現状ではメールサーバをUNIXで構築している。ユーザの多くはNTのアカウントとUNIXのアカウントの区別がつかない状況である。そして、PCの使用中に電源をいきなり落とすユーザも後を絶たない。そのため、物理的にPCを破壊される事も少なくはない。

このような事をユーザに理解してもらうため、我々管理者は環境構築だけでなくユーザ教育にも気を配らなければならない。マニュアルの作成等も我々の仕事なのである。

## 運用 ～ユーザ登録～

筆者は1996年11月から1998年6月まで三田計算室

にいた。1997年9月にユーザ登録を行った際にはメインフレーム上の学籍データを利用し、三田地区に在籍している学生および院生を事前に全員登録を行った。パスワードはこちらでランダムに生成したものを利用した。それに伴い、Microsoft Accessで簡単なデータベースを作成した。この時点でのデータベースは即席で作成したため、決して良い出来ではなかった。そこで、1998年4月にはこれを基に新たなデータベースを作成した。今回のインターフェースでは、学生証が磁気カードになっているのを利用し、カードリーダーで学籍番号を取得できるように変更を加えた。事前に登録されているユーザであればアカウント情報を即時にプリントアウトすることができ、さらに事前に登録されていないユーザに対してもパスワードをランダムに生成し、即時プリントアウトを可能とした(ただし、この時点ではアカウントは作成されていない)

計算室の窓口受付時間が終われば、事前に登録していなかったユーザの登録作業を行うのだが、Accessで必要最大限の処理を行わせている。画面に描写されている幾つかのボタンをクリックしていく事で、アカウントを作成するのに必要なファイルを生成させている。ちなみにアカウント作成にはWindows NT リソースキットのAddusersコマンドとNTの標準コマンドであるNET GROUPコマンドを利用している。作成されたファイルをコマンドプロンプトで処理する事で、処理すべきユーザが何人であろうが、あっという間に登録作業のオペレーションは終了となる。

筆者は1998年6月に日吉計算室へ異動してきたのだが、日吉計算室でも事前に登録されているユーザに関しては簡単なデータベースを構築しているため、登録状況の確認を行うのは瞬時で済むのだが、登録されていないユーザに関しての処理の流れについては改善の余地がある。今後、時間を見つけてデータベースを構築するつもりである。

## NT Workstation 環境構築

Windows95環境を提供していた時期はメンテナンスシステムを導入し、PCの電源投入時に利用環境を再構築していた。しかし、以下の3点が問題として上がっていた。

1. 電源投入時から利用可能状態になるまで時間がかる
2. FAT領域に構築されたシステムであるため、破壊する事が容易
3. 環境の一部を変更したい場合にも煩雑な手続きが必要

まずそこで、新たに構築するNT環境にはメンテナンスシステムの類を採用しない事にした。これで1については問題が解消されるが、2に関してはNTFSを利用したとしてもNT標準の環境ではファイルやレジストリのアクセス権が甘すぎ、利用者が簡単に環境を変

更したり破壊する事が可能である。計算室の環境は授業にも利用されるため、これらのアクセス権を見直し、(まだまだ見直す余地はあるが)標準以上の堅固な環境を構築している。3については管理者権限で変更作業を行うだけで良いので、特別な手続きは一切必要としない状態となった。

アクセス権の見直しについては、アプリケーションをセットアップ後、NTの監査機能を利用し、アプリケーションの動作に問題がないか確認しながらアクセス権を変更していくという地道な作業を行わなくてはならない。しかし現在のアプリケーションは多機能であり、全機能の動作確認を行う事は不可能である。時には運用に入ってから修正作業を行う事も珍しくはないが、NTではリモートからの変更作業が可能であり、これを容易に行う事ができる。

さらにシステム・ポリシーを利用する事で利用者の環境を詳細にコントロールする事も可能である。もちろん、必要なポリシー・テンプレートは作成しなければならないが、

NTはUNIXに比べるとまだまだ不完全なOSである事を思い知らされた。ここでは詳しく述べないがNTFS自体に問題がある。さらにTWAINドライバの作りにも閉口させられた。

アプリケーションに関しても、いくつか問題のあるものが知られている。例えばNetscape Navigator (Communicator)である。ユーザ固有の情報(メールアドレスやブックマークの保存先の指定等)をレジストリで保存しているが、レジストリ内の保存先がHKEY\_LOCAL\_MACHINE以下になっていては、その設定された特定のPCでしかこの情報は利用できない。このような情報はHKEY\_CURRENT\_USER以下に保存されるべきであろう。

## おわりに

現在、日吉計算室にいる筆者はUNIX WorkstationのリプレースのためにSolaris2.6でUNIXの環境を構築している。この作業が終わる頃には、新しいPC室のためのNT環境を構築しているだろう。さらにこれらと並列して、無線LANのクライアント環境構築も行わなくてはならない....。

しかし、これらが一段落付けば、NTの環境構築についてのノウハウをWebのコンテンツとしてまとめてみようかと考えている(いつ公開できるかは筆者自身でもわからないが...)。



# 視覚障害者の学習支援について

ひらお こうぞう  
平尾 行藏

(日吉メディアセンター課長)

## はじめに

慶應義塾大学ではこれまで日吉、三田、湘南藤沢のキャンパスで視覚障害者を受け入れてきた経験を持つが、昨年4月、新たに法学部法律学科に全く目が見えない学生が合格し入学した。経験があったとはいうものの、障害学生の入学した学部が異なるので、対応は自ずと別にならざるを得ないところがあり、また日吉キャンパスとしては前回から2年間のブランクがあって、受け入れ態勢を考え直さなければならなかった。以下には日吉キャンパスとしての対応とその一環としての日吉メディアセンターの対応を述べる。

## 1. 日吉キャンパスの受け入れ態勢

法学部から支援要請を受け、教務部日吉支部と障害者教育を専門とする専任教員を中心に、日吉キャンパス事務局の総務課・用度課、学生総合センターにメディアセンターも加わって、バリアフリーな学生生活を実現するための協議を行った。

生活面での支援として、キャンパス内を一人で行動できるようになるための歩行訓練、教科書の購入についての特別措置、学内各所への点字シールの貼付、混雑する学生食堂での昼食についての配慮等々のこまごまとしたことがあり、入学式前には、教務部が対応しただけでなく出身高校の教員のお世話になった部分もあったり。

履修申告の支援、視覚障害者が履修することの担当教員への周知、教科書の点訳、期末試験問題の点訳・回答の墨訳・別室受験等々については、教務部が法学部と協議しながら一つ一つ解決していった<sup>2)</sup>。

学習活動を行い学生生活を送る上で、視覚情報を音声情報に変える必要が様々な局面で生じるので、教務部により日吉在籍学生の中からチューターを組織し、対面朗読、録音等の支援をさせた。この学生達は当初ボランティアであったが、昨年度春学期のうちに人事部の承認を得て学内の学生

アルバイトとして位置づけることができた。

教材作成の面では、点字プロッタプリンターの他に、図表等を立体的にコピーし触覚により情報を伝達するための手段として立体コピー機を教務部に新規に設置した。

また、一般学生にとってパソコンは電子文房具として必需品になりつつあることに鑑み、視覚障害学生に専用機を持たせることとし、それにはペンディスプレイ(ブレイルターミナル)、日本語音声合成装置等の付属装置を備えた。一般学生と同様のパソコン室で常時ヘッドホンを使用させることは、聴覚障害にもつながりかねないので、スピーカーからの音声を聞けるように専用の場所を設けた。この部屋では対面朗読等も行った。パソコンの使用頻度はそれほど多くはないようであるが、電子メール等を上手に使いこなしている。

学校側の配慮に応え、本人の努力も並々ならぬものがある。講義ノート作成のためのブレイルライトの自費購入、ボランティア活動の学生サークルへの参加等、一般学生と共に学ぼうとする積極的姿勢に好感が持てる。

今回はじめて視覚障害者を履修学生に持った教員(天文学担当)が、注1)、2)の小冊子「バリアフリー天文学への第一歩(加藤万里子編)」をまとめているので参照されたい。

## 2. 日吉メディアセンターの対応

日吉キャンパス内の一部署として日吉メディアセンターも視覚障害学生の学習支援のためにいくつかの施策を行った。館内施設利用面での援助、資料整備が主なものである。

施設利用については、可能な限り一般学生と同様に扱うという方針で臨むようにしているが、それでも館内歩行訓練に付き添うことに始まって、資料の出納、複写の作成等視覚を必要とする局面での援助は必要である。組織として必要な援助を与えるよう利用者サービス担当部門に周知を図

り、スムーズな図書館利用ができるよう心がけている。

また年度途中で対面朗読室を教務部管轄の部屋からメディアセンター(図書館)へ移し、その後専用パソコンも移した。メディアセンター内の隔離された部屋がそのために使用されているが、既存の部屋(貴重書閲覧室)を一時的に転用・兼用しているに過ぎず、そのための専用の部屋を新設したわけではない。

資料整備については、法学の基本的資料として「点字六法」を、そして点字の英・独・仏語学辞書を図書館予算で購入した。「点字図書・録音図書全国総合目録(国立国会図書館編)」CD-ROM版については、検討したが購入に至らなかった。

その他の点字資料については、基本的資料は図書館予算で購入するという方針のもとに、要望ごとにその都度検討している。点字、音声に変換可能なCD-ROM等についても、同様で、これらについては長期貸出しも考慮している。DVD、日本語吹き替え版の洋画ビデオ・レーザーディスク等の視聴覚資料も要望があれば検討して購入している。

一般的にあって、求める著作の点字図書の有無、所蔵調査、入手の迅速性については、既に点字図書館のネットワークが全国規模で活動しており、相当の実績を挙げているので、それを利用するのが確実かつ有効である。本人もそのことは熟

知していて通常はそちらのルートで資料入手が行われている。相互補完的に使い分けられている。

### 3. 問題点とまとめ

公共図書館に比し大学図書館は障害者サービスでは大幅に後れを取っているという批判がある。日吉メディアセンターはその批判に応える態勢をもっていない。個別に対処することで凌いできたし、今後も経験の裏付けを持ちながらの個別対応にならざるを得ないと思われる。

一つ従来と異なる点は、コンピュータを活用することにより教材等の点訳・レポート等の墨訳が容易に行われるようになったことである。パソコン点訳機器があれば、従来とは逆に「音訳よりも点訳の方が早く提供できる場合も多い」。

障害学生が日吉での一般教育課程を終え、専門課程に進学した後も(法学部は三田キャンパス)、一貫して同等の支援態勢の下で学習活動ができるような配慮が今後必要とされる。

### 注

- 1) 和田功男“キャンパス生活の援助と組織上の問題点”. バリアフリー天文学への第一歩. 加藤万里子編. [横浜] (1998) p.2-4.
- 2) 飯田等, 神谷弘子“履修上の問題点と措置”. 前掲書. p.5.
- 3) 日本図書館協会障害者サービス委員会編. 障害者サービス. 東京, 日本図書館協会 (1996) p.115.

### 小展示ニュース

#### <三田メディアセンター>

平成9年

10月1日～10月31日

泉鏡花展

11月8日～11月25日

昇斎一景の錦絵

11月26日～12月22日

モスクワ芸術座と小山内薫

平成10年

4月15日～5月29日

江戸時代の外国語辞典

6月1日～6月30日

三田評論創刊100年記念展示

7月21日～7月29日

教科書に見る日本の古典

#### <理工学メディアセンター>

平成10年

6月25日～7月16日

ロバート・フック(ニュートンとの因縁)

ティールーム

## 少しだけ疎遠になった恋人へ

いけが まさお  
池田 真朗

(法学部教授)

あの頃私は、うれしくて仕方がなかった。そして、君のことを何でも知ろうと思ったし、怪しげな奴が近づこうとすることさえ気になって、毎日何度も会いに行った。そして、少しでも君と一緒にいたかった。

1982年春、私の新しい恋人は、前の恋人と向かい合わせのところに、地上6階、地下5階という規模で、潇洒なサーモンピンクの外壁をまわってオープンした。これは、三田山上の一人の図書館フリークの話である。

私の専攻は民法である。今のようにデータベースなどない時代に法律学を学ぶ者にとっては、図書館は、書籍だけでなく膨大な判例資料等を利用する上で不可欠の場所だった。私は、経済学部在籍のまま、3年生から本格的に法律の勉強を始めたという経歴を持つので、1年生から法律学科で勉強してきた友人たちより何倍か急いで勉強しなければいけないのは当然のことだった。私が旧図書館に入りびたり、そのほとんどすべてを知り尽くすようになるのは、ごく自然な成り行きだったのである。当時、私だけでなく勉強家の仲間たちは、自分の専門の主な書物が何階のどの棚の何段目にあるか、全部記憶していた。そして、地下1階の談話室を、ゼミの仲間と現在のグループ学習室のようにして使っていた。当時はそこが禁煙でなかったのもうとうとした煙の中で、遅くまで議論をしたものである。今にして思えば狭い大閲覧室は、高い天井からクラシックなシャンデリアが下がり、最初に座席に着いた時は、ようやく大学生になったという実感にひたつたものである。天気の良い日には、開け放った高い窓から鳩が飛び込んで、シャンデリアにとまることもあった。

そして大学に残って留学し、帰国して自分がゼミを持つようになって3年目の春に、旧図書館は書庫を残して会議室等になり、新図書館が当時としては画期的な規模と設備を擁して開館することになった。新しい恋人とおつきあいが始まったのである。私は、早速に館内をチェックして回った。特に、そ

れまでの法学部資料室の書籍と資料が、新館の地下の書庫と4階の総合資料室とに分けて収蔵されることになったので、まずは自分の使う資料がどこにあるのか、そして自分の新しい職場がどこになるのかを確認した。また、法学部資料室の書籍(教員・院生のみ利用可で当時は準貴重書に入るものも含まれていた)が、地下の一般書籍と同じフロアに置かれることになったので、持ち出しを心配して、仕切りのチェーンの設置をお願いしたりもした。さらに、ゼミ生にも早くこの新図書館に慣れてもらおうと、早速にオリエンテーションに参加させた。新館のゼミ単位のツアー(現在の文献探索ツアー)の第1号は法学部池田ゼミのはずである。

あれから16年、国連の仕事や司法試験委員等の公務ですっかり忙しくなってしまった私は、頻りに足を運べずにいるうちに、めまぐるしく変わる恋人にちょっと戸惑っている。でも、この98年夏休みの雑誌書架の大移動に際しても、早速に3階の事務室内に新設された教員キャレルを試したりと、恋人と話を合わせる努力はしているつもりだ。

最後にライブラリアンの皆さんにお願いしたい。図書館の利用者にとって一番うれしいのは、機械ではなく、生身のライブラリアンに助けただけのことだ。「この資料はどこにありますか」という問いに、「ちょっと待って下さい」とパソコンを叩いてデータを出すのではなく、「そこを右に曲がって3番目の棚です」と言ってもらえるほうがずっと有難い。メディアの時代だからこそ、データを見るのではなく現場を見ること。マニュアル通りではなく経験を大切に。それが、一味違う「プロ」というものではないだろうか。

本当にライブラリアンに助けられたという実感を持った研究者は、それをずっと忘れない。現に私の『法学研究』の論文の中には、あるライブラリアンの方への謝辞が付いているものがある。私としては、ちょっと疎遠になったけれどもずっと大好きな恋人と、やはりハートでつながってほしいと思うのである。

# 北里記念医学図書館 60 年のあゆみ

さとう かずたか  
佐藤 和貴

(医学メディアセンター事務長)

## はじめに

1997年の秋、医学メディアセンター<sup>1)</sup>はなにかと行事が多く、忙しい時期であった。10月3日に明治記念館を会場に財団法人国際医学情報センター創立25年記念講演会とパーティーが開かれた。その後、10月13日には市ヶ谷の日本大学会館で日本医学図書館協会創立70周年記念講演会が開催され、あわせて祝賀パーティーが同じ会場で行われた。最後に、11月21日、北里記念医学図書館開設60年記念祝賀会が開催された。ここでは、北里記念医学図書館が開設60年を迎えたことを報告するとともに、医学メディアセンターの立場から見た国際医学情報センターならびに日本医学図書館協会との関わりを簡単にまとめておくこととしたい。

## 1. 北里記念医学図書館開設 60 年

北里記念医学図書館が1937年に開設されて1997年で60年を迎えることとなった。『慶應義塾図書館史』に相当する書物はないものの、図書館の歴史については正史ともいべき資料に大澤充がいくつか報告をしている<sup>2)4)</sup>。北里記念医学図書館を振出しに勤務を始めた大澤充も1996年度末をもって44年余りの勤務を終えて定年退職されている。また、職員として47年余りを北里記念医学図書館にのみ勤務した窪田よしも1994年度末をもって定年退職されている。図書館の歴史の前半分を知る生き字引としての人物はだんだんに実務の場を去りつつある。

1987年に図書館が開設して半世紀を迎えた時、盛大な記念式典を開催した。記念式典は医学部新棟11階大会議室を会場に開かれ、米国シンシナティ大学からナンシー・ロレンツイ博士を招聘し講演をいただいた<sup>5)</sup>。統合型学術情報管理システムが当時の医学図書館界での中心的な話題であったので、講演もこれに関するものであった。式典の後、会場を北里講堂に移して祝賀会を開催した。祝賀会の出席者は約160名と記録されている。記念出版物は2点で、ニーナ・マテソン博士がまとめられた『医科大学における学術情報マネジメント』を医学図書館界の関係者の協力を得て翻訳し刊行した<sup>6)</sup>。この翻訳は

多くの文献に引用文献、参考文献として参照された。さらには、図書館の歴史について『50年のあゆみ』を刊行し、大澤充が回顧録をまとめている<sup>7)</sup>。記念式典の記録については館報『きたさとニュース』が特集号を制作している<sup>8)</sup>。

それから10年が経過し、1997年、図書館は開設60年を迎えることになった。先に述べた開設50年記念式典には比べようもない質素なものではあったが、開設60年記念行事として、

1. 記念品を作成すること
2. 資料展示を行うこと
3. 祝賀会を開催すること
4. 広報活動を行うこと

を考えた。記念品の作成については、しおりや絵葉書といったもの考えた。慶應義塾図書館が開設80年を記念して絵葉書を作成していたこと、絵葉書が好評で第二集も作成されていることが刺激になった。また、北里図書館開設の際にも絵葉書を作成していることから、これに範をとることにした。絵葉書の作成には小澤ゆかりほか数名の職員が委員会を編成し、古澤賢一がまとめ役となった。完成した絵葉書は10枚1組で、封筒の表には開設50年に際して当時の職員酒井明夫が図書館前景を描いたポスターからの絵をあしらった。絵葉書は、書物では『ターヘル・アナトミア』オランダ語版、同ドイツ語版、『解体新書』の3点、建物では、建設当時の全景、閲覧室など4点、さらにスタンドグラス、北里柴三郎色紙、医学部図書館蔵書印の合計10点からなる。絵葉書は図書館カウンターで頒布している。

資料展示会は文書類の展示と貴重書の展示とを考えた。図書館には開設当時の書類等が保存されており、それには人札の書類、官公庁の許可書、寄付を募った際の名簿などがある。書類はすっかり黄ばんでしまっているがこれらの展示は興味をひくだろうと考えた。また、貴重書の展示ではいくつかの候補もあげた。絵葉書にした原資料と絵葉書を対比した展示や森鷗外の史伝に登場する日誌の展示などである。しかしながら、保安上の問題から貴重書の展示

は『解体新書』やベザリウス、パレなどの複製本にとどめた。この企画と実施については史料委員会の常設展示、新年祝賀会、北里記念式などにおいて資料の展示を担当している松原良子を中心となって行った。

祝賀会は有志の開催という形をとり、図書館の元館長、先輩、旧職員、取引関係、現役職員などにご案内を差し上げた。会場は図書館から近い、四谷三丁目のホテル、JALシティ四谷東京に定めた。当日、ご出席いただいた方は93名であった。この祝賀会の様子は『医学部新聞』に掲載されている<sup>9)</sup>。なごやかな談笑がそここに見受けられる心暖まるパーティーであった。広報に係わることからしては、図書館が開設60年を迎えることを『医学部病院ニュース』にお願いして記事を掲載していただいた<sup>10)</sup>。前に述べた『医学部新聞』も同様である。図書館では『きたさとニュース』に「60年のあゆみ 北里記念医学図書館 1937-1997」として連載記事を掲載した。参考までに号数と表題を記しておく。

205号 北里記念医学図書館年表

206号 出版物について

207号 組織について

208号 目録について

209号 閲覧

210号 利用者サービスの変遷

211号 参考業務における文献調査活動の変化

212号 相互貸借

213号 蔵書・図書費

214号 施設・設備

祝賀会で多くの先輩に接し、お話を伺った編集委員から「回顧編」を掲載しようという意見がまとまり、4編の記事を連載した。

215号 横山哲朗(元館長) 新しい酒は新しい革袋に

216号 高垣玄吉郎(元協議会委員) 医学史図書室

217号 津田良成(元図書館総務部長)センターの発展を支えてくれた女子職員の活躍

218号 安田健次郎(元医学部長) 戦後復興の頃

開設60年記念行事はおよそこのような企画で準備が始まり、実行され、終了した。多くの職員の参加により有意義な行事が行われたものと考えている。

## 2. 最近の10年

ここでは、開設50年から60年にいたる10年間に焦点を合わせて図書館の内外に起こった事柄を述べ

ることとしたい。

業務面での変革について最大のトピックは1991年に行われた図書館機械化システム KOSMOS の導入である<sup>11)</sup>。医学情報センターでは当時、渡部満彦らにより開発された図書受け入れシステムが稼働しているだけで、図書館機械化システムは稼働していなかった。他の情報センターでも図書貸出システムが稼働している程度であった。そこで研究教育情報センター全体の図書館機械化システムの開発導入が計画されていた。手ごろなテストベッドとして医学情報センターはほとんどすべての機械化を実施した。これについてはセンターの職員が担当業務について報告をしている<sup>12)</sup>。

組織上の変更が1993年に行われた。研究教育情報センターは大学計算センターと統合されてメディアネットとなった。支部である医学情報センターは大学計算センター四谷計算室と統合され医学メディアセンターに名称が変わった。組織として、所長をおき、副所長職をあらたに設け、教授の兼任ポストとなった。従来の副所長職は事務長とした。組織の名称も資料サービス担当は図書館情報サービス担当に、情報サービス担当は情報メディアサービス担当とかわり、計算室は情報システムサービス担当とされた。人員としては計算室所属の2名が増加した。

医学部キャンパス内にネットワークが張り巡らされたことから、データベース検索サービスを開始した。これは理工学メディアセンターが文献検索用に設置したサーバーにMEDLINEデータベースの搭載を依頼することで始められた。資料購入に関する経費については4地区のメディアセンターにも一定額を分担してもらい、共同購入の方式をとった。また、機器の運用等はすべて理工学メディアセンターに依存している。

医学部学生への指導、教育にも新たな次元を画した。従来から、医学部では医学部2年生に医学医療を支える部署についての早期体験教育を経験させてきた<sup>13)</sup>。この中には図書館業務も含まれ、医学生に図書館業務への理解を求めてきた。その後、早期体験教育は次の段階へと進み、図書館業務とは異なる実習を経験させることになって図書館の任務は終了した。新たに1995年度からは「基礎医学特論」を担当することになった。これは、医学部3年生に対する授業で、医学メディアセンターが担当するテーマは「医学文献情報概説」とした。若い職員を中心に情報リテラシー、情報検索、ソフトウェアの応用などを機器を活用しながら講義、体験してもらっている<sup>14)</sup>。成果は『きたさとニュース』付録として刊行

している<sup>15)16)</sup>。看護短期大学図書室においても同様に教育に携わり、この成果が報告されている<sup>17)18)</sup>。

『医学部年報』に掲載される研究業績の編集機械化は長い間の課題であったが、数年前からこれをデータベース化する計画が進行し、医学部内各部署と共同して開発にあたった。これについては平吹佳世子が担当者となっている。

資料の面では山中資料センターの設置による資料の移動が挙げられる<sup>19)</sup>。この施設そのものはメディアネット本部に所属するものであるが、メディアネット全体の保存書庫としての性格をもつ。書庫が狭隘である医学メディアセンターにとって山中資料センターへの移送は大きな助けになった<sup>20)</sup>。第一次移送は1994年に行われ1969年までの雑誌と1945年以前の図書が信濃町キャンパスから山中資料センターへ移送された。第二次移送は1998年に行われた。このときは1979年までの雑誌を移動した。現在、医学メディアセンター書庫に所蔵する雑誌は1980年から1998年までのもの、約18年分のみとなっている。

山中資料センターの利用実態についてはその初年度についての報告があるが、現在までの利用状況はおよそ次のような状況にある<sup>21)</sup>。

	複写	貸出
1994年度(8カ月)	2,939件	73件
1995年度	4,297件	164件
1996年度	4,310件	139件
1997年度	3,949件	136件

実績としては平日で一日約15件程度の複写申込みとなる。1998年度後半は第二次移送の影響を受けて増加が見込まれるところである。

1994年以降、施設設備の改善が図られたことは特筆に値する。医学部では当初3年次計画をたて、以下のような改良工事を計画した。

1994年次 書庫内照明改善工事、閲覧室改善工事

1995年次 閲覧室空調(冷暖房)改善工事

1996年次 地下閲覧室、事務室改善工事

ところが、さらに追加工事が必要となり、1997年次は書庫空調(冷暖房)設置工事、1998年次は書庫床改良工事が行われることになった。これに加えて、外壁の補修工事が1997年度に行われ、建物の外装は一新した。図書館の建物の中にある北里講堂にも空調(冷暖房)工事が行われることになり、1998年度

に施工された。これらの改修により建物全体の更新計画は著しく進捗した。

情報システムサービス担当はもともと四谷計算室の業務であったが、ネットワークの時代を迎えて大きな変貌をとげた。情報ネットワーク基盤の拡充は予想をはるかに上回った。1994年に慶應義塾情報スーパーハイウェイ計画が示された。このあと、当時のネットワーク・テクノロジー・グループ、その後のネットワーク・テクノロジー・センター(仮称)開設準備室の指導助言を受けながら、着実な進捗を得た。この結果、ネットワークに関するサービスが1996年夏から開始された。この間の医学メディアセンターは繁忙を極めた。医学メディアセンターが事務局を務める医学部情報システム検討委員会はその名称を医学部ネットワーク委員会と変更し、精力的な活動を行った。委員会では小委員会、世話人会を編成し、医学部内に設置する情報コンセントの配置やメディアネット本部からのいろいろな問い合わせに対して回答していった。

ネットワークの運用は初年度は実質上9カ月を数えるのみであったが、登録者数は520名にのぼった。1997年度は1100名を越え、文字通り倍増した。1998年度についても既に前年度を越え1300名に近づいている。

### 3. 国際医学情報センターとのかかわり — 創立25年を機会に —

1972年に文部省、厚生省認可による公益財団法人として設立された国際医学情報センター(以下IMIC)<sup>22)</sup>は1997年に創立25年を迎えた<sup>23)</sup>。この間、会員制度を基盤として製薬企業や病院に対して資料提供、情報提供を行ってきた。また、米国国立医学図書館や国際原子力機構の情報サービス機関にわが国の医学文献情報を提供して世界規模のデータベース作成に協力を続けてきた。

医学分野においては文献情報が診療や研究の基礎となっていて情報ニーズが高い。さらに医学分野ではこの種の情報活動に対しては資金がかかるものと認識されている。ここに至るまでには大きな試練が何度となくあり、道が必ずしも平坦ではなかったことは理解しているが、情報提供のみの独立した機関として四半世紀にわたり経営を継続できたことには感慨を禁じえない。

IMICの母体となる活動が当時の慶應義塾大学医学情報センターにあったことから、その歴史は前述の大澤充の報告にも記されている。しかしながら最近では業務内容は大きく様変わりし、Webサイトに見

られるような先進的な活動を行っている。例えば、国内医薬品副作用データベースの提供であり、疫学情報の翻訳提供である。官公庁からの受注にとどまらず、最近では健康関連企業からの受注や異業種からの受注もあり、顧客層の拡大が目覚ましい。

慶應義塾との人事上のつながりをみると、理事長は歴代元教授であり、常任理事は部長級職員の出向者である。理事職には他にも医学部長、常任理事の就任があり、監事にも常任理事、塾監局長の就任がある。評議員職には教授の名前も見られる。人事面でのメディアネットとの関係は所長が理事職に、本部事務長が評議員に就任している。医学メディアセンターでは所長が理事職を務めている。役員などに慶應義塾の関係者が多くを占めてきたことはそもそもの発足に起因するとはいえ義塾との特別な関わりを感じさせる。しかしながら一方で、慶應の名前を冠したいいわゆる傘下団体ではなく、IMICの収益の増加が、慶應義塾に果実をもたらすものではなかった。

業務上でのメディアネットとのつながりは、IMICに山中資料センターの運営を委託していることである。医学メディアセンターとの関係では施設の一部を賃貸し、資料の利用につき便宜を図っていることなどにより、施設設備利用についての対価を受領していることがある。事務連絡の上では医学メディアセンターとの間で定期協議の機会を設けている。

#### 4. 日本医学図書館協会とのかかわり — 創立70年を機会に —

日本医学図書館協会(以下JMLAとする)はその会則によれば、「医学・医療その他関連領域の図書館事業の振興並びに情報の管理、利用、生産、流通に関する調査、研究及び開発を推進し、もって医学・医療その他関連領域の進歩発展に寄与すること」を目的としている<sup>29)</sup>。現在の加盟館は国立大学39館、国立機関2館、公立大学10館、公立機関3館、私立大学46館、私立機関13館からなる。ほかに維持会員(団体)、維持会員(個人)とからなる。1998年度からは個人加盟を認めることとなった。専門主題に限られた図書館協会であって、国立、公立、私立の大学、機関を含み、独立した事務局をおき、専任の職員を配していることは類例がないであろう。

JMLAの創立は1927年にさかのぼる。当初、国立医科大学附属図書館協議会として創設され、1929年医科大学附属図書館協議会と改名された。JMLAの歴史は多くの場所で語られており繰り返すことはしないが、相互の連絡、図書館事務の進歩改善を図るには組織が必要であった<sup>29)</sup>、この組織を通じて、資

料の相互貸借活動を基本に活動が始まった。そのためには雑誌目録、図書目録が必要であり、総合目録の考えが進み、総合目録編纂の補助手段として『現行医学雑誌所在目録』の編集も行われた。初期から加盟館統計を作成していたことも特筆に値しよう。

北里記念医学図書館、医学情報センター、医学メディアセンターと名称は変わってきたが、いつのときも慶應の医学図書館は、JMLAには少なからぬ関わりを持っている。会長職が置かれた1955年以降、草間良男、牛場大蔵、嶋井和世の3名が会長に就任しており、理事職には佐野輝夫をはじめとして大澤充、天野善雄ら歴代の主任司書がほとんど就任している。各種委員会への委員の派遣も多かった。1985年に開催された第5回国際医学図書館員会議では菅利信東京医科大学図書館副館長のもとで事務局を担当するなどして、当時の館員の協力を集めて会議を大成功に導いた。このときJMLAからは感謝状をいただいた。

#### おわりに

北里記念医学図書館が開設60年を迎えた時期を同じくして国際医学情報センター、日本医学図書館協会がそれぞれの節目を迎え、祝宴をひらいた。医学という同じ土俵の上で、一定の範囲の人々に情報を提供している図書館がある。あるいは全世界的に情報を提供している情報機関がある。さらには情報を提供する機関を組織している団体がある。各々の存在理由を吟味しながらも、これからの変革に協調して連携していくことが求められていると思われる。迫る21世紀に万全の対応をして臨みたいものである。残された時間は少ない。

#### 参考文献・引用文献

- 1) 医学メディアセンターホームページ  
URL : <http://www.lib.med.keio.ac.jp>
- 2) 慶應義塾図書館史. 慶應義塾大学三田情報センター 1972, 348p
- 3) 大澤 充. 医学情報センター「塾監局小史II」. 同編集委員会編 慶應義塾塾監局, 1987, 448p.p.127-131
- 4) 大澤 充. 医学情報センター(北里記念医学図書館) 慶應義塾大学医学部六十周年記念誌. 同編集委員会編. 慶應義塾大学医学部, 1983, 921p.p.745-761
- 5) Lorenzi, N.M. 館田鶴子訳. IAIMS(統合型学術情報管理システム). きたさとニュース, No.144, p.11-19 (1988)
- 6) Matheson, N.W. 医科大学における情報マネージ

- メント. 津田良成ほか訳. 慶應義塾大学医学情報センター, 昭和62 (1987), 119p
- 7) 慶應義塾大学医学情報センター編 慶應義塾大学医学情報センター(北里記念医学図書館)50年のあゆみ(1937-1987). 1987, 99p
- 8) 北里記念医学図書館開設50年 きたさとニュース No.114, p.1-27 (1988)
- 9) 慶應義塾医学部新聞, 554号, p.1(1997)
- 10) KEIO 医学部病院ニュース No.175, p.6 (1997)
- 11) 落合啓一, KOSMOS 計画とその概要. KULIC, No.26, p.3-9 (1992)
- 12) 医学情報センター. KOSMOS の運用とサービス. KULIC, 26, p.33-36 (1992)
- 13) 宮崎貞治, 市古みどり. 医学情報センターにおける利用者教育. KULIC, No.22, p.19-20 (1988)
- 14) 市古みどりほか. 基礎医学特論「医学文献情報概説」を担当して. MediaNet, No.4, p.30-35 (1996)
- 15) 基礎医学特論 医学文献情報概説 - 講義資料集成一. きたさとニュース, No.198 suppl. 1 (1996)
- 16) 平成9年度基礎医学特論医学文献情報概説 - 講義資料集成一 付:「研究の基礎」, 「看護研究 I」講義資料集成. きたさとニュース, No. 214 suppl., p.1-40 (1998)
- 17) 佐久間公子. 慶應義塾看護短期大学図書室の利用者教育. 看護と情報 Vol.1, p.95-98 (1994)
- 18) 長谷川博子. 「看護研究」のための文献検索について. 慶應義塾看護短期大学紀要, Vol.7 p.153-157 (1997)
- 19) 島本光信, 古澤賢一. 山中資料センターの発足. MediaNet, No.2, p.95 (1994)
- 20) 酒井山紀子ほか. 医学メディアセンターにおける保存書庫の活用. MediaNet, No.3, p.6-9 (1995)
- 21) 酒井啓白. 慶應義塾大学山中資料センター一年を経過して. MediaNet, No.3, p.4-5 (1995)
- 22) 国際医学情報センターホームページ  
URL: <http://www.imic.or.jp>
- 23) 創立25年記念号. あいみっく. Vol.18, No.3.4, p.1-111 (1997)
- 24) 日本医学図書館協会ホームページ  
URL: <http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jmla/>
- 25) 日本医学図書館協会将来計画委員会・協会史編纂部会編. 日本医学図書館協会六十年略史. 日本医学図書館協会, 1989, 350p

### 三田図書館・情報学会月例研究会

- 第93回 日時: 1997年11月15日(土) 午後2時~4時  
テーマ: 情報メディア研究の枠組みとその意義  
発表者: 倉田敬子(慶應義塾大学)
- 第94回 日時: 1998年1月24日(土) 午後2時~4時  
テーマ: 図書館法改正の内容とその意味 - 最低基準廃止と有料化を中心に -  
発表者: 糸賀雅児(慶應義塾大学)
- 第95回 日時: 1998年3月28日(土) 午後2時~3時30分  
テーマ: 電子情報環境下における学術情報流通と著作権  
発表者: 大谷康晴(慶應義塾大学大学院)
- 第96回 日時: 1998年5月30日(土) 午後2時~4時  
テーマ: 放送大学における司書教諭科目の実施について  
発表者: 高鷲忠美(東京学芸大学)
- 第97回 日時: 1998年7月25日(土) 午後1時30分~3時30分  
テーマ: Global Standard に向けての大学図書館  
発表者: 高井昌史(紀伊国屋書店)
- 第98回 日時: 1998年9月26日(土) 午後2時~4時  
テーマ: 図書館とインターネットの将来像  
発表者: Theodor Nelson(慶應義塾大学環境情報学部)

これらの研究会は、非会員にも公開している。また、年2回刊行の機関誌 Library and Information Science は、個人会費(年額¥3,000) 機関会費(年額¥5,000)を支払った会員に送付される。学会への入会、機関誌等に関する問い合わせは、慶應義塾大学内、三田図書館・情報学会事務局(Tel. 03-3453-4511 内3147)で受け付けている。



# 理工学メディアセンターの洋雑誌コレクション

たち たづ こ  
館 田 鶴 子

(理工学メディアセンター 課長代理)

みな み え こ  
三 谷 三 恵 子

(理工学メディアセンター)

## 1. はじめに

自然科学系図書館の蔵書に占める外国雑誌の割合は大きい。その上、版元価格の恒常的な上昇と近年の円安傾向から、資料購入経費に占める外国雑誌の購読料が一段と増し、蔵書維持に苦慮する日々が続いている。このことを、これまで築いてきた蔵書を見直す良い機会と捉え、コンパクトであっても強力な蔵書の構築を目指すために、理工学メディアセンターで所蔵する洋雑誌の分野別構成と評価を試みた。

## 2. SCI/JCR による調査

雑誌コレクションを評価する方法はいろいろ存在し、総合的に捉える必要があるが、ここでは米国ISI社の Science Citation Index(以下、SCI)のデータを基に毎年作成される Journal Citation Reports, Science edition(以下、JCR) on CD-ROM を使って、購読誌の分野別分布を出すとともに、その引用分析から理工学メディアセンター洋雑誌コレクションの特徴を把握し、コレクション理解の一助とした。

### 2.1 JCR とは

JCRには世界中で出版されている科学技術分野の雑誌、4,500誌以上から得られた引用分析結果が含まれている。具体的には、被引用数、インパクトファクター、被引用数の半減期等のデータよりなる。インパクトファクターとは、掲載論文がどれだけ他の論文(同じ雑誌に掲載された論文も含む)に引用されたかによってその雑誌の影響力を表わす指数である。その値が大きいほど雑誌が活発に利用されている、つまり読者が多いことを表わす。計算方法はつぎのとおりである。(特定の雑誌をAとする)

科学技術分野の主要な雑誌に  
Aの掲載論文が引用された回数

Aに掲載された総論文数

(1996年版であれば、1996年発行の主要な雑誌(約4,800誌)の参考文献中、1994-1995年の2年間にAに掲載された論文が対象となる)

もうひとつの指標、最新引用指数(immediacy index)は、雑誌が発行された年にその雑誌の掲載論文が引用された回数を計算したもので、論文の出版年が最新年(1996年版ならば1996年発行のみ)に限定される。

引用分析の限界を知った上で結果を見る必要があることを、JCRのガイドページは示している。また、引用だけから雑誌を評価することは危険であり、質的な評価と相互補完の関係にあるべきとも述べている。インパクトファクターにバイアスを与える主な要因として、つぎのことがあげられている。

#### (1) 論文タイプ

出版された論文数としては、オリジナル研究論文とレビュー論文のみをカウントするが、引用された論文には、そのほかレター、学会抄録等も含む。よって、ある雑誌がレターや学会抄録を多く含んでいると、インパクトファクターは上がる。

#### (2) 雑誌の発行巻(号)数の変化

引用頻度は発行後2年でピークとなることが多いため、もし出版論文数が急に増えればインパクトファクターは一時的に下がる。

#### (3) 誌名変更

誌名変更直後の雑誌ではインパクトファクターは表わされない。2年目には変遷前後の誌名で別々にインパクトファクターが計算されるが、旧誌名のもとに高めに、新誌名のもとに低めに表わされる。これを補正するためには、前後の誌名のもとでカウントされた被引用数を足して2誌合計の論文数で割る。

#### (4) 被引用数のみがカウントされる雑誌

同じ雑誌に掲載された論文どうしの引用(自己引

用)は、被引用数のかなりの部分を占めることが多い。廃刊、休止、あるいは変遷前誌の場合、JCRではこの自己引用数がカウントされないため、雑誌間の比較は単純にはできない。

上の4つの要因以外にも、研究分野による差も考慮すべきである。年間発表論文数の少ない領域では5年分の論文数、被引用数を累積して出すなどの工夫が必要である。

## 2.2 分野別構成と引用分析から見た特徴

JCRは1996年版CD-ROMを使用した。データを補うために1995、1994年版も使った。結果を3つの表にしてみた。

表1. 分野別所蔵タイトル数とJCR収録タイトルの比較

表2. 分野別インパクトファクター上位誌

表3. 被引用数上位誌

JCRではSCIの収録誌を分野別に分析できるように雑誌に件名を付与している。それを利用して洋雑誌コレクションを大まかに分類した。JCRで足りないものは、Ulrich's international periodicals directoryの分類を参考とした。分類は便宜的に20のカテゴリーにわけた(表1)。これは、理工学部の学科(機械工学科、電子工学科、応用化学科、物理情報工学科、管理工学科、数理科学科、物理学科、化学科、システムデザイン工学科、情報工学科)および専攻(物質科学、計算機科学、生体医工学)に連動している。

表1に見るように、洋雑誌コレクション(購読誌1,188誌)のうち、73%の雑誌はJCR収録誌(インパクトファクターが0.000と「なし」は除く)に入っていた。科学技術分野でよく引用される主要な雑誌を中核とするコレクションとすることができよう。つぎにインパクトファクター5.000以上の上位誌を詳しく見ると、物理学、化学、生物学、これらに跨る領域に集中している(表2)。また、分野による特徴も出ている。物理学では影響力の大きい雑誌がある程度集中しているのに比し、数学では分野最高のインパクトファクターが2.313と、分散していることがわかる。これらの表だけではわからないが、数学では被引用数の半減期が長い雑誌が多い。引用頻度は概してレビュー論文で高い。よって、インパクトファクターの上位誌を多くのレビュー誌が占めている。理工学メディアセンターの所蔵する洋雑誌の構成と理工学部研究者の研究テーマ、人数との関係を詳しく分析して適正な構成バランスを見つけるには、さらに調査が必要である。

角度を変えて1年間の被引用数(20,000サイテー

ション以上)に注目してランキングをとったのが表3である。このリストにあるものは、収録論文が頻繁に引用される雑誌、図書館サービスの面からいえば、原報入手の対象となりやすい雑誌である。論文数が多い、つまり研究者数の多い分野がわかる。

さらに、これに先立って、慶應義塾大学5キャンパスの他地区メディアセンターと理工学メディアセンター間の重複所蔵を長島(現在 湘南藤沢事務室総務担当)がチェックしていたので、今回の調査に関連させて分析した。理工学メディアセンター所蔵の購読誌1,188誌中、塾内他センターとの重複は362誌(30.5%)である。表2に見る重複誌は18誌(54.5%)、表3では26誌(63.4%)と、当然ながら影響力の大きい雑誌ほど重複所蔵率が高いことが明らかにされた。

## 3. 考察

今回の調査から改めて認識したことは、理工学メディアセンターの洋雑誌コレクション(購読誌)のかなりの部分(73%)が、引用分析結果のランキングに出てくる雑誌で占められていることであった。そのうちインパクトファクターが1.000以上のタイトルは、354誌(表1のJCR収録タイトル数の40.7%、全購読タイトル数の29.8%)であった。JCRのランキング表に出てくる全収録誌では、インパクトファクター1.000以上の雑誌は37.3%である。このことは、SCISearchおよびその拡張版であるWWWによるデータベースWeb of Science(1998年5月全塾でサービス開始)の収録範囲と当センター図書館の所蔵誌がオーバーラップする部分の大きいことを示す。それを裏付けるように、SCIは1995年に当センターがSCISearchを導入してから、その検索件数が年毎に伸びている<sup>10)</sup>。理工学という幅広い、かつ相互に関連する分野に跨る文献検索に、SCISearchは特定分野の専門ファイルにはない特徴があり、一役買っているといえよう。

資源の重複を省いていかに共有化を図るかは、スペース対策も含めて、今日大変重要な課題であるが、今回の調査結果にも明らかのように、頻繁に利用が予測される資料こそ塾内で重複所蔵している。資源の共有は、索引・抄録誌に明らかのように、プリントよりはオンラインデータベースが適している。抄録とフルテキストのドッキングした商品も出ている。そのなかで、表2、3に見るようなタイトルをいかに共有するか、原報入手のコストパフォーマンスを高めるにはどうすべきか、そのひとつの解決策としてオンラインジャーナルに可能性があるのかを総合的に検討する時期にある。

例えば、塾内どのセンターでも所蔵するScienceのような速報誌の場合、カレントにはScience Onlineを利用し、バックナンバーをCD-ROMで保存すればプリントはなくてもよいのであろうか。紙という媒体の持つブラウザ機能、人間の感性に合った性質、保存の適性などの利点を捨てても、なおかつ伝達のスピード、省力化、スペース対策が優先される分野は何なのかを考える必要がある。その時、ネットワークの問題(サーバが海外にあるのか、国内か、塾内かによっても利用の快適さは異なるが、データ量が増えるほど遠隔になりやすい)、画像の扱い(プリントアウトは特に)などを考慮すべきであろう。また、理工学分野では膨大な量の会議録コレクションを抱えている。雑誌論文と比較すれば一過性の情報伝達手段である。こういったタイプの資料から電子媒体を手がけてはどうであろうか。

実際に重要視される情報の種類および形態は研究分野ごとに、また、利用者層によって異なっている。技術の革新も日進月歩である。理工学メディアセンターの利用者の要求に合ったアクセス方法、保存と利用(検索)法を、コスト、スペース、スピード(タイムラグ)、インターフェイス、ハンドリングの容易さ等の角度から検討し、最善と思われる道を模索していきたい。

注) SCISearch の検索件数は、

1995.6-1996.3 (10ヵ月) 1,971 件 (月平均 197 件)

1996.4-1997.3 (12ヵ月) 3,462 件 (月平均 288.5 件)

1997.4-1998.3 (12ヵ月) 3,993 件 (月平均 333 件)

1998.4-8 (5ヵ月) 1,752 件 (月平均 350 件)

である。

表1. 分野別所蔵タイトル数とJCR収録タイトル数の比較

分野	所蔵タイトル数(A)	JCR収録タイトル数(B) 注)	B/A	インパクトファクター最高値とそのタイトル
Science, General (科学一般)	21	11	52.4%	28.417 Nature
Mathematics (数学)	132	101	76.5%	2.313 J.Royal Statistical Society. Ser. B: Methodological
Physics (物理学)	198	156	78.8%	20.208 Reviews of modern physics
Chemistry (化学)	147	107	72.8%	17.112 Chemical reviews
Biochemistry. Molecular Biology. Biology (生化学, 分子生物学, 生物学)	30	24	80.0%	40.997 Cell
Life Science (生命科学)	28	25	89.3%	7.617 Circulation research
Environment. Ecology. Geoscience (環境, エコロジー, 地球科学)	9	8	88.9%	3.534 Environmental science and technology
Science (miscellaneous) (その他の自然科学)	20	15	75.0%	4.240 Acta crystallographica. Sect. D: Biological crystallography
Engineering, General (工学一般)	29	21	72.4%	1.881 Nanotechnology
Mechanical Engineering (機械工学)	71	45	63.4%	3.125 Advances in applied mechanics
Electrical Engineering (電気・電子工学)	139	106	76.3%	3.400 Progress in quantum electronics
Computer Science. Information and Communication Engineering (コンピュータ科学)	91	58	63.7%	2.654 Neural computation
Robotics. AI. Control Engineering (ロボット工学, 人工知能, 制御工学)	19	14	73.7%	2.045 Artificial intelligence
Instruments. Meterology (計測工学)	11	7	63.6%	1.721 Applied spectroscopy
Materials Science. Metallurgy (物質科学)	91	72	79.1%	4.155 Advances in polymer science
Chemical Engineering. Biotechnology (化学工学, バイオテクノロジー)	49	42	85.7%	4.584 Trends in biotechnology
Biomedical Engineering (生体医工学)	13	13	100.0%	2.076 J.biomedical materials research
Engineering (miscellaneous) (その他の工学)	45	23	51.1%	1.674 Water research
Economics. Business. Management Science (経済学, ビジネス, マネジメント科学)	38	19	50.0%	2.215 Econometrica
Social Sciences (社会科学)	7	2	28.6%	2.067 J.Royal Statistical Society. Ser. A: Statistics in society
	1,188	869	73.1%	

注) インパクトファクターが 0.000 と「なし」は除く (SCI/JCR 1996 ed., 1995 ed., 1994 ed. による)

表2. 分野別インパクトファクター上位誌

分野別雑誌名	出版社	インパクト ファクター	管内 他地区 所蔵
<b>Science, General</b>			
1 Nature	Macmillan	28.417	+
2 Science. New series	AAAS	23.605	+
3 Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America	The Academy	10.244	+
<b>Physics</b>			
4 Reviews of modern physics	American Physical Society	20.208	
5 Annual review of astronomy and astrophysics	Annual Reviews	12.161	+
6 Solid state physics : advances in research and applications	Academic Press	11.571	
7 Physics reports. a review section of physics letters	North-Holland	8.613	+
8 Reports on progress in physics	IOP:Institute of Physics	8.440	
9 Advances in physics	Taylor & Francis	8.286	
10 Surface science reports	North-Holland	8.125	
11 Physical review letters	American Physical Society	6.477	
12 Advances in chemical physics	Wiley	5.900	
13 Annual review of fluid mechanics	Annual Reviews	5.758	+
14 Advances in nuclear physics	Plenum Press	5.667	
15 Annual review of nuclear and particle science	Annual Reviews	5.379	
<b>Chemistry</b>			
16 Chemical reviews	American Chemical Society	17.112	+
17 Progress in inorganic chemistry	Wiley	12.700	
18 Advances in organometallic chemistry	Academic Press	11.727	
19 Accounts of chemical research	American Chemical Society	10.546	+
20 Angewandte Chemie - International edition in English	Wiley-VCH	8.184	
21 Annual review of physical chemistry	Annual Reviews	7.174	
22 Chemical Society reviews	Royal Society of Chemistry	6.223	
23 J.American Chemical Society	American Chemical Society	5.948	+
<b>Biochemistry. Molecular Biology. Biology</b>			
24 Cell	MIT Press	40.997	+
25 Annual review of biochemistry	Annual Reviews	38.966	+
26 J.cell biology	Rockefeller Univ Press	12.680	+
27 Annual review of biophysics and biomolecular structure	Annual Reviews	12.389	+
28 Critical reviews in biochemistry and molecular biology	CRC Press	10.850	
29 Molecular and cellular biology	American Society for Microbiology	10.727	+
30 Nature structural biology	Nature America	9.430	+
31 J.biological chemistry	Am Soc Biochem	7.452	+
32 J.molecular biology	Molecular Biol Academic Press	5.195	+
<b>Life Science</b>			
33 Circulation research	American Heart Association	7.617	+

表3. 被引用数上位誌

雑誌名	1998 総被引用数	インパクト ファクター	最新引用 指数	1996 論文数	被引用 半減期	熱内 他地区 所産
1 J.biological chemistry	293,024	7.452	1.089	4,949	5.4	+
2 Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America	276,659	10.244	1.295	2,790	5.9	+
3 Nature	270,077	28.417	6.290	885	6.3	+
4 Science. New series	221,696	23.605	4.837	1,095	5.6	+
5 J.American Chemical Society	174,540	5.948	1.058	2,223	9.4	+
6 Cell	149,477	40.997	6.616	451	4.7	+
7 Physical review letters	132,797	6.477	1.266	2,684	5.5	
8 Physical review. B: Condensed matter and materials physics	130,789	2.975	0.563	4,631	5.6	
9 J.chemical physics	120,281	3.516	0.733	2,223	>10.0	
10 Biochemistry	91,747	4.818	0.904	1,952	6.0	+
11 American journal of physiology	89,048	3.323	0.418	2,532	6.0	+
12 J.physical chemistry. A-B	73,237	3.366	0.641	2,630	6.3	
13 Astrophysical journal. Pt. 1-2	71,220	3.232	0.232	2,124	6.7	+
14 Biochimica et biophysica acta	69,557	2.430	0.283	1,488	8.5	+
15 J.cell biology	67,402	12.680	1.807	483	5.9	+
16 J.geophysical research. A-E	61,912	2.446	0.533	2,180	7.3	
17 Molecular and cellular biology	58,647	10.727	1.659	748	4.5	+
18 Biochemical and biophysical research communications	56,993	2.872	0.328	1,822	6.0	+
19 J.organic chemistry	56,632	3.722	0.646	1,559	8.3	+
20 Applied physics letters	55,205	3.092	0.512	2,560	4.8	
21 Tetrahedron letters	52,693	2.497	0.501	2,506	6.4	
22 J.molecular biology	47,133	5.195	1.062	697	7.1	+
23 Physics letters. Sect. B	45,827	3.670	0.772	1,634	5.4	+
24 Physical review. A: Atomic, molecular, and optical physics	42,320	2.321	0.566	1,264	7.1	
25 Inorganic chemistry	41,161	2.990	0.530	1,255	8.1	
26 Physical review. D: Particles and fields	38,641	3.558	0.994	1,488	5.2	
27 Analytical chemistry	37,777	4.650	0.630	749	8.0	+
28 Angewandte Chemie - International edition in English	37,521	8.184	1.494	605	5.6	
29 Nuclear physics. B	36,280	3.462	0.993	1,206	6.3	+
30 Macromolecules	36,032	3.331	0.609	1,239	5.5	+
31 Chemical physics letters	35,626	2.589	0.397	1,452	6.0	
32 J.physiology (London)	34,964	3.904	0.271	797	9.5	+
33 Chemical communications	33,645	3.107	0.576	1,283	6.5	+
34 J.chromatography. A	30,985	2.457	0.293	1,348	6.7	
35 Methods in enzymology	30,103	2.082	0.667	369	9.5	+
36 Surface science	28,600	2.783	0.318	1,318	6.6	
37 J.applied physiology	28,165	2.050	0.340	630	9.1	+
38 Circulation research	26,855	7.617	0.992	257	6.9	+
39 Applied and environmental microbiology	25,831	3.129	0.471	788	6.1	+
40 Tetrahedron	23,883	2.232	0.573	1,200	7.1	
41 Annals of the New York Academy of Sciences	22,362	1.030	0.158	734	7.4	+

スタッフルーム

## 猫のいる暮らし

たけうち みき  
竹内 美貴

(湘南藤沢メディアセンター)

ペットについて思い返すと、子供の頃はいつもペットを飼っていた。しかし、とてもかわいがっていたインコが死んでしまったからは、“死”による別れが恐く、ペットを飼えずにいた。

就職した年の秋、隣の軒下で生まれた子猫たちと出会った。4、5匹の子猫は今まで見たことのない程小さく、冬にかけての寒くなる時期にちゃんと育つか心配になり、ミルクをやってみた。母猫は空腹でも子猫たちに先にミルクを飲ませ、自分はじっと我慢していた。

そんな姿に感動し、次第にミルクをやるようになった。そのうちに母猫は姿を現さなくなった。母猫は子供の面倒をみてくれそうな所が見つかると姿を消すらしかった。「任されてしまった!」と思いつつ、その頃にはすっかり情も移り、名前もつけてかわいがっていた。

その頃2匹になった子猫の兄弟は、しっかり者とのんびり屋のコンビでとても仲が良かった。木登りでも1匹は機敏にこなすが、もう1匹はどうしても降りられずもたもたしている。するとしっかり者はもう1回登り、見本を見せるかのようにゆっくりと降りてくる。猫って優しいのだなと感じた。こんな風に毎日、新しい発見ができて楽しかった。その頃、家族の話題の中心は外で自由にかけまわる猫たちだった。

でもある日、1匹が家に戻って来なかった。するととのんびり屋の猫は落ち込んでしまい、いつまでも遠くを見つめて待っているようだった。結局そのまま猫は帰って来なかった。その後残された猫は大きな傷がもとで病気になり入院し、退院後は家の中で飼うことにした。

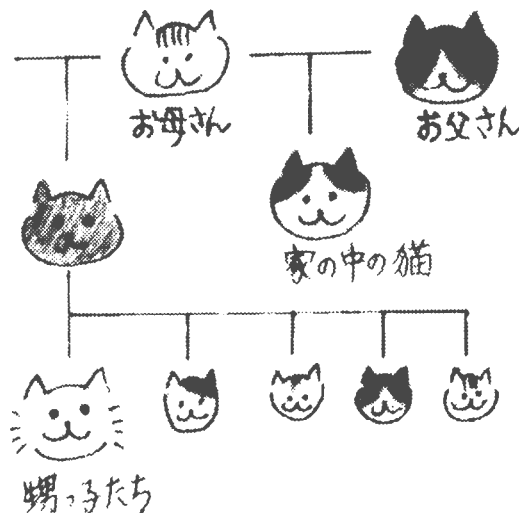
はじめの頃はひとつ屋根の下でお互いに慣れず大変だったが、4年経った今では「あうん」の呼吸ですっかり意志の疎通が自然になった。猫は家族とくつろぐの

が好きで、帰宅すると玄関まで出迎えてくれる。ソファーに座っていると膝にのる。猫をなでていると、猫も人も心が落ち着く。また、朝も1番に起きる私の部屋の前に忠犬ハチ公ポーズでじっと待っている。そういった態度が、うれしくてかわいくてたまらない。父はもともとそんなに動物好きというわけでもなかったが、今ではすっかり猫好きになり手荒ながらも父なりにかわいがっている。家の中で飼うようになって新たな発見も多かった。意外かもしれないが猫は情に厚く家族愛が強かった。

昨年から甥っ子の猫も家の外に住んでいる。母猫が後に産んだ子猫を連れて遊びに来る。母猫は子供を産んだばかりの頃は他の者が近づくと威嚇するが、前に産んだ息子に子守りをしてもらおうと、母猫は安心して出かけていってしまう。そんな様子を血のつながっている、家の猫は窓から見ていて話し掛けるように鳴いたり、姿が見えないと呼んだりする。猫は夜になると集まって「猫会議」をする

というが、家の場合は「猫の家族会議」である。

猫好きになると近所のどこにどんな猫がいて、元気になっているか、子猫が生まれた等、気になったりする。近所の公園にも野良猫はいるが、猫好きの人達に可愛いがられ、人懐っこく、こざれいである。あまり好きでない人にとっては「そうしているから増える」と良く思わないかもしれないが、野良猫は厳しい環境の中でそんなに長生きはできないし、人の身勝手に捨てられたりしなければそんなには増えないのだろう。身近に接してみると動物は素直で賢く心暖かい。こちらが見習うべき様なこともあり、「ペット」というよりは共に暮らす家族という感じだ。忙しい生活の中で心に潤いを与えてくれる我が家の猫たちに感謝したい。



# SFC から見た地区間リソースの依存関係について

しまだ たかし  
島田 貴史

(湘南藤沢メディアセンター)

## はじめに

本稿では①件数から見たキャンパス間での資料の移動状況 ②他地区資料を利用する際の特徴 ③キャンパス間の移動から見た、藤沢で使われる主題・使われない弱い主題、の3点について述べる。使用するデータはKOSMOSの1997年度の貸出データを参考としている。

## 1. キャンパス間の資料移動状況

湘南藤沢を中心とした塾内での資料の移動(依存)関係についてまとめたのが図1である。湘南藤沢所属の利用者が塾内の他センターから資料を借りるには、所属館を通して他センターの資料を取寄せる場合(以下、ILL)と、自分で直接センターへ行って手続きする場合(以下、直接利用)の2種類がある。1997年度に湘南藤沢所属者が直接利用で他センターを利用したのは9,403件(図1の④)で、ILLによる利用1,340件(同図③)の約7倍である。一方、他地区利用者の直接利用は1,579件(同図⑤)で、ILL貸出の1,937件(同図②)より少なくなっている。湘南藤沢所属者が他地区の資料を利用する場合は直接利用が多く、他地区所属者が湘南藤沢の資料を利用する場合はILLが多いことが分かる。

## 2. 他地区資料を利用する際の特徴

### 2.1 湘南藤沢での直接利用の特徴

他地区資料の利用状況との比較を行うために、基準となる湘南藤沢での通常の直接利用からみている。97

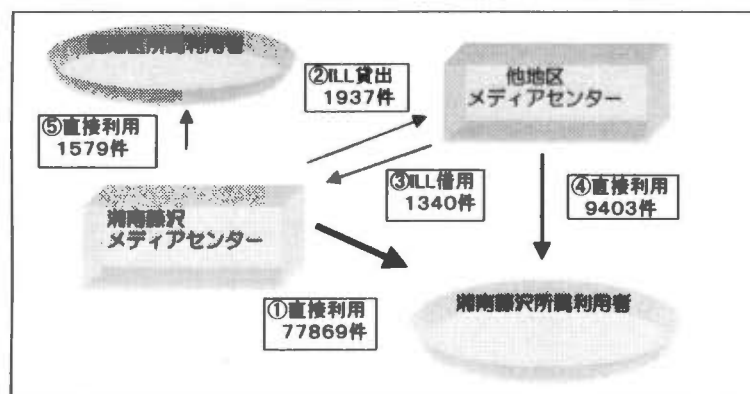


図1 湘南藤沢からみた地区間資料の移動

年度の貸出件数のうち直接利用は79,448件(図1の①+⑤)である。主題別に分けると図2のようになる。社会科学、総記、技術の順に利用が多く、反対に文学、言語、産業の利用が少ない。綱目で見ると経済学(全体の18%)、総記(13%)、政治学(8%)、社会学(8%)、都市・環境工学(5%)の利用がベスト5である。和洋比では94:6と和書中心となっている。利用者身分では学部生(84%)、大学院生(12%)、教職員(3%)、その他(1%)である。昨年の利用実態調査とほぼ同じである。

### 2.2 他地区資料の利用の特徴

相手先別では三田(ILL38%、直接60%)、日吉(ILL39%、直接37%)でほとんどである。以下藤沢中高(ILL15%、直接0%)、矢上(ILL6%、直接2%)、信濃町(ILL2%、直接1%)の順である。主題別<sup>3)</sup>(ILLが図3、直接が図4)には、ILLでは社会科学、文学、自然科学の利用が多く、芸術、産業、哲学の利用が少ない。綱目では政治学(全体の9%)、経済学(8%)、社会学(6%)、総記(5%)、法律学(4%)がベスト5である。一方、直接利用では、社会科学、技術、歴史の利用が多く、言語、産業、自然科学の利用が少ない。綱目では経済学(20%)、政治学(11%)、社会学(8%)、法律学(4%)、教育学(4%)がベスト5である。利用身分では、学部生(ILL54%、直接77%)、大学院生(ILL26%、直接18%)、教職員(ILL20%、直接4%)となっている。和洋比は、和書ILL87%、直接(三田)95%・(日吉)99%、洋書ILL13%、直接(三田)5%・(日吉)1%である。

全体的な特徴として①直接利用の方がILLより7倍も多い②主題構成がILLと直接利用で異なる。ILLでは比較的様々な主題が利用されているのに対して、直接利用では社会科学への集中が目立つ③ILL、直接利用とも学部生の利用が多い、大学院生・教職員はILLが主流である。④和書の利用が際立つ。洋書はほとんど利用していない。

### 2.3 他地区所属者への貸出の特徴

直接貸出の所属地区別統計を出せなかったためILLのみの統計になるが、

地区別でもっとも件数が多いのが全体の7割を超える三田地区(72%)である。以下、日吉(12%)、経管研(6%)と人文社会学系のキャンパスが中心である。身分別では学部生(ILL 30%, 直接 77%), 大学院生(ILL 45%, 直接 13%), 教職員(ILL 19%, 直接 6%)である。主題としてはILLが図5, 直接が図6である。網目では経済学(ILL 26%, 直接 28%), 社会学(ILL 8%, 直接 8%), 政治学(ILL 8%, 直接 5%), 総記(ILL 5%, 直接 10%)が利用の多い主題である。和洋比は、和がILL 56%, 直接 82%, 洋がILL 44%, 直接 18%となっている。

全体的な特徴として(1)藤沢の交通事情も反映してか、ILLの件数の方が直接利用より多い(2)ILLと直接利用で主題構成が似ている(3)主題構成が藤沢での直接貸出(図2)とも似ている(4)直接利用と比べてILLの大学院生の割合が高い(5)ILLの洋書の割合が高い、といったことが挙げられる。

### 3. 藤沢で使われる主題・使われない主題

藤沢の資料を貸出すケース(藤沢所属者の直接利用(図2), ILL貸出(図5), 他地区利用者の藤沢での直接利用(図6))で利用が多いものは、社会科学, 総記, 技術の3つである。反対に利用の少ないものは言語, 文学, 哲学, 産業の4つである。次に藤沢所属者の他地区資料の利用状況を見てみる。他地区資料の利用には「自館に無い資料」というイメージがあるが、他地区資料で一番利用(ILL借用(図3), 藤沢所属者の他地区での直接利用(図4))しているのも社会科学である。ここでは技術, 歴史, 自然科学, 文学が利用されている。ここでも言語, 産業は利用が少ない。結果として「藤沢では言語, 産業はあまり使われない主題」で、「社会科学, 技術は自館だけでなく他館資料も利用している」ことがわかる。

### 4. まとめ

他地区資料への依存関係を処理件数と、主題からみてきた。件数の面から言えば、藤沢所属者は1万冊以上の資料を他地区に頼っている。これは単に都会キャンパスへのアクセスが良いだけが理由ではないだろう。今一度藤沢の蔵書を見直す必要を感じる。主題面から見ると、利用者は藤沢でもよく使っている主題を他地区からも取寄せていることがわかった。利用者にとって他館は自館の外部書庫なのかもしれない。今後どの程度同一主題を各地区で持つべきなのか、本当に分担収集は可能なのか等を考えてゆきたい。

### 注

- 1) 藤沢の分類では、新書や文庫本に“000”という請求記号を与えている。今回は総記としてカウントしている。情報科学も総記に分類されている。
- 2) 杉山良子。“湘南藤沢メディアセンターにおける利

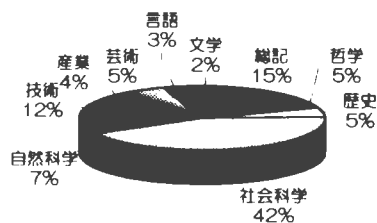


図2 湘南藤沢での直接利用(主題別)

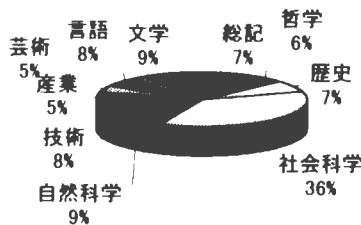


図3 相互貸借で他地区から借用(主題別)

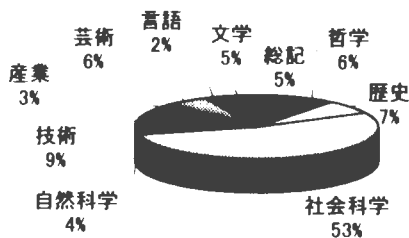


図4 三田・日吉地区での直接利用(主題別)

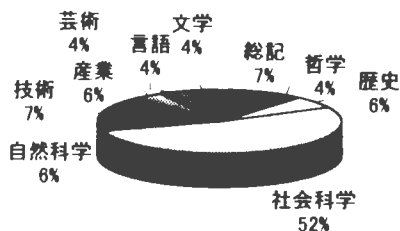


図5 相互貸借で他地区への貸出(主題別)

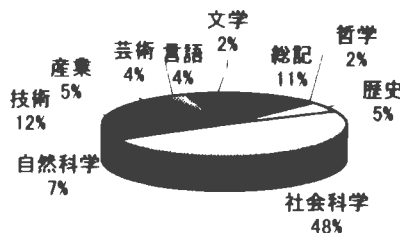


図6 他地区所属者の藤沢直接利用(主題別)

用実態プロジェクト報告”, MediaNet. Vol.5, P46-50 (1997)

3) 請求記号で判定しているため、学部図書などカウントできないものがあつた。



## SFC 教員著作展示コーナーを設置して

すぎやま よしこ  
杉山 良子

(湘南藤沢メディアセンター)

本年4月、湘南藤沢メディアセンターでは2階レファレンスコーナー横に「SFC教員著作展示コーナー」を開設した。これは、湘南藤沢キャンパスに所属する教員の学術活動の一端を広く知らせることを目的としたものである。木製の展示書架は施錠されており、9月現在、約230冊の図書をジャケットを付けたまま展示している。

展示しているものは、1998年4月現在にこのキャンパスに在籍している専任教員が、1990年4月以降に出版した著作物である。その範囲は著書、編著書、翻訳書とし、監修のものは含まない。また、展示を主目的としているため、一般の雑誌論文などは対象外となる。

展示図書はコーナー開設時点で購入や寄贈などによって入手が可能だったものに限られているため、残念ながら対象となる著作物すべてではない。

発注リストを作成するにあたっては、和書はCD-ROMを利用することにした。検索結果のダウンロードが可能なものとして、J-BISC、CD-140万冊出版情報、CD-BOOKSの3種類を用いた。それぞれから得られた検索結果を1つのファイルにまとめ、基本となる教員著作リストを作成した。洋書については、オンラインで著者名検索を行った。

展示は2つの書架を総合政策学部、環境情報学部に分け、教員氏名のアルファベット順、同一著者の中では古いものから順に、背が見える形で並べている。これらはいくまで展示用図書であって、蔵書は別に書庫にある。利用者は展示図書を直接手にとって見ることができないため、著作を利用したい人のために、それぞれのタイトルと請

求記号の対応表が置かれ、利用の便を図っている。SFCに直接関係する刊行物や1998年に出版されたものについては、表紙が見えるように展示棚に寝かせ、目立つように展示している。

新刊書収集にあたっては、利用者が速やかに展示を見ることができるよう、通常の出版案内の他、教員の執筆予定や雑誌の近刊予告なども意識しながら、それらの入手に努めている。

年度末に展示の見直しを行い、離籍者の著作の除去、新刊書の組み込み、蔵書の請求記号リストの更新などをしていくつもりである。また、書架が満杯になった段階で、出版年の古いものから除去していくことも考えている。

今まで著作の寄贈依頼をしても反応があまりなかったが、最近では教員自らが、「教員著作コーナーに展示してほしい」と新刊書を寄贈して下さることがある。

このコーナーがこれからのSFCにとって良い刺激になっていくことを期待したい。

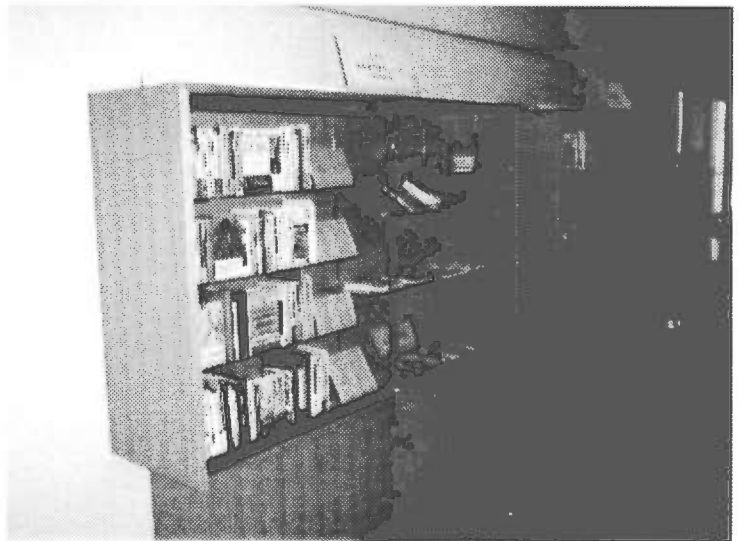


写真 SFC教員著作展示コーナー

ティールーム

## マッカーシーと慶應義塾

たむらしゅんさく  
田村 俊作

(文学部教授)

国立国会図書館や米国議会図書館で実施されている「立法レファレンス」(「立法調査」ともいう)の生みの親ともいべきマッカーシー(Charles McCarthy, 1873-1921)が来塾したことがある、それも図書館とはまったく関係のないことで、と国立国会図書館元職員の中林隆明氏が書いている(『レファレンス』Vol.47, No.10, p.4-17(1997))。氏によれば、マッカーシーは明治42(1909)年にウイスコンシン大学の野球チームを率いて来日、三田綱町グラウンドで慶大チームと対戦したのだという。

マッカーシーはウイスコンシン大学で政治学を学び、1901年に学位を取得後、ウイスコンシン州議会事務局に就職し、立法レファレンス図書館を創設、その経営に生涯を捧げた。立法レファレンスサービスはすでにデューイ(Melvil Dewey, 1851-1931)がニューヨーク州で始めていたが、マッカーシーのサービスは他とは異なるまったく独自のものであった。彼の図書館には、調査部門に加えて、議員の法案起草を援助する部門が置かれた。調査部門では、通常の図書館資料の他に、パンフレットやピラなども収集したほか、電話や手紙を活用し、時には現地に赴いて、独自に情報の収集に当たった。サービスを提供する際にも、図表化したり、要約したりして利用の便を図った。重要案件では事前に情報を収集し、他州の動向や立法上の問題点などをまとめた報告書を刊行した。通常の図書館業務の範囲を超えるこうした調査業務によって、マッカーシーは州議会の立法活動を支援し、同時に進められた州政改革とも相まって、ウイスコンシン州の議会活動は内外の注目を浴びることになる。こうしてマッカーシーの立法レファレンスは他州や大都市などに影響を与え、立法レファレンス部門や市政レファレンス部

門の設立を促した。1914年には米国議会図書館に立法レファレンス部門が置かれ、連邦議会の調査活動を支援する態勢が整備された。わが国では、ニューヨーク市政調査会をモデルに1922年に設立された東京市政調査会や、米国議会図書館をモデルに1948年に設立された国立国会図書館の調査及び立法考査局に、マッカーシーの創始した立法レファレンスの影響が見られると言われている。

伝記を見ると、マッカーシーは調査活動や著作活動などの他に、スポーツでも知られており、小柄ながら大学サッカーの著名な選手で、母校ウイスコンシン大学に出講して政治学を教える傍ら、サッカーチームのコーチを務めたりもしていた。慶應義塾の招きでウイスコンシン大学の野球チームが来日する際に監督に選ばれたのも、こうしたスポーツ面での実績が買われてのことと思われる。同チームは明治42年9月16日に来日、慶早などと8戦し、4勝の成績をあげて10月12日に帰国した。一行は試合の傍ら歓迎式典に出席したり、日光や江ノ島を見物したりしているが、マッカーシーもまた、講演や政治家との会談を精力的にこなしている。『時事新報』に米国関係者の言を引いて「マ教授は米国の立法部の事業に付て多大の功勞ある人(中略)日本の政治家と成るべく接近される方法を取られたい」(9月21日)とあるように、米国の政治や議会活動に関する講演をしたり、日本の事情を調べたりもしているようである。9月24日には通信大臣後藤新平と会談しているが、満鉄総裁として調査部を設置し、後年東京市長時代に市政調査会を置いた後藤がマッカーシーと何を話し合ったのか、興味は尽きない。

# 中世の印刷文化と東国社会

にしおか よしあみ  
西岡 芳文

(神奈川県立金沢文庫主任学芸員 大学院文学研究科非常勤講師)



本年1月26日～31日、丸善日本橋店に於いて「日本中世印刷史」展が開催され、慶應義塾図書館および同大学附属研究所斯道文庫で所蔵する、平安時代から室町時代に至る古刊本七十余点が展示された。本稿は、会期中に行なわれた5回の講演会のうち、初日の講演を西岡氏の協力を得てまとめたものである。

書物や出版・印刷を研究する学問としては、書誌学という、今文化財として残っている書物そのものを鑑定する分野があります。さらに本の中に書かれているテキスト自体を研究する文献学があります。それから本を扱うもう一つの視点として、昔風の言葉で言えば文化史、現代風に言えばメディアの歴史というのでしょうか、そういった研究分野も考えられます。口で伝えられている段階と、文字で書かれている段階、さらに出版される段階、それぞれ情報の中身や受容のすがたは、質・量ともに相当違っているはずですが、そうした社会とメディアの相互関係は、まだまだ未開拓のテーマといえます。

## 日本と中国の印刷文化の違い

中世(およそ12～16世紀)における社会と印刷の関係を考えるときに、まず当時の日本と中国では印刷文化について大きな違いがあるということを考える必要があります。

日本中世の印刷は、基本的には小部数の注文生産でした。そして鎌倉時代までの段階ですと、刷られた書物自体も実用品というよりは、むしろ宝物というような感じで受け取られ、貴重視されていました。そして出版事業そのものが、ある特定の篤志家が一種の慈善事業といえますか、仏教への喜捨として行う、そういう事業であったのです。

それに対して、同じ時代の中国の印刷を考えてみますと、こちらは非常に大部数でしかもそれを商品として大量に生産しており、書物のバリエーションも桁違いに多いのです。しかもその出版事業そのものも、相当システム化されておりました。

ちょうど去年の春に重要文化財に指定されました

が、金沢文庫に『宋版一切経』という書物があります。これは金沢文庫・称名寺を開いた北条実時が、弘長元年(1226)、わざわざ中国に坊さんを派遣して取り寄せたものです。一切経というのは仏教のあらゆるお経を版木に彫り起こしたもので、現在でも大本山級のお寺に行きますと、経蔵とか輪蔵きやうぞう りんぞうと言って、建物一つ分、ぎっしり詰まるほどの量があるお経です。一部ずつ折帖になっておりまして、全部で7,000帖ぐらいあるのですが、金沢文庫には称名寺伝来の一切経が約半分、3,500帖ほど残っております。実はその『宋版一切経』というのは、日本の中に完全なものはそれほどありませんが、ある程度まとまったもので、各地の寺院に10セットぐらいあるんじゃないでしょうか、その中の1つですので、非常に珍しいと言えは珍しい文化財なのです。中国では、今は宋の時代の一切経というのはほとんど失われています。

この『宋版一切経』を見ますと、相当ビジネスライクに出版されたことが分かります。中国でお経を刷る時、1枚の版木で一度におそらく何十枚か何百枚かを刷るわけですね。1種類のお経が刷りあがりますと、製本する人はまた別において、それが刷り上がったものを集めてどんどん本にしていくわけです。ですから同じ1巻のお経の中でも部分的に紙の色や墨の色が微妙に違っていたりして、そこから機械的な流れ作業で作られた印刷物だということがわかるわけです。

それに対して日本の印刷物を見ますと、例えば泉涌寺版や西大寺版という、畿内の寺院で出版された、『宋版一切経』の一部をそのままかぶせ彫りにしたお経がありますが、そういう書物を見ますと、形の上、つまり版面はかぶせ彫りですから中国のもの

とほとんど変わません。しかし本文を一目見れば和版であることがわかります。

中国で出版されたお経というのは、版木1面分が必ず用紙1枚分(17字×6行×4折)になっています。ところが和版は、紙の継ぎ目にも字がまたがって印刷されている。つまり、1枚の紙が1枚の版木ではないのです。なぜそうなるかという、日本の印刷の場合は、先に紙だけつないだ長い真っ白な巻き物を作るらしいのです。それに後からハンコを押すように1面ずつ刷っていく。そうすると紙の継ぎ目にも全部字がかぶさっていくということになるわけです。そういう点で、中世の日本では、一見中国と同じ形に見えますが、実は非常に原始的な印刷をしていたということがわかります。

一般に印刷の歴史の上では、外典と総称される、仏教以外の本が注目されてきましたが、しかし出版事業としては、規模が格段に違う一切経をまず考えなければなりません。一切経は中国だけでなく、朝鮮(高麗)や契丹などの周辺王朝でも出版されたのですが、日本ではついに江戸時代まで出版することができませんでした。その辺に、東アジアの中での日本の文化的な力量の限界を感じます。

## 印刷メディアと中世文化

中世の日本で競って輸入された『宋版一切経』を見ますと、これは規格出版物ですから、あらゆる種類のお経とか、「経・律・論・疏」といわれる仏教のあらゆる書物が、同じ版式・同じ体裁で、一括して一切経という叢書に収められているわけです。従って、この一切経の中では、形の上で少なくとも書物(経典)の優劣、どれが優れていてどれが劣っているということはない。それからテキストそのものが非常に一折何字・何行という規格化された形で出版されておりますから、極端に言えば、鎌倉で読みかけた本を、京都へ行っても、『宋版一切経』さえあ



れば、そのまま読みつづけることができる。この辺が写本で伝えられたお経との大きな違いなんです。それで、膨大な仏典というものが規格化・標準化された形で、一般の学問をしようと思う人たちに開放された。これが『宋版一切経』がもたらした大きな効果だろうと思います。

鎌倉時代の偉い学僧が、一生の間に何回も一切経を通読したというような自慢話めいたエピソードがよく記録されています。『宋版一切経』という、標準的な形で作られたテキストがあったために、おそらく学僧が一つの先入観にとらわれずに、お経というものに向かうことを可能にしたと思うのです。特に、鎌倉幕府が開かれた以後の東国に、『宋版一切経』がどんどん輸入されたことによって、衆徒(僧兵)集団が、武力によって新しい学問を排斥するような中央の大寺院から離れたところで、例えば親鸞とか日蓮とかいった僧たちが、自分なりに一切経を読みこなし、新しい教義を打ち立てることができた大きな原因だろうと思われま

す。室町時代(15世紀)になりますと、今度は朝鮮半島からの一切経の輸入が盛んになります。「倭寇」という、東シナ海をまたにかけて行動した集団の一番の輸入品は一切経だったのです。この時は主に朝鮮版の一切経です。現在も韓国の海印寺に8万枚以上の版木が残っていますが、室町時代の日本ではこの一切経が争って求められました。ある計算では、だいたい15世紀から16世紀までに朝鮮半島から50セット以上の一切経が輸入されたと推定されています。こうしてさらに日本に版本の一切経が普及することになったのです。

## 民衆の中の印刷文化

しかし、大量の一切経が輸入されたとはいえ、実際にそれを使うのは一部の僧侶だけでしたから、一般の民衆にとって身近な存在ではなかったと思われます。

ひるがえって、日本の中世社会で一番流布した印刷物は何かと考えますと、たぶんそれは牛玉宝印というものなのです。牛玉宝印は、カラスで文字を書いた熊野三山のものが有名で、今の誓約書にあたる起請文を書く時に、神仏に誓約する意味をこめてこの用紙の裏側を使いました。熊野だけでなく、中世の村とか郡ぐらいの地域のお寺や神社には、たいがい牛玉宝印の版木がありまして、お正月の修正会という儀式が終わりますと、氏子や村人に1枚ずつ配られ、それを家の入口に貼ったり、田んぼの隅に申にはさんで立てたりして、まじないのお札として使うわけです。

一遍上人が「賦算札」という、極楽へのパスポートになる南無阿弥陀仏と刷った小さな紙を、日本中を回って数万枚も配ったという例もありまして、おそらく中世の印刷物で一番多いのは牛玉宝印、あるいは仏像を印刷した摺仏など、現在でいえばお札に当たるものであったと思われる。

こうした原始的な印刷物以外に、民衆に身近な存在となったのは、『大般若経』だろうと思われます。これは全部で600帖あるお経で、日本でも中世から出版されています。お経ですから、もちろん読まれる場合もありました。声を上げてお経を通して読むことを「真読」といいます。それに対して「転読」という方法があります。「転読」というのは非常に安直な方法で、つまり一冊の折帖のお経をぱっと持ち上げて、題名だけ読んで、バラバラバラと落とし、それで一冊読んだことにします。それを大勢の坊さんが次々に片づけていく。これは現在でも初詣などに行きますと、色々なお寺でやっています。そういう安直な読み方がある、それだけでも功德があると言われているのです。さらに、輪蔵という一切経を収めた回転式の本棚を、ぐるっと1回転させれば、7,000巻のお経を全部読んだことになるという方法もありまして、どんどん安易になっていきます。

したがって、『大般若経』が出版されても、それが直ちに読まれる本だと考えない方がよいのではないかと、もちろん読む人も中にはいたでしょうけれども、一種のまじないの道具としての需要が多かった。そのへんに現代と違った中世の人々の印刷物に対する観念がみえるように思います。

こうして印刷文化について、中国と日本、あるいは現代と中世といった対比で考えてみましたが、長い歴史の中で見れば、印刷物は読むために作られ、使われる、現代的な方向に進んでまいります。今回の展示の中でも、中世の学僧たちが、読むために一生懸命書き込みをした本が陳列されていますが、書物が個人の所有になり、自由に書き込みができるようになったのは、出版文化の進展の結果であるわけです。

## 東国における印刷文化

最後に、地域社会と印刷文化の関係を理解するために、中世の東国の印刷の一つの実例をご紹介します。

ここでご紹介するのは、書誌学上「小石川版阿弥陀経」と呼ばれる、中世の東京で出版されたタテ17センチほどの小さな巻物のお経です。残念ながら今回の展示には出品されておりませんが、これは日本に2つしかないからで、1つは称名寺に伝

わり、現在金沢文庫で保管するもの、もう1つは芝の増上寺に残っております。江戸がまだ草深い武蔵野の一隅であった時代に出版されたもので、中世の地方版の一遺品ですが、こうした出版事業が、この場所、この時代になぜ行なわれたのか、今までほとんど考えられてこなかったのです。

この『小石川版阿弥陀経』は、奥書(刊記)に、応永15年(1408)11月15日に「武州豊島小石川談所」というところで出版されたことが明記されています。今の芝の増上寺の開山にあたる、西誉聖聡(1366-1440)が、勧進活動によって資金を集めて出版したお経です。史料がないので、このお経が出版された背景はよく分からないのですが、現在も印刷業の集中地域である小石川という場所が、東京の印刷文化の発祥地であるという不思議な因縁もありますので、すこし追究してみたいと思います。

現在のイメージでは、地下鉄の茗荷谷と白山の中間に当たる、小石川植物園の入り口の谷間一帯が小石川の中心です。地表に水流は残っていませんが、昔は小石川という川が流れておりまして、上流の千石あたりから、水道橋付近までが昔の小石川村です。「小石川談所」の系譜を引くとされる伝通院は、南西丘陵上に広い境内を構えています。これは徳川家康の母を葬るため、江戸時代になって新たに造営された寺院です。

中世の小石川の中心は、小石川植物園の西の対岸にあたる丘陵の上であったようです。ここにはいくつかの古いお寺が集まっています。一つは光円寺という、行基菩薩が開いたという伝説がある浄土宗の寺院で、ここには空襲で焼けるまでは東京で二番目に大きな銀杏の木がありました。その隣に善仁寺という浄土真宗のお寺があり、道路を挟んだ向かい側に、極楽水宗慶寺という浄土宗のお寺がごぞいます。

この宗慶寺が、「小石川談所」の遺跡と称しています。談所というのは中世の学問所のことです。南北朝時代の末、今の麹町・赤坂付近に増上寺を開いた西誉聖聡は、浄土宗の教理的な自立を心がけて活動した学僧です。ところで、西誉の先生にあたる了誉聖岡(1341-1420)は、これも当時有名な浄土の学僧で、常陸の瓜連常福寺を拠点に活動しておりましたが、この寺が戦火のために荒廃したため、見かねた西誉が、困っている先生を小石川に招き、談所を建てて弟子の教育を任せたといいます。

宗慶寺には、極楽水といわれる有名な水源があり、小石川の中心地となっていたようです。ここには、行基菩薩を崇める古い信仰集団が拠点を構え、後に浄土宗光円寺に発展したようです。また鎌倉時

代の後半に、親鸞の孫弟子かひ孫弟子にあたるような人達が、ここに道場を構え、善仁寺となりました。最近、慶應義塾が購入しました『聖徳太子伝絵』という写本には、戦国時代の永正14年(1517)に小石川善仁寺で写したという奥書がありまして、善仁寺も古い由緒をもっていることが分かりました。そういう重要な地点を、室町時代になってから浄土宗の学僧たちが拠点としたのです。

『小石川版阿弥陀経』は、経典であるとともに、脇に記号がついた声明の楽譜で、大勢の僧侶が一度に合唱するために、筆写することが難しい複雑な譜面を沢山印刷したのです。これを必要とする僧侶、作る資金と技術が当時の小石川にあったということに注目しなければならぬわけです。

実は、増上寺の西誉聖聡には、江戸・浅草界隈の有力な商人たちが檀那(支援者)としてついていた

ようです。今は実物は見当たらないのですが、江戸時代の復刻版(知恩院の義山版)の刊記によれば、西誉49歳の時に出版した『浄土三部経』があったようで、そのパトロンは隅田の性阿弥陀仏という人物であったと記されています。西誉は他にも性阿のために浄土宗の教義の本を書いて与えております。

つまり水上交通を通じて関東全域の流通の集中する浅草周辺(今の墨田区墨田あたり)に根拠を構えていた有力な信者が、こうした出版事業の資金を提供していたのです。

一つの出版事業の背景には、それを必要とする人々、出版の技術、そして地域資本の存在が不可欠ですが、その辺の事情が明らかな事例はあまり知られていませんでした。今回は、中世の小石川の小さな一例を通じて、出版と地域社会との関係を考えてみました。

## 展示会予告

### 『寓意の鏡 — 16・17世紀ヨーロッパの書物と挿絵』

主催: 慶應義塾図書館 協賛: 丸善株式会社

会期: 1999年1月25日(月)～30日(土) 最終日は5時閉場

場所: 丸善・日本橋店4階ギャラリー

講演会: 4階特設会場(各日とも14:30～15:30, 先着80名)

25日『初期刊本の挿絵から絵画へ:ヴェネチア派を中心に』

東京大学大学院人文社会系研究科教授 小佐野 重利

26日『エンブレムとシェイクスピア劇の舞台図像(ステージ・タブロー)』

東海女子大学文学部教授 岩崎 宗治

27日『レイアウトの変化:中世写本からルネサンスの印刷本へ』

慶應義塾大学文学部教授 高宮 利行

28日『挿絵になった版画:その豊かな世界』

町田市立国際版画美術館学芸員 佐川 美智子

29日『死と無常の寓意とエンブレム』

慶應義塾大学文学部教授 松田 隆美

慶應義塾図書館が所蔵する16・17世紀ヨーロッパの挿絵本約90点を展示解説し、書物と挿絵の結びつきの様々なかたちを紹介します。展示品は、「エンブレム・ブック」と称される、テキストと挿絵の組み合わせにより、道徳、信仰、愛、社会風刺などのテーマを寓意的に扱った書物と、古典文学、地誌、年代記などの挿絵入りの諸版とに、大別されます。その他、近代初期の書物

生産の様子を描いた挿絵や、初期印刷本の欄外装飾の例などもあわせて紹介します。主要な展示品には、『ポリフィリウス睡夢譚』(1545)、キルヒャー『地下世界』(1678)、オウイディウス『変身物語』(1584)、ローレンハーゲン『エンブレム選』(1611-13)、ボワサーール『人生の劇場』(1596)などが含まれます。

# 医学メディアセンターのホームページ

かどや ひさし  
角家 永

(医学メディアセンター)

おかの じゅんこ  
岡野 純子

(医学メディアセンター)

いらこ  
市古 みどり

(医学メディアセンター課長代理)

## 1. ホームページの開設

医学メディアセンターの職員によるインターネットの利用の開始は、1992年6月に2台のUNIXワークステーションが設置されたことに始まる。以後、電子メールなどインターネットを各種業務や事務連絡に使い始めた。さらに、メディアネット研修委員会が行った職員コンピュータ研修への参加や当センターの研究会を通して、インターネットに関する知識も広がると同時に、職員個々にホームページの作成も行われていた。しかしながら、メディアセンターのサービスの一部として機能する正式なホームページの開設は先送りにされていた。そうしたなか、医学部キャンパス内のネットワークの基盤整備が開始され、1996年7月には、利用者向けに3台の公開用ワークステーションがメディアセンター閲覧室に設置された。これをきっかけに、医学メディアセンターとしての正式なホームページの開設が急務となり、1996年8月27日にホームページの公開となった。

開設当初のトップページの項目は従来の図書館サービスに関する項目で、内容は利用に関する案内およびネット上の情報源へのリンクを中心としたものであった。その後、キャンパスネットワークを支えている情報システムサービス担当のページを加えるなどホームページ全体の構成を再検討する必要が出てきたため、1997年8月に5名からなるホームページ作成委員会を発足し、数回の検討を経て現在のスタイルに至った。

## 2. ホームページの内容・構成

医学メディアセンターのホームページは、シンプルさ、見やすさ、そして内容の豊富さを目指している。不要な画像は省き、ページの階層も単純化して、利用者が目的のページまで素早くたどり着くことができるようなページ作りを心がけている。目次は、「図書館」、「その他」、「情報システムサービス(計算室)」、「院内メディアセンター・図書室」の4つの項目からなり、そのもとでさらに詳しい情報ページを

展開している。また、特に重要な事柄はニュースとしてトップページの先頭に掲載している。ページの作成・更新作業は、目録、雑誌、閲覧、レファレンス、システムなどの各係が責任を持って担当し、迅速な情報提供に努めている。全体的な管理(レイアウトの統一、誤字脱字の修正など)は、Web担当者が行っている。

各ページの内容は次のとおりである。

### A. 図書館

#### 1. 利用について(学内の方、学外の方)

学内利用者用と学外利用者用とにページを分け、開館時間・休館日、閲覧・貸出・返却、文献複写、資料の探し方、各種サービスなどについて案内している。貸出カウンターに置いてある利用案内パンフレットとほぼ同じ内容であるが、ホームページでは、加えて、医学メディアセンターの図書分類である米国医学図書館分類法や、資料の配置場所を示す別置記号を参照できるようにしたり、ネット上でOPAC検索ができるようにリンクを張っている。

(担当: 閲覧係)

#### 2. 図書についての情報

『きたさとニュース』には、創刊号以来「新着図書リスト」を掲載していたが、1994年の176号をもって休止した。その後、この情報に代わるものを模索していたが、1996年8月整理分からホームページへの公開を開始し、主題ごとに分類した図書リストを毎月更新している。現在このページは、この新着図書リストと、主題別図書情報(インターネットと医学の本)の2つから成っている。

(担当: 図書目録係)

#### 3. 雑誌についての情報

このページでは、主に新規受入雑誌・誌名変更・廃刊・休刊・受入中止情報、重複雑誌に関する情報を公開している。他に、所蔵雑誌の重複分リストや、

KEIO UNIVERSITY  
MEDICAL INFORMATION  
AND MEDIA CENTER  
KITASATO MEMORIAL MEDICAL LIBRARY  
慶應義塾大学医学メディアセンター(北里記念医学図書館)

English version is [here](#) .

〒160 東京都新宿区信濃町35  
TEL:03-3353-1211 (内線)カウンター2754・2755/総務2751/計算室2759  
FAX:03-3357-2031

**News**

- ・ 休館日のお知らせ
- ・ 構内停電の為、臨時休館いたします。(10月4日)
- ・ 館内資料の配置替えをしています。  
1970年代の雑誌を山中資料センターに移しました
- ・ 朝日新聞の記事を検索できるようになりました。朝日新聞Original News Archivesというデータベースです。文献検索の項をクリックしてください。
- ・ Web of Scienceという新しいデータベースサービスが加わりました。文献検索の項をクリックしてください。

● 図書館

- ・ [利用について\(学内の方/学外の方\)](#)
- ・ [図書についての情報](#)
- ・ [雑誌についての情報](#)
- ・ [文献検索](#)
- ・ [医学関連情報](#)
- ・ [医学関連情報ガイド・サーチエンジン](#)
- ・ [展示](#)
- ・ [新しいサービス](#)
- ・ [お知らせ](#)

● 情報システムサービス(計算室)

- ・ [情報システムサービス\(計算室\)総合案内](#)  
(慶應義塾内からだけアクセス可能)
- ・ [ワークステーションシステム案内](#)  
。 [利用者のホームページリスト](#)
- ・ [PCシステム\(WindowsNTパソコン\)案内](#)
- ・ [三田計算室のホストコンピュータ\(富士通GS-8400/20\)の利用について](#)

● その他

- ・ [スタッフの連絡先・メールアドレス](#)
- ・ [きたさとニュース](#)
- ・ [医学メディアセンター統計](#)
- ・ [医学メディアセンターへのアクセス](#)

● 館内メディアセンター・図書室

- ・ [看護短期大学図書室](#)
- ・ [三田メディアセンター](#)
- ・ [日吉メディアセンター](#)
- ・ [理工学メディアセンター](#)
- ・ [湘南藤沢メディアセンター](#)
- ・ [経営管理研究課図書館](#)

Home [慶應義塾大学ホームページ](#) [慶應義塾大学信濃町キャンパスホームページ](#)

Oct. 2, 1998 rev.  
[webmaster@lib.med.keio.ac.jp](mailto:webmaster@lib.med.keio.ac.jp)

Copyright(c) Keio University Medical Information and Media center, 1997  
All rights reserved.



行方不明雑誌のリストも載せているが、書式に問題があるためか、いまだ手応えはない。雑誌は、タイトルや出版社の変更、休刊・廃刊等、電子媒体での出版など変化が著しい。その情報をできるだけ速く提供するためには、頻繁に更新・改訂するよう努めていかなければならない。

(担当:雑誌係)

#### 4. 文献検索

医学文献検索のための基本的なデータベースであるMEDLINEを中心に、各種データベースの内容の解説や利用方法を紹介し、リンクを張っている。また、雑誌係が作成している医学メディアセンター所蔵和雑誌特集記事索引のほか、医学資料を網羅的に収集している米国国立医学図書館や英国国立図書館ともリンクを張っている。

(担当:レファレンス係)

#### 5. 医学関連情報

医学に関する、主な学会、会議情報、米国政府機関および国際機関、日本の官公庁、雑誌、統計、図書館目録、遺伝情報、がん情報、クリニカルガイドライン、看護情報、レファレンス、教育、薬、新聞・メディアや、医学文献の書き方などのサイトを選択的に紹介している。各サイトからさらに関連するサイトへとリンクされているものがほとんどである。

(担当:レファレンス係)

#### 6. 医学関連情報ガイド・サーチエンジン

医学関連情報の中で紹介している情報源は選択的なもので、インターネット上の情報を網羅するものではないため、必要な情報を探したい場合に有益なサーチエンジンを紹介している。また、HealthWebやMedWebなど、インターネット上の医学関連情報をまとめたガイドも掲載している。

(担当:レファレンス係)

#### 7. 展示

医学メディアセンターでは、医学部史料委員会と共同で、図書館入口等に展示を行っており、この展示の内容を紹介している。

(担当:総務)

#### 8. 新しいサービス

医学メディアセンターで新たに始めたサービス、および医学研究・学習に役立つ他機関のサービスを紹介している。

(担当:レファレンス係)

#### 9. お知らせ

医学メディアセンターの休館日や開館時間の変更などのお知らせのほか、情報利用講座の予定などを必要に応じて掲載している。

(担当:閲覧係)

## B. その他

### 1. スタッフの連絡先・メールアドレス

医学メディアセンター職員の担当業務、連絡先、メールアドレスを掲載している。また、個人でホームページを作成している者は、そのページへのリンクを張っている。

(担当:Web担当)

### 2. きたさとニュース

『きたさとニュース』は創刊200号を機に、ホームページに公開することになった。年10回刊行、冊子体とともに、インターネット版を提供している。

(担当:『きたさとニュース』編集委員)

### 3. 医学メディアセンター統計

平成6年度から、医学メディアセンター統計を公開している。図書館情報サービス担当(テクニカルサービス)、図書館情報サービス担当(パブリックサービス)、情報メディアサービス担当の3部門の統計をメディアネット標準統計に伴い、年に1度更新している。

(担当:Web担当)

### 4. 医学メディアセンターへのアクセス

信濃町駅から医学メディアセンターまでの地図を掲載している。

(担当:Web担当)

## C. 情報システムサービス

### 1. 情報システムサービス(計算室)総合案内

キャンパスネットワークの運用情報、システム関連情報などを掲載している。キャンパスネットワークに関する情報の窓口となっている。

(担当:情報システムサービス担当)

### 2. ワークステーションシステム

ワークステーションシステムの案内のページである。システムについて、利用登録について、利用上の注意、ワークステーションの使い方、WWW(ホームページ)などの情報を掲載している。

(担当:情報システムサービス担当)

### 3. ユーザーのページリスト

各ユーザーのホームページのリストを掲載してい

る。他に、ページの登録の仕方、知っておくと便利なくつかのTips, WWWページのCGI機能についての情報がある。

(担当:情報システムサービス担当)

#### D. 塾内メディアセンター・図書室

塾内メディアセンター(三田・日吉・理工学・湘南藤沢)と、経営管理研究科図書室、看護短期大学図書室のホームページにリンクを張っている。

(担当:Web担当)

### 3. 今後の課題

インターネット環境が整ったことにより、図書館業務やサービスは大きく変化した。日常業務にインターネットを利用して、書誌事項の確認や文献検索を行ったり、1次資料が入手できるという事実は、職員に限らず多くの利用者に情報として提供したい。

一方、これらの情報がどのくらい正確で提供する価値のあるものかどうかは、日ごろから内容を確認し、評価しておかなければならないだろう。そのためにはたとえば、定評のあるメーリングリストに登録して情報を入手したり、主要な雑誌のブラウジングや電子メールによるコンテンツサービスを利用する、などといった必要がある。リンク集の作成は多くの医学図書館が行っており参考になるが、評価法を検討してより良い情報の提供を心がけたい。

インターネットの利用は、情報を一方的に入手するばかりでなく、情報の提供にも加わるべきであるといわれている。医学メディアセンターでは、独自にデータベース化している和雑誌特集記事索引をインターネット上で公開している。この情報は医学中央雑誌という医学文献のデータベースがCD-ROM化されて以来、必要性を問われているが、情報提供という立場から考えれば、その第一歩として捕らえる

ことができると考えている。また、現在は検索機能を備えていないが、今後の改良も時間の問題である。それに加え、医学メディアセンターは、医学部研究情報データベースの作成を行っており、すでに3年分のデータが蓄積されている<sup>2)</sup>。大学の自己点検評価が話題となっている今日、これらのデータを公開するとともに、九州大学のように、業績を図書館の蔵書とリンクさせて、その基礎データとするような展開も考える必要があるかもしれない<sup>3)</sup>。

図書館の基本的なサービスの改善もホームページを利用することによって行うことができるだろう。自宅、病棟、研究室からインターネットを使える環境が整ったいま、たとえば、レファレンス質問を受ける、購入希望資料を受け付ける、利用調査を行うなど、メディアセンターの窓口は図書館の建物の中だけにある必要はない。利用者との接点としてホームページを活用すべきであろう。

ホームページの維持はたやすくはない。幸い、医学メディアセンターは、職員数は少ないが職員同士がコミュニケーションをとりやすいこじんまりした環境のため、ホームページ維持のための合意は得やすい。新しい技術や情報を常に意識して取り入れ、より良いホームページを維持できるよう今後も努力したい。

### 参考文献

- 1) 慶應義塾大学医学メディアセンター. "医学メディアセンターホームページについて"きたさとニュース. No.201, p.2-4 (1996.11)
- 2) 平吹佳世子, 奥村朋子. "医学部研究業績データベース" MediaNet. No.5 p.23-28 (1997.10)
- 3) Available at: <http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/collect/index.htm>

#### 医学メディアセンターニュース

##### お知らせ

医学メディアセンター副所長の相磯貞和教授(解剖学教室)は10月1日付けで普通部部長にご就任されました。規程により副所長職を辞されることとなります。後任の人事は未定です。

スタッフルーム

## 我が家のゴン太君

かざまつり  
風祭のぞみ

(理工学メディアセンター)

我が家の愛犬ゴン太は、この6月で満14才になった。犬としても長生きの方ではないだろうか。ゴン太という名は、母が付けた。関西ではやんちゃなことを「ごんたする」というそうだ。私達三姉妹は「マッチ」という名前にしようと思っていたのだが、家で一番面倒を見る母に「ゴン太」と早々と命名されてしまった。

そもそも犬を飼うことになったのは、妹が学校帰りに犬に噛まれたのがきっかけで、それからたいそう犬を怖がるようになったので、心配した母が柴犬の雑種をもらってきたのだった。これがやんちゃでじゃれてはやたらと足に噛みつくので、全く逆効果であった。躰もしたが、番犬として以外は、全く芸のない犬に育ってしまった(「伏せ」が唯一できる)。

飼い始めの頃は、隣家との境は木が植えてあるだけだったので、隙をみては脱走し、隣のお百姓さんの畑を荒らしては迷惑をかけていた。その後、家の周りをブロック塀で囲ってからは、ゴン太は放し飼いの自由な身となった。暑い夏は木陰で涼を求め、寒い冬は暖かい芝の上で丸くなって眠り、元気に成長していった。全

く病気づらずの犬だったが、一度だけ死にそうになったことがある。庭の雑草に根負けした母が、除草剤をまいた。ゴン太は離れたところにつないであったのだが、結果的に、急性の有機薬物中毒になってしまったのである。鼻の頭をカラカラにしてぐったりとしてしまったゴン太を、責任を感じた母が、シーツにくるみ抱いて獣医のところまで連れていった。結局、一晩入院して点滴を受け、帰宅したのだが、回復するまで数日かかった。丁度、ゴールデンウィークの時で、家族全員で心配した。全く食欲のないゴン太に、父は注射器で牛乳を飲ませた。ある日、「ワンワン」と鳴く声が出て回復した。この時の話になると父は、まるで自分一人がゴン太を助けたようにいうので、母は面白くない

らしい。後にも先にもゴン太の具合が悪くなったのは、この一件だけだが、昨年あたりから、急に年を取ったなあと感じるようになった。特に今年に入り、抜け毛のシーズンを迎えた頃、異常な抜け毛に、はじめはノミでもついたのかと思っていたのだが、獣医さんに往診してもらったところ、高齢による内蔵疾患からくる抜け毛ということで、薬のかわりに栄養剤を置いていった。もう治療しても無駄ということらしい。考えてみれば、犬を飼うきっかけとなった妹も今年から社会人になったのだから、ゴン太も立派なおじいさんなのだ。

振り返ってみるといろいろなことが思い出される。生後一カ月に母犬から離されて、家にきてすぐ、突然の雨にびっくりして、それ以来雨が嫌いになってしまった。水に濡れることが大嫌いで、この14年間で、シャンプーしたのは、たったの1回、それも一週間の長い逃避行から帰ってきて(ろくに食べていなかったのかガリガリにやせていた)あまりの汚さに母と姉で、無理やり押さえつけてのことであった。それでもふしぎと毛は光沢がありきれいであった。

ゴン太は、雄犬だったが、なぜか雄犬に可愛がられ、ある年の正月には子牛ほどの大きな真っ黒い犬が侵入してきて、三日間添い寝して帰らず、近くの交番に届けたら飼い主がワゴンで迎えにきた。「ナス号」という立派な名の犬でそれから時々やってきたが、塀ができてからはさすがに侵入してこなくなった。

我が家の家族構成も、ゴン太の成長にあわせてすっかり変わった。父方の祖父母は亡くなり、姉が結婚した。今年1才になった甥がはじめて話したのが「ワンワン」という言葉だった。この6月から87才の母方の祖母が同居した。ゴン太と二人(?)どちらも元気で長生きしてくれるように祈っている私である。



# 全塾図書遡及入力事業報告

さとう ゆりえ  
佐藤 友里恵

(三田メディアセンター)

## 1. はじめに

慶應義塾大学における全塾的な図書データの遡及入力作業は、KOSMOS(全塾統合図書館システム)開発を契機として平成元(1989)年に開始された。当初の対象は、三田情報センター(現三田メディアセンター、以下三田)所蔵の洋書であったが、平成2(1990)年度より対象を全塾所蔵図書資料に拡大し、平成9(1997)年に終了する計画のもとに事業が展開されてきた。

メディアネット本部としての遡及入力事業は、和書は平成8(1996)年、洋書は平成9年、予測に近い件数をもって終了を迎えた。この事業を最後に担当したデータベースメディア担当から、これまでのまとめとして報告する。事業開始から終了までの流れと入力件数(外部委託処理分)については、<表1. 年度別図書遡及入力状況>に示している。初期の和書の件数については明確な記録が見当たらないため、概数となってしまっていることをご容赦いただきたい。

## 2. 遡及入力対象

対象は図書資料(和/洋)とし、書誌上雑誌扱いとなるものと非図書は基本的に除外した。さらに、中韓国語・ロシア語・アラビア語等の非ローマ字言語資料も対象外とした。

また、目録カードからの遡及入力を基本としているため、地区によっては、目録カードが存在しないような受入年の古い図書資料は対象外となっている。

## 3. 遡及入力方法と問題点

遡及入力事業は対象資料や処理方法から、およそ3区分される。それぞれにおける対象、処理方法、問題点について述べる。

### 3.1. 第一次遡及(三田の洋書)

遡及事業は、三田の洋書(旧研究室棟分を除く図書館所蔵分)から着手された。これらは外部書誌ユーティリティとしてOCLCを採択し、平成元年から約4年間をかけて17万件弱のデータを処理した。

OCLCデータはUS/MARCと完全互換であって、こ

	和書		洋書	
	地区	処理件数	地区	処理件数
平成元年度 (1989年度)			三田(図)	40,000
平成2年度 (1990年度)			三田(図)	99,710
平成3年度 (1991年度)			三田(図)	22,531
平成4年度 (1992年度)	三田(図)	106,000	三田(図)	6,612
平成5年度 (1993年度)	三田(図) 日吉 理工学	182,000		
平成6年度 (1994年度)	日吉 理工学	210,000		
平成7年度 (1995年度)	三田(研)	80,230		
平成8年度 (1996年度)	医学	24,993		
	経管研	17,065		
平成9年度 (1997年度)			三田(研)	139,740
			日吉	110,240
			医学	21,206
			理工 経管研	22,012 6,953
合計		620,288		469,004

表1. 年度別図書遡及入力状況

こには書誌階層という概念がないため、KOSMOS内で書誌階層を展開することは困難であった。それゆえ、この段階において、階層構造をもたないという、当時の入力基準と合わない書誌がKOSMOS内に大量に発生した。また著者名典拠とのリンクについても、主に団体名についてリンク形成が断念されている。

### 3.2. 第二次遡及(全塾の和書)

平成4(1992)年度より遡及入力事業室を設置して、和書の遡及入力を開始した。和書については拠り所となる外部書誌ユーティリティーがないため、洋書とは異なる方法をとらざるを得なかった。初年度はWINE(早稲田大学)をソースとして一括遡及変換処理を行ったが、その後は、学術情報センター目録システムのオンライン検索、およびコピーカタログングによるKOSMOSへの登録作業を行った。データがないものは、KOSMOSにオンラインでオリジナルデータを作成した。

オンライン作業ということもあり、書誌間や著者名典拠ともにリンク形成が行われていた。しかしながら、後述するように平成8年6月にKOSMOS入力基準の大幅改訂があり、この新入力基準に合わせて、主に書誌階層リンクについての仕様を変更して対応した。著者名典拠については、典拠が存在するもののみを処理し、典拠の作成は行っていない。約5年をかけ、平成8年度に全地区分の和書遡及入力事業は終了した。

### 3.3. 第三次遡及(全塾の洋書)

事業の最後として、各地区の洋書(三田は研究室分)を手がけた。外部書誌ユーティリティーとして、US/MARCフォーマットのUTLAS<sup>1)</sup>データを採択した。この時の遡及に先立ち、同じソースを用いてKOSMOS目録データの改修事業を行っていたが、これによって置きかえられたKOSMOSデータとUTLASデータをソースとして、遡及一括変換処理を施した。また、著者名典拠についても、KOSMOSの典拠、LC典拠を用いて典拠作成・リンク形成を行った。

この遡及入力は、KOSMOS目録データ改修事業との重なり、遡及テープの複数回に渡る納品、カレント処理との並行作業などから、データの同定処理などが困難だったものも多かった。これらは後処理において、ある程度解決していく予定である。

### 3.4. その他

第一次から第三次にかけて、書誌上あるいは所蔵情報の不都合により、外部委託処理では処理しきれなかったものも多数発生した。これらは各地区目録担当者等により、日常の業務の中でデータ修正等を行った。この部分の件数については、こちらでは残念ながら把握しておらず、表1の数値に含めることはできなかった。

### 3.5. 問題点の解消

これまで述べてきた通り、三次に渡る遡及作業の中で、いくつかの問題点が生じた。最も大きな問題点としては、KOSMOS書誌構造の最大の特徴というべき書誌階層表現において、遡及データとカレント処理データ間に差異が生じたことがあげられる。この問題に対し、平成7年より目録改修ワーキンググループが組織され、データ均質化のための方策を検討した。その結果、KOSMOS内での書誌階層維持を中断し、平板な書誌構造を原則とする方針が決定された。これを受けて、平成8年6月に新入力基準を定めると同時に、データ改修事業が開始され、平成9年度には、第三次遡及に先立つ洋書データの改修作業を終了した。

一方、もう一つの問題点である著者名典拠に関しては、次期図書館システムへの移行に絡めた解決が計画され、本稿執筆時点においては、次期システムにおける典拠コントロールは実施しない方針が固められている。

## 4. おわりに

以上をもって、遡及入力事業の報告とする。第三次遡及入力の後処理は、この執筆中も継続して行われているが、本誌出版の折りには、それもほぼ終了していることを期待する。

## 注

1) UTLASは、平成9(1997)年よりAG-Canadaに継承された。

## 参考文献

遡及入力事業室."目録情報の遡及状況". MediaNet. No. 3, p. 83-85 (1995)

## Garden State の白い雲

かねこ やすき  
金子 康樹

(三田メディアセンター係主任)

その図書館の前に初めて立ったとき、レンガ色の建物越しに見あげた青空に、白い雲がのんびりと漂っていた。

平成9年度長期海外研修の機会をいただいた私は、New Jersey州 Rutgers 大学において、主たる研究テーマである「社会科学分野におけるデータサービスの概念と実践方法」について、実際の職務を手伝いながら研究をすすめることができた。研修内容としては、メインテーマの「社会科学分野」に限らず、人文科学分野へのコンピュータ技術の応用など、幅広く図書館でのコンピュータサービスの実際などを体感することができ、実りの多き研修であったと自負している。研修内容については、過去に発表の機会を設けていただき報告をさせていただいた。そこで本稿では、少し肩の力を抜いて、研修中の出来事を思い出すままに記してみたい。気楽な気持ちでお読みいただければ幸いである。

### 千里の道も一歩から

New Jersey州立大学である Rutgers は、New Ark, New Brunswick, Camden という3つの地域に複数のキャンパスを有している。私が滞在したのは、このうち New Brunswick にある College Avenue キャンパスに立地する、人文・社会科学の専門研究図書館である Alexander Library であった。ここに、1997年、"Scholarly Communication Center"(以下 SCC)という新たな施設が設けられた。この施設は、図書館における本格的なコンピュータサービスの実現を目指して作られたものであり、講義室(Information Handling Laboratory, 以下 IHL)、会議室(Teleconferencing Lecture Hall, 以下 TLH)、データ処理室(Humanity and Social Science Data Center, 以下 HSSDC)などの機能を持っている。このセンターに身を置くことにより、図書館におけるデータサービス、またはコンピュータサービスの概念と実践を学ぶことが、私の主な研修目標であった。

さて、Rutgers 大学に到着し、Alexander Library

の館長である外山良子さんから、スタッフを紹介していただくや否や、「後はもう SCC のスタッフと相談しながら研修を進めて行ってください。Take care!」ということになる。あっさりしたものだ。さすがにアメリカンスタイルである、と感心したのだが、振り返って考えてみれば、外山さんもご多忙な身であり、いつまでもこちらの世話を焼いているわけにもいかなかったのだろう。

私が到着した際には、SCC はまだ完成していなかった。そのため、私の Rutgers での最初の仕事は、SCC のスタッフとともにパソコンを箱から出し、ソフトウェアをインストールし、ネットワークに接続することであった。SCC のスタッフといっても、実はこの時点では Information Technology Librarian という肩書きの Boyd Collins 氏ただ一人だけであった。二人きりで、広い IHL の数十台の NT マシンをセットアップしながら、ふと、「日本でも同じことをやっていた」ということに思いが至ってしまい、ちょっと先行きに不安を覚えた。しかし「何事もこうした地道な作業があってこそ、初めて華も咲くものであろう」と、黙々と作業をすすめる。

この SCC のパソコンデスクが少々変わっていた。パソコンの本体を、机の下にぶら下がっているストラップに固定して吊り下げようになっている。これが設置し難いこと夥しい。一人が PC を下から持ち上げている間に、もう一人がストラップを締め付ける。持ち上げ方が弱かったり、ストラップの締め付けが足りないと、PC がしっかり固定されない。5台も取りつくと、腕はしびれ、全身に汗がにじんでくる。こんなことを言ったら悪いとは思いながらも、正直に「これは使いづらいね」と Boyd に言ったところ、「まったく。」と答えてくれた。お互い、正直な奴だという理解ができたのは、このデスクのおかげかもしれない。

### 夏期講習

あたりまえだが、New Jersey も夏は暑い。New

Brunswick のあたりは、緯度でいうと日本の盛岡くらいであろうか。涼しい夏を期待したのだが、来る日も来る日も真夏日で、日中はおろか、夜中の2時くらいまで暑いという日々が続いていた。7月の前半に、ALAの年次総大会に参加するためにSun Franciscoを訪問したのだが、こちらが非常にすごしやすかったので、その反動もあって、暑さに敏感になっていたのかもしれない。そんな真夏日が続く7月の後半に、Center for Electronic Texts of Humanities(以下 CETH)が毎年主催しているSGMLセミナーに参加させていただいた。このセミナーは、参加費用が少々高かったのだが、外山さんのご尽力と CETH スタッフのご好意により、特別に無料で参加させていただくことになった。もっとも、セミナー期間中はスタッフの手伝いを行う、という条件つきで、マシンのトラブル対応や、スキャナー、OCR、画像処理などの手伝いをしながらのセミナーだったため、かなり慌しいものとなってしまった。他の参加者は各自のテーマを持ってセミナーに臨んでいたため、自由研究時間も熱心にSGMLエディターと格闘していたが、急遽参加が決まった私は、とりあえずSGMLタグとLaTeXタグの比較、という安易なテーマを捏造し、文章をSGMLとLaTeXの両方で作成し、ディスプレイに両者を並べて眺める、というような世の中の役には立ちそうもないことを、トラブルシューティングの合間に行っていた。それでも、目標としては、Perlか何かを使って、SGMLからLaTeXへの変換ツールを作成する、という予定であったが時間切れになってしまい、いまだに完成していない。いずれ完成させたいと心の奥のほうでは考えている。

真実を話してしまえば、人文科学分野のフルテキストデータには、個人的にはそれほど興味がなかったのだが、このセミナーに参加して以降、文書処理に強く惹かれるようになった。後日ICPSRの代表者会議に出席して、ますます文書処理に惹かれることになるのだが、それはまた後でふれることとしたい。

講習を受けるだけでなく、講師を勤めたのも夏の間のことだった。

Rutgers大学の図書館においても、組織のリオーガナイズが進行しており、Alexander Library館長であった外山さんが、New Brunswick校の全

図書館のAdministrator Teamの一人という立場に変わり、オフィスもCollege AvenueキャンパスのAlexander Libraryから、BushキャンパスのLibrary of Science and Medicine(以下、LSM)に移られた。その外山さんから、LSMのスタッフにWindowsの操作方法を教えて欲しい、という依頼を受けて、非常に困惑した。漠然と、米国の図書館員はみなコンピュータの操作には習熟しているという印象があったので、なぜいまさら私などにそんなことを頼むのかが判らなかったのである。実際に講義を行ってみてわかったのだが、日本であろうと米国であろうと、コンピュータ操作に関する能力などというものは、さほど変わるものではない。これは、職員だけでなく、研究者、学生にも同じことが言えるようだ。大切なのは、操作方法ではなく、それを使って何をするか、というほうにある。講義はWindows 3.1の操作方法の説明を行ったが、操作方法よりもWindows95あるいはWindowsNTを意識して、Windowsのコンセプトといったことや、How toではなくWhat it can doが大事です、といったことを中心に話したところ、概ね好評だったようである。

## 実りの秋

「実りの秋」、などを見出しをつけたが、後述するMichigan同様、New Jerseyもあまり秋という季節を感じることはない。「夏が終わった」ということに気がついた時にはすでに冬でした、といったところである。街路には枯葉がうずたかく積まれ、子供たちがその枯葉に埋もれて遊ぶ姿が目にとまるようになってきた。

そんな、Rutgersでの生活にもすっかり慣れた頃に、SCCの最大のイベントである公式オープンセレモニーが開催された。これは、SCCの設立に際し寄付等をいただいた方などをご招待し、施設を見ていただく、というイベントであり、学長はじめ、地元名士や卒業生の方々などが多数集まった。このイベントでの私の任務は、Alexander Libraryに10月に到着した、日本からのもう一人のVisiting Librarianである学術情報センターの越塚美香さんとともに、当日参加された方のデジタルゲストブックを作成する、というものであった。

具体的には、越塚さんがデジタルカメラで参加者を一人一人作成し、私がそれをWebのホーム

ページに載せていく、という作業であった。撮影の際に、参加された方に名前を書いていたのだが、この判別が最大の難関であった。このページは、現在でも <http://scc01.rutgers.edu/scchome/Dedication.htm>で見ることができるが、一人か二人は、確実に名前を間違えていることであろう。いつお叱りがあるかと、いまだにびくびくしている。

10月下旬に、今回の渡米に際して最も楽しみにしていた、Inter-university Consortium for Political and Social Research(以下、ICPSR)の代表者(Official Representative)会議に参加するために、ICPSRの本拠地であるMichigan州立大学へと出かけた。Michiganの10月など想像するだけで寒そうだと感じていたが、実際には「涼秋」もしくは「晩秋」といった気候であったので、だいぶすごしやすいという印象を持った。もともと、あと2週間もすると一挙に「厳冬」もしくは「極寒」というような気候になると聞いて、つくづく安心した。ICPSRのOfficial Representative Meetingは、二年に一度開催され、全米、あるいは世界を代表するData Librarianや、社会科学研究者たちが一同に会する場となる。ここでは、社会科学データの効果的な提供方法がさまざまに紹介されるほか、ICPSRのデータの活用事例、またICPSR自体の今後の戦略といったものを窺い知ることができる格好の場である。この年の大きな話題は、コードブックの提供方法についてであった。ICPSRの基本方針としては、コードブックのPDF化を掲げており、これに関する賛否両論が熱心に討議されていた。またデータのためのデータ表現形式であるメタデータの有り方、さらには、データの保管ならびに表示方式としてのSGMLの適用など、さまざまな角度からデータサービスが捕らえられており、非常に刺激的な会議であった。このICPSRの提供については、現在三田メディアセンターにてFTPサーバーを構築中であり、本誌が発行される頃には、公開可能となっているものと確信している。

## 画像処理担当

11月に、SCCのTLHでJeiteles Autograph Collectionという展示に伴う講演会が開催された。これは、Alexander Libraryの展示スペースであるGallery 50で実施される展示会に即した講演会で、

講師はPrinceton大学図書館の学芸員であるMargaret Sherry氏であった。このJeiteles Autograph Collectionは、18世紀から20世紀初頭にかけてのヨーロッパ(主にドイツ、フランス、オーストリア)のロマン主義芸術家の直筆の原稿や書簡を収集したものであり、芸術家研究者にとって、非常に価値の高いコレクションとなっている。

さて、この講演のための準備として、SCCに対し、Dr. Sherry(いつもPeggyと呼ばせていただいていたので、彼女がこういう名前だったということは、今回の原稿執筆時にはじめて知った)から、プレゼンテーション資料作成の協力要請があった。この依頼に対して、SCC開設以来、スキャナーを用いた画像処理関係の対応をしてきた関係であろうか、私がお手伝いをさせていただくこととなった。まず最初の作業は、コレクションの実物をスキャナーで読みこむことであった。現物をそのまま読みこむ、ということで、やや緊張したが、そのうち、数の多さに辟易してしまい、緊張感が薄れてきているのが自分でもわかった。人間、失敗するのはこういうときなんだろうなあ、と薄ぼんやりと考えていたが、もし本当にあの時何か失敗して、原稿を破いたり傷つけたりしていたら、ごめんなさいじゃすまなかつたろうと思うと、背筋に冷たいものが流れ落ちる。ところで、今回読みこんだ画像については、解像度の調整こそ行っているが、余程のものでない限りは、画像自体の修正は行っていない。現物の持つ傷、黄ばみなどといった歴史の持つ味わいが消えてしまうことを避けるためである。無論、凝ろうと思えばいくらでも凝れるであろう。しかし、Peggyをはじめ多くの方は、どこかで「電子情報は電子情報、現物は現物」という割り切りをしているのであろうか、あまり画質に神経質になることはなかった。むしろネットワークを介して、現物の持つ味わいを窺い知ることができる、というそのこと自体に意義を感じているようであった。

そういう雰囲気を感じたためもあってか、頼まれたわけでもないのに、プレゼンテーション資料はHTML文書で作り、WWWブラウザを使って行えるものとした。今回の結果を活かして、このコレクションを紹介するWebサイトを作りたい、などという要求がやってくるのではないかと予感したのである。この予感は見事にあた



## 海外レポート

り、後日、今回の展示のWebページを仕立てて欲しい、という依頼を受けた。そのときは、帰国も迫っていたので、あらかじめHTMLにしておいて良かった、俺には先見の明があったと、誰も誉めてくれないから、自画自賛していた。

## そして図書館員たち

1998年初春。Rutgersの図書館スタッフを前に、「日米の大学図書館員」というようなテーマでの講演を依頼された。実は、依頼されたのはずいぶん前だったのだが、まだ間がある、もう少し余裕がある、と思っているうちに締め切りを過ぎてしまう、という悪習は、土地が変わろうと立場が変わろうと一貫している自分がわれながら情けない。発表が1週間後くらいに迫ったところで、ようやく重たい腰をあげ、シナリオ作りをはじめ。発表は、10月の公式オープンセレモニーで私の相方を務めていただいた、学情の越塚さんと一緒に行くことになっていたのだが、彼女もまた、私と同じように直前まで何もしないタイプの人間だったので、お互いに相手を牽制しあっているうちに本番を迎え、こんなことならもっと早い時期から相談しておくべきであった、などと臍を噛んでいるのだから世話はない。そんな準備不足のわれわれの発表に対し、Rutgersの方々はとても熱心に耳を傾けてくださった。のみならず、質問も多く出していただき、それを契機にまた新たな話題が広がって行く。本当に、充実した時間を過ごすことができたことを実感した。

帰国直前のある夕方、自分が1年足らずという

時を過ごして来た図書館をゆっくり歩いてみた。閲覧席で熱心にノートを埋める女子学生。書架の間にべったり座って本を読みふける男子学生。マイクロリーダーと格闘する老研究者。コピー機と書架の間を忙しげに行き来するアルバイト。利用者と会話するレファレンスライブラリアン。幾人か、知り合いになった顔とも出会う。ほんのわずかの間であったが、人生の同じ瞬間を共にした仲間たち。色々な話をした。コンピュータのはなし。政府刊行物のはなし。CD-ROMのはなし。西海岸のはなし。東京のはなし。家族のはなし。こちらが受けた影響の何百分の一かは彼らにも影響を与えることができただろうか。研修のテーマもあってか、様々な見聞が、コンピュータのことばかりに終始していた印象はぬぐい切れないものがある。しかし、本音を言ってしまうと、今回の米国生活でもっとも強く感じたことは、図書館員も利用者もみな図書館を愛しているという、ひどく当たり前の事実である。格好良い表現になるが、私は、図書館員というのは、「知を愛し、知を愛するものを愛す」職業だと思っている。そして、その考えは決して間違っていないということを、この国の図書館員、そして図書館に来る人々を見て確信した。

その日、建物越しに見た青空には、あの日と同じように、白い雲がのんびりと漂っていた。そして私は、図書館員という職業に就いたことをちょっぴり誇りに思っていた。

## メディアネットニュース

## OPACが変わります

図書館の蔵書を探すためのOPACが変わります。新しいOPACは、レスポンスが大幅に改善されるばかりでなく、Webブラウザを使って利用することができますので、図書館内だけではなく、インターネットに接続できるパソコンさえあれば、研究室や自宅からも図書館の資料を探することができます。また、かねてより希望の多かった、地区を限定した検索結果の表示や、メールによる結果の送付など、新たな機能も多く備えています。今までのOPACを利用するために

は、ホストコンピュータ用のエミュレータが必要でしたが、新しいOPACはWebブラウザだけあれば利用することができます(telnet接続の機能はありません)。1998年10月1日以降に受け入れられた資料は、新しいWeb OPACで検索してください。1999年1月にはKOSMOS OPACからWeb OPACへと、全面移行いたします。詳細は、お近くのメディアセンターまでお問い合わせください。

スタッフルーム

## イヌから彩色写本の世界へ

いちこけんじ  
市古 健次

(三田メディアセンター課長代理)

ペットの歴史は古い。原始時代から狩猟のためイヌが使われていた。それゆえ、イヌが最初にペット化されたと推測される。私も人類の代表として、ベスト・フレンドであるイヌを現在、2匹飼っている。イヌを最初に飼ったのは、小学校の3年の時である。近所の人からもらった「何でもミックス」である。柴犬に似ている小犬であった。名前は「ペコ」である。

ペコは3世まで飼っていたが、マンション住まいになって飼うのを諦めていた。80年代の後半、妻と「この川口のマンションでもイヌを飼っている人がいるね」と話していた。そしてすぐにペットショップに。ブルドックを小さくしたようなバグを飼いたかったが、バグは爪が強いので、家の中で飼うには向かないと店員に言われた。毛が抜けなく、臭くないイヌが欲しいと言うと、マルチーズを薦めてくれた。名前はすぐに「バグ」と決めた。バグはマスコミ界でも活躍している。イヌの専門雑誌「ワン」や、コミック雑誌「ヤング・ジャンプ」にも、新聞を運ぶイヌとして紹介された。

横浜のマンションに引っ越したら、その近辺はイヌの天国である。散歩すると、ヨーキー、ウェスティ、シュナウツァーと、余り見かけなかったイヌに会う。バグが妻と父親になつているので、私も自分のイヌが欲しくなってしまった。犬種はシー・ズー。名前は中国のイヌと言うことで三民主義の「ソンプン」と主張したが、妻の反対で「マオ」となった。「マオ・ツウトン」(毛沢東)のマオである。

シー・ズーは、19世紀末に西太后のペットだったと言われ、ラサ・アプソ、ペキニーズ、バグなどの血が流れているらしいが、定かでない。西太后が居た紫禁城(現故宫)の地図を調べて犬小屋を探したり、熱河(現承德)にある清朝の離宮の図書を見たり、また駒込の東洋文庫に足を運んだり、暫し時間を忘れてしまうのである。

イヌの探求はシー・ズーだけではない。世界史のCD-ROMで「マルコ・ポーロ」を調べていると、フビライ・ハンが獵犬を使って狩りをしている絵が載っていた(写真)。イヌの絵画集にもでていない。そこで英国の出版社に問い合わせると、それは「MS Bodley 264」で、15世紀の写本であった。蔵書点検の時にしか触れたことのない

「ボードリアン彩色写本蔵書目録」を見ると、「Bodley 264」があり、その書名は「アレキサンダー大王のロマンス」で、「東方見聞録」ではなかった。一方、ボードリアン図書館のホームページで「MS Bodley 264」を見つけたが、「東方見聞録」とあった。ボードリアンに聞くと、絵は「MS Bodley 264」であり、「目録」になかった理由は、写本が三部構成のためであった。画家はヨハネス(ジョン・シファウス:1360, or 65-1430)であった。後にスライドを入手することができた。

「東方見聞録」のフビライ・ハンが獵犬の節に出てくるイヌの犬種も知りたかった。絵から判断すると、グレーハウンド系に見えた。「イヌ大全」(米国ケンネルクラブ)の「獵犬」の箇所を読むと、13世紀にチングス・ハンが獵犬としてロシア産の「ボルゾイ」を使ったことが出ていた。元朝の勢力圏がモスクワまであったことを考えると、ロシアのイヌがいても不思議ではない。

身近なイヌから貴重な彩色写本の世界に入ることができた。また「犬縁」で経済学部の先生とも知り合いになった。その先生は経済学の授業でイヌを例に講義をしていると言う。スミスの『国富論』の一説で、イヌを例にとって経済活動を説明しているらしい。イヌや写本に関する自分の知識は浅く、もっと勉強したいと思っている。



オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵  
MS Bodley 264, Fol.240v.

## メディアネット・メディアセンターに関する書誌

(1997.8～1998.7)

- "学生生活ワンポイントアドバイス 学生生活に欠かせない施設と制度の基礎知識: メディアセンター". 塾. No.210, p.10-11 (1998.3)
- 市古みどり."医学メディアセンターにおける新しい教育サービス". 医学図書館. Vol.44, No.3, p.308-311 (1997.9)
- 市古みどり."医学図書館パブリックサービスで必要な知識の吸収". 専門図書館. No. 166, p14-18 (1997.11)
- 五十嵐由美子."分担収集・分担保存への提言と慶應義塾大学医学メディアセンターの現状". 医学図書館. Vol.45, No.2, p.217-221 (1998.6)

## スタッフによる論文発表・研究発表

(1997.8～1998.7)

### [論文発表]

#### [三田]

- 加藤好郎."ネットワーク情報源の著作権". 第16回大学図書館研究集会記録. p131-133 (1998.3)
- 村上篤太郎他編."図書館情報学用語辞典". 東京, 日本図書館学会用語辞典編集委員会, 1997.9,244p
- 村上篤太郎."マルチメディア社会の著作権(書評・新刊紹介)". 情報の科学と技術. Vol.47, No.9, p.489 (1997.9)
- 斎藤勉."平成8年度版「財務状況の概要」を説明する". 大学時報. Vol.47, No.259, p.80-91 (1998.3)

#### [日吉]

- 木下和彦."日吉キャンパス研究環境懇談会の検討成果について: <インフラ検討グループに参加して>". 塾監局紀要. 24号, p.52 (1997.10)
- 酒井由紀子."From Print to Electronics (Book reviews)". 医学図書館. Vol.44, p.515-516 (1997.12)

### [信濃町]

- 市古みどり."PubMedを利用した文献検索". Lisa. Vol.4, No.8, p.794-796 (1997.8)
- 市古みどり."医学メディアセンターにおける新しい教育サービス". 医学図書館. Vol. 44, No. 3, p.308-311 (1997.9)
- 市古みどり."インターネットによるオンラインジャーナルの利用法". Lisa. Vol.4, No.10, p.1000-1002 (1997.10)
- 市古みどり."医学図書館パブリックサービスで必要な知識の吸収". 専門図書館. No.166, p.14-18 (1997.11)
- 市古みどり."医学図書館のレファレンスサービス". 東京, 医学図書館協会, 1998.3, 53p.
- 市古みどり."MEDLINEエンドユーザーサーチへの変化". 病院図書室. Vol.18, No.2, p.234-237 (1998.5)
- 五十嵐由美子."分担収集・分担保存への提言と慶應義塾大学医学メディアセンターの現状". 医学図書館. Vol.45, No.2, p.217-221 (1998.6)

[藤沢]

廣田とし子. "情報環境の変化と求められる図書館システム". 専門図書館. No.168, p.1-6 (1998.3)

風間茂彦. "DAE法による脱酸プラントの稼働". ネットワーク資料保存. No. 50, p. 1-3 (1998.1)

風間茂彦. "「資料保存」の根源的課題(試論): 電子図書館時代をふまえて". 現代の図書館. Vol.36, No.1, p.27-32 (1998.3)

風間茂彦. "文字どおり「Media — 仲介者」として". ゼロヴォイス: メディアパーク. No.1, p.2-3 (1998.5)

[研究発表]

[三田]

榎沢康子 他. "専門用語コーパスにおける語彙的な階層付けの可能性". 言語処理学会 第4回年次大会. 1998.3.24-26, 九州大学

金子康樹. "Challenge of Japanese academic library: the Media center of Keio University". Brown bag presentation held by the Scholarly and Professional Activities Committee of the Rutgers Libraries. 1998.1.7, the Scholarly communication center teleconferencing lecture hall

加藤好郎. "CULCON, NCCをはじめとする米国からの図書館依頼について". 早慶図書館懇談会. 1998.3.19, 早稲田大学総合学術情報センター

加藤好郎. "大学図書館の役割と運営". 私立大学図書館協会東地区部会研究会パブリック・サービス研究分科会. 1998.4.16, 東洋大学

加藤好郎. "最近の著作権事情: 学術情報流通と著作権". 私立大学図書館協会東地区部会研究会パブリック・サービス研究分科会. 1998.5.13, 慶應義塾大学三田メディアセンター

加藤好郎. "学問としての書誌学". 私立大学図書館協会東地区部会研究会パブリック・サービス研究分科会. 1998.6.10, 日本女子大学

加藤好郎. "レファレンス・サービス概論". 私立大学図書館協会東地区部会研究会パブリック・サービス研究分科会. 1998.7.8, 慶應義塾大学三田メディアセンター

加藤好郎. "大学図書館の教育支援". 第59回私立大学図書館協会総会・研究大会. 1998.7.31, 神奈川大学

村上篤太郎. "電子図書館機構". 私立大学図書館協会東地区部会研究会パブリック・サービス研究分科会. 1998.5.13, 慶應義塾大学三田メディアセンター

村上篤太郎. "学会発表のためのプレゼンテーション受法". 第15回医学情報サービス研究大会. 1998.6.20, 鳥取女子短期大学

[日吉]

酒井由紀子. "How to use NACSIS databases". Workshop held by National coordinating committee on Japanese Library Resources. 1998.3.5-6, University of Hawaii

[信濃町]

市古みどり. "研究のための文献検索" 日本看護学教育学会第6回ワークショップ. 1997.8.5, 東海大学健康科学部

市古みどり. "医学図書館におけるレファレンスサービス". 第4回日本医学図書館協会継続教育コース. 1997.11.13, 久留米大学附属図書館御井学舎分館

市古みどり. "インターネットはどう使うのか". 第54回卒後臨床研修セミナー. 1998.2.14, 慶應義塾大学医学部附属病院新棟11階大会議室

市古みどり. "情報を見つけ出す". 第45回産婦人科情報処理研究会. 1998.5.17, 東京マタニティ・クリニック

五十嵐由美子. "医学図書館における分担収集・分担保存について—慶應義塾大学医学メディアセンターの場合—". 第4回医学図書館研究会. 1997.11.12, 久留米大学附属図書館御井学舎分館

# 年次統計資料

## 1. 図書費＜平成9年度実績及び10年度予算＞

内訳 各地区メディアセンター	平成9年度実績＜単位：円＞			平成10年度予算＜単位：千円＞		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田メディアセンター	667,098,036	57,621,211	724,719,247	658,976	67,750	726,726
図書館	320,136,169	57,621,211	377,757,380	303,093	67,750	370,843
指定寄付金			1,114,351			
学部*	346,961,867	0	346,961,867	355,883	0	355,883
(私大研究設備相当額)			27,808,442			27,817
日吉メディアセンター	177,381,538	8,455,919	185,837,457	181,377	7,283	188,660
図書館	66,213,357	6,113,422	72,326,779	68,650	4,787	73,437
指定寄付金			0			
学部*	111,168,181	2,342,497	113,510,678	112,727	2,496	115,223
(私大研究設備相当額)			7,288,993			7,502
医学メディアセンター	174,634,826	12,785,595	187,420,421	186,260	10,729	196,989
"	174,634,826	12,785,595	187,420,421	186,260	10,729	196,989
理工学メディアセンター	199,452,818	7,284,716	206,737,534	208,143	4,700	212,843
"	199,452,818	7,284,716	206,737,534	208,143	4,700	212,843
指定寄付金			0			
(私大研究設備相当額)			0			
湘南藤沢メディアセンター	171,270,772	35,017,876	206,288,648	180,000	27,190	207,190
"	171,270,772	35,017,876	206,288,648	180,000	27,190	207,190
合 計	1,389,837,990	121,165,317	1,511,003,307	1,414,756	117,652	1,532,408

\*印… 特別図書費は含まない  
(私大研究設備相当額)は合計欄に加算しない

## 2-1. 蔵書統計&lt;年間受入及び所蔵冊数&gt;

各地区メディアセンター	内訳	単行書			製本雑誌			合計
		和	洋	計	和	洋	計	
年間受入冊数	三田メディアセンター	14,515	20,509	35,024	6,579	5,880	12,459	47,483
	図書館	7,747	9,667	17,414	4,418	1,515	5,933	23,347
	学部	6,768	10,842	17,610	2,161	4,365	6,526	24,136
	日吉メディアセンター	13,857	5,021	18,878	1,739	1,962	3,701	22,579
	図書館	11,965	555	12,520	1,238	186	1,424	13,944
	学部	1,892	4,466	6,358	501	1,776	2,277	8,635
	医学メディアセンター	1,644	1,042	2,686	2,875	6,803	9,678	12,364
	理工学メディアセンター	2,231	965	3,196	2,104	3,146	5,250	8,446
	湘南藤沢メディアセンター	11,887	4,132	16,019	2,976	2,335	5,311	21,330
	合計	44,134	31,669	75,803	16,273	20,126	36,399	112,202
所蔵冊数累計	三田メディアセンター	750,504	836,475	1,586,979	212,936	211,281	424,217	2,011,196
	図書館	518,794	473,007	991,801	130,776	76,643	207,419	1,199,220
	学部	231,710	363,468	595,178	82,160	134,638	216,798	811,976
	日吉メディアセンター	346,591	174,692	521,283	44,612	56,048	100,660	621,943
	図書館	260,586	27,214	287,800	29,665	2,571	32,236	320,036
	学部	86,005	147,478	233,483	14,947	53,477	68,424	301,907
	医学メディアセンター	43,583	43,985	87,568	66,599	140,243	206,842	294,410
	理工学メディアセンター	63,669	35,106	98,775	46,725	129,784	176,509	275,284
	湘南藤沢メディアセンター	107,971	79,030	187,001	26,102	19,951	46,053	233,054
	合計	1,312,318	1,169,288	2,481,606	396,974	557,307	954,281	3,435,887

注)・三田メディアセンター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む  
・今年度より非図書資料は含まない

## 2-2. 蔵書統計&lt;逐次刊行物:タイトル数&gt;

各地区メディアセンター	内訳	カ レ ント			ノ ン カ レ ント			カレント・ノン カレント合計
		和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター		5,962	4,708	10,670	5,808	3,507	9,315	19,985
図 書 館		2,577	1,126	3,703	3,536	1,751	5,287	8,990
学 部		3,385	3,582	6,967	2,272	1,756	4,028	10,995
日吉メディアセンター		1,095	932	2,027	814	1,156	1,970	3,997
図 書 館		667	91	758	367	32	399	1,157
学 部		428	841	1,269	447	1,124	1,571	2,840
医学メディアセンター		1,764	2,005	3,769	1,170	1,676	2,846	6,615
理工学メディアセンター		1,203	1,652	2,855	3,108	5,335	8,443	11,298
湘南藤沢メディアセンター		1,196	1,510	2,706	466	349	815	3,521
合 計		11,220	10,807	22,027	11,366	12,023	23,389	45,416

## 2-3. 蔵書統計&lt;非図書資料&gt;

各メディアセンター	内訳	種 別	光学・ 磁気媒体	A-V資料	合 計	
年 間 新 規	三田メディアセンター	タイトル数	252	205	457	
		箇 数	4,556	612	5,168	
	日吉メディアセンター	タイトル数	200	228	428	
		箇 数	1,231	717	1,948	
	医学メディアセンター	タイトル数	81	41	122	
		箇 数	129	406	535	
	理工学メディアセンター	タイトル数	73	5	78	
		箇 数	212	27	239	
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	128	104	232	
		箇 数	538	271	809	
	合 計		タイトル数	734	583	1,317
			箇 数	6,666	2,033	8,699
累 計	三田メディアセンター	タイトル数	2,430	8,315	10,745	
		箇 数	92,350	15,714	108,064	
	日吉メディアセンター	タイトル数	1,108	3,790	4,898	
		箇 数	12,905	8,997	21,902	
	医学メディアセンター	タイトル数	345	1,645	1,990	
		箇 数	2,285	4,141	6,426	
	理工学メディアセンター	タイトル数	477	179	656	
		箇 数	1,820	429	2,249	
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	756	2,132	2,888	
		箇 数	11,737	3,729	15,466	
	総 累 計		タイトル数	5,166	16,061	21,227
			箇 数	121,097	33,010	154,107

## 3-1. 利用統計&lt;貸出及び閲覧冊数&gt;

各メディアセンター	内訳	館外貸出				計	館内閲覧		前年度比 館外貸出
		教職員	学生	その他	塾外		一般図書	貴重書	
三田メディアセンター		18,529	166,576	7,375	1,889	194,369		230	0.99
日吉メディアセンター		10,786	140,391	5,750	0	156,927			0.96
医学メディアセンター		67,565	21,300	0	50	88,915			0.93
理工学メディアセンター		2,226	53,032	0	13	55,271			0.94
湘南藤沢メディアセンター		3,166	82,631	526	745	87,068			1.11
合計		102,272	463,930	13,651	2,697	582,550		230	平均 0.97

## 3-2. 利用統計&lt;相互貸借(複写依頼を含む)&gt;

各メディアセンター	内訳	依頼を受けた(貸)			依頼した(借)		
		国内	国外	計	国内	国外	計
三田メディアセンター	現物(冊)	266	0	266	334	351	685
	複写(件)	4,803	8	4,811	1,441	627	2,068
日吉メディアセンター	現物(冊)	15	0	15	7	2	9
	複写(件)	621	1	622	247	56	303
医学メディアセンター	現物(冊)	63	0	63	36	1	37
	複写(件)	24,481	206	24,687	2,955	85	3,040
理工学メディアセンター	現物(冊)	13	0	13	10	0	10
	複写(件)	21,770	0	21,770	2,028	0	2,028
湘南藤沢メディアセンター	現物(冊)	61	0	61	167	4	171
	複写(件)	390	0	390	374	17	391
合計	現物(冊)	418	0	418	554	358	912
	複写(件)	52,065	215	52,280	7,045	785	7,830

参考データ:早慶ILL(内数)

	三田MC		日吉MC		医学MC		理工学MC		湘南藤沢MC		合計	
	現物	複写	現物	複写	現物	複写	現物	複写	現物	複写	現物	複写
貸	266	507	15	67	1	660	13	521	14	50	309	1,805
借	246	445	7	54	0	52	9	461	36	138	298	1,150

\*現物は冊数、複写は件数



## 3-3. 利用統計&lt;複写サービス&gt;

各メディアセンター	内訳 種別	学 内		学 外		合 計	
		件数	枚数	件数	枚数	件数	枚数
三田メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	3,967	92,884	5,365	69,732	9,332	162,616
	電子コピー(セルフ式)		4,431,667				4,431,667
	OHP・スライド作成	10	49			10	49
	マイクロ資料コピー	1,826	106,189			1,826	106,189
	簡易印刷	136	89,782			136	89,782
日吉メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	313	2,654	622	4,809	935	7,463
	電子コピー(セルフ式)						
	マイクロ資料コピー(セルフ式)	88	1,500	3	97	91	1,597
医学メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	43,259	279,612	90,727	536,803	133,986	816,415
	電子コピー(セルフ式)		194,709				194,709
	OHP・スライド作成	17	52			17	52
	マイクロ資料コピー	4	65			4	65
理工学メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	569	6,290	21,293	182,986	21,862	189,276
	電子コピー(セルフ式)		1,082,857	470	14,583		1,097,440
	OHP	536	2,221			536	2,221
	マイクロ資料コピー	68	1,173			68	1,173
湘南藤沢メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	247	2,144	345	3,269	592	5,413
	電子コピー(セルフ式)		831,749				831,749
	OHP・スライド作成	35	1,713			35	1,713
	マイクロ資料コピー		5,972				5,972
	簡易印刷	1,601	2,012,929	112	312,481	1,713	2,325,410

\*斜線は計上不能

参考データ: 電子コピー枚数

	オペレーター付	セルフ式	合 計
三田メディアセンター	162,616	4,431,667	4,594,283
日吉メディアセンター	10,117	1,585,914	1,596,031
医学メディアセンター	1,096,261	194,709	1,290,970
理工学メディアセンター	195,566	2,180,297	2,375,863
湘南藤沢メディアセンター	5,413	831,749	837,162
合 計	1,469,973	9,224,336	10,694,309

## 3-4. 利用統計&lt;レファレンス・サービス&gt;

内訳 各メディアセンター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
三田メディアセンター	2,273	23,565	3,376	29,214
日吉メディアセンター	2,501	6,921	381	9,803
医学メディアセンター	1,600	307	1,883	3,790
理工学メディアセンター	1,406	5,676	2,457	9,539
湘南藤沢メディアセンター	335	3,370	76	3,781
合 計	8,115	39,839	8,173	56,127

3-4. 利用統計<レファレンスサービス>  
業務内容別

	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合 計
三田メディアセンター	11,499	1,173	15,952	590	29,214
日吉メディアセンター	1,868	796	7,086	53	9,803
医学メディアセンター	2,090	1,225	475	0	3,790
理工学メディアセンター	5,931	237	3,109	262	9,539
湘南藤沢メディアセンター	329	28	3,424	0	3,781
合 計	21,717	3,459	30,046	905	56,127

4-1. 計算機利用統計<利用課題数>

区 分	GS8400/20 (三田)		ワークステーション系 (三田)		M-1600/8 (日吉)		ワークステーション系 (日吉)		ワークステーション系 (矢上)		スーパーコンピュータ系 (矢上)		CNS・ワークステーション系 (SFC)		合 計	
	教職員	学生・他	教職員	学生・他	教職員	学生・他	教職員	学生・他	教職員	学生・他	教職員	学生・他	教職員	学生・他	教職員	学生・他
文 学 部	3	47	16	1,245			13	645					12	14	44	1,951
経 済 学 部	6	163	19	1,163		3	30	864		1			4	27	59	2,221
法 学 部	12	46	12	1,028	2		22	1,184		1			5	13	53	2,272
商 学 部	19	193	18	877	1		14	618		4			1	6	53	1,698
医 学 部	3		2	2	6	1	9	27		1			10	18	30	49
理 工 学 部	1	3	3	44	8	4	21	614	23	154	2	14	7	19	65	852
総合政策学部			3	43									65	2,587	68	2,636
環境情報学部			1	26		1		8					66	1,921	67	1,959
諸 研 究 所			10										10	8	20	8
諸 学 校			6	3	2			35					68		76	38
業 務	304		115		253		23		2				48	11	745	11
情報システムサービス	88	8	65		157		23		2	23	2	6	30	26	367	63
塾内・その他	18	37	25	70	1		40	8					8	10	92	125
卒 業 生														727	0	727
外 部		5						18						127	0	150
そ の 他															0	0
合 計	454	502	295	4,501	430	9	195	4,026	27	188	4	20	334	5,514	1,739	14,760

## 4-1. 計算機利用統計&lt;JOB件数&gt;

月	M-1700/10 (三田)	M-1600/8 (日吉)
4	12,877	1,047
5	13,354	1,315
6	13,050	1,341
7	9,568	937
8		1,252
9	3,059	534
10	13,059	788
11	9,101	745
12	9,003	854
1	8,017	944
2	8,627	883
3	10,404	1,200
計	110,119	11,840

## 4-1. 計算機利用統計&lt;CPU時間&gt;

月	M-1700/10 (三田)	M-1600/8 (日吉)
4	9.8	3.6
5	8.4	3.7
6	6.9	2.7
7	7.2	1.8
8		36.9
9	4	1.7
10	24.2	1.9
11	20.1	2
12	16	5.5
1	12.3	2.6
2	14.2	2.3
3	18.3	1.9
計	141.4	66.6



### メディアネット・メディアセンター URL 一覧

メディアネット	<a href="http://www.mita.lib.keio.ac.jp/medianet/index-j.html">http://www.mita.lib.keio.ac.jp/medianet/index-j.html</a>
三田メディアセンター	<a href="http://www.mita.keio.ac.jp/MediaCenter/index-j.html">http://www.mita.keio.ac.jp/MediaCenter/index-j.html</a>
日吉メディアセンター	<a href="http://www.hc.keio.ac.jp/MC/index.ja.html">http://www.hc.keio.ac.jp/MC/index.ja.html</a>
理工学メディアセンター	<a href="http://www.mc.st.keio.ac.jp/Welcome-j.html">http://www.mc.st.keio.ac.jp/Welcome-j.html</a>
医学メディアセンター	<a href="http://www.lib.med.keio.ac.jp/index-jp.html">http://www.lib.med.keio.ac.jp/index-jp.html</a>
湘南藤沢メディアセンター	<a href="http://www.sfc.keio.ac.jp/mchtml/">http://www.sfc.keio.ac.jp/mchtml/</a>
慶應義塾大学	<a href="http://www.keio.ac.jp/index-jp.html">http://www.keio.ac.jp/index-jp.html</a>

## 編集後記

メディアネット発足から5年が経ちます。この間、各メディアセンターの業務内容も時代に対応すべく変化し続けていますが、利用者はどのようにセンターをとらえているのでしょうか。5年という小さな節目を過ぎたところで、これまでのサービスのありかたを再確認することも大切と考え、本号の特集を組んでみました。

学生や教員の方々から貴重なご意見をたくさんお寄せいただきました。もちろん、利用者数全体から見ればほんの一部の声でしかありませんが、現時点でのサービスの受けとめ方を各利用者層から、あるいはキャンパスごとに、少しでも横断的に把握できた気がします。

“メディアの時代だからこそ、データを見るのではなく、現場を見ること” (池田教授) という言葉の中に、これからのセンターに寄せる期待を感じます。また、“OPACを見ても結果が出ないと書架まで進むことなく研究室に戻る者もいる” (原さん)、“図書館という空間が感性を働かせる場としても役立っている” (柏倉さん) などの言葉には、サービスにさまざまな側面があることを再認識させられます。特集記

事には他にも今後のサービスのありかたを示唆する部分が多々含まれています。

さて、メディアネットを取り巻く現在の環境に目を向けると、いくつかの大きな問題が存在します。例えば、長引く日本の経済不況は図書館資料の購入にも深刻な影響を及ぼしています。とりわけ外国雑誌の価格高騰と円安は、各メディアセンターに医学、理工学など、自然科学系を中心とした高額な継続誌の多数打ち切りという事態をもたらしました。

このような厳しい状況の中で、利用者に満足してもらえる体制をどのように作り上げていくかが課題となりますが、電子的な情報サービスをより積極的かつ効果的に取り入れることや、合わせてそのための機器やネットワークなどの利用環境を整備し、利用指導を行っていくことも必要となるでしょう。今回の特集記事で得られたご意見を新しいサービスの展開に役立てたいと思います。

なお、本号からサイズをA4にしてみました。表紙のデザイン、紙質も変え、さらに編集のDTP化も試みました。内容とともに読者の皆さんの批評を賜りたいと思います。

---

MediaNet 第6号 1998年10月31日発行

編集 MediaNet 編集会議

発行 慶應義塾大学メディアネット本部

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

電話 03-3453-4511 (内線 2502)

表紙デザイン 株式会社 AXHUM (藤田明浩)

印刷 有限会社 梅沢印刷所

MediaNet 編集会議

編集長 酒井明夫

編集員 藤井康子 布目和美 古賀理恵子 細川達己

森三枝子 降旗ゆかり 大塚加奈枝

五十嵐由美子 三谷三恵子 遠藤久美子

E-mail: medianet-edit@mita.lib.keio.ac.jp

**MediaNet**<sup>NO.6</sup> 1998



**Mita Media Center**



**Hiyoshi Media Center**



**Medical Information and Media Center**



**Information and Media Center for Science / Technology**



**Shonan Fujisawa Media Center**



*Keio University  
MediaNet*